特別でも異常者でも過負荷でも悪平等でもなく・・・？

がはら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
特別でも異常者でも過負荷でも悪平等でもなく・・・？

【Ｎコード】
Ｎ１９０７Ｔ

【作者名】
がはら

【あらすじ】
『めだかボックス』を読んでふと洩らした一言。「めだかボックスの世界に行ってみたい……」その一言を聞き《あのキャラ》が目の前に！？《あのキャラ》は【俺】に取引を持ちかけてきた。「めだかボックスの世界に飛ばしてやってもいい。だがその代わりあることをやってもらいたい」一体『あること』とはなんなのか！？

第0箱「取って付けたように」（前書き）

プロローグ的なものです。

第0箱「取って付けたように」

『めだかボックス』

【俺】の好きな作品だ
ジャンプの掲載順は後のほう
でも【俺】はあの作品が楽しみでジャンプを買ってると言ってもいい

あの作品は他の漫画となんだか雰囲気が違う
だから【俺】は今日も学校帰りにジャンプを買いにコンビニへ足を運ぶ

月曜日

テレビで得た情報だが…
たしか一週間の中で一番自殺が多い曜日らしい

理由は簡単だ
『憂鬱な一週間がまた始まる』という理解できなくもない心理

たしかにあの『国民的アニメ』が終わった後に来るなんともいえない虚脱感は
人によっては絶望と言い換えていいかもしれない

…なーんてことをジャンプ片手に自室で菓子を食いながら考えてみる

月曜はジャンプの発売日だ

そんな日に死ぬなんて【俺】には恐ろしくてできそうもない

～～～～1時間経過～～～～

「…マジで球磨川△だな」

（→△の意味がわからない人は誉め言葉とだけ覚えておいて）

もちろん『めだかボックス』を読み終えた感想だ

「……主人公を食っちまってる感が否めねーな」

なんて身も蓋もないことを言ってみる

「んあーーー……」

大きく伸びをしながら明日の時間割を思い出す

「あ、明日から体育マラソンなんだっけ……

……めんどくせーなー　……　それに引き替え『めだかボックス』の世界は面白そうだよなー

なーんか毎日がエブリデイ！みたいな？」

「そのネタまだ使ってる奴がいたとは驚きだね」

「……【俺】も自分で言っておいて後悔してるよ

……って今のダレ？」

【俺】はワケあって一人暮らしをしている
故に家族の内の誰かという選択肢はない

「ん？『ぼく』が誰かわからないのかい？
毎週楽しみにしてくれてるにしては随分とつれないじゃないか」

そこには安心院なじみ……さんがいた

「取って付けたように『さん』を足したね」

「モノローグにツッコまないでください」

第0箱「取って付けたように」（後書き）

完全なる行き当たりばったり作品です。書きながらストーリー考えてます。

第1箱「難しい話じゃないさ」（前書き）

なんかプロローグの続きみたいになっちゃった。あと展開早すぎ。
会話の繋ぎやテンポがおかしい。反省はしてない。

第1箱「難しい話じゃないさ」

さて…この状況は一体なにｇ

「『腑罪証明（アリバイブロック）』を使ったんだよ」

…『腑罪証明』ってたしかいつｄ

「そう、いつでも好きなときに好きな場所にいられるスキルのことさ」

……それは現実世界も例ｇ

「もちろんこの『世界』も例外じゃないよん♪」

……白髪ババａ

〈ゴヅン〉

頭突きされた

「……ここまでなんにも発言してませんよ【俺】」

額をさする

「わざわざ口を開かなくても【きみ】の考えていることは手に取るようにわかるよ

僕の持つ一京分の一のスキルの一つ

『想願叫（ハートフルボイス）』を使えばね」

まぁ作者もいちいちカギ括弧打つの面倒だろうから
助かるっちゃあ助かるかな？

「うんうん♪」

で？
なんでこんな思春期の男の子一人しかいないようなムサイ場所に？

「ん～改めて聞かれると…っていうより念じられると返答に困るなぁ
しいて言うなら【きみ】の悶々とした願望がたまたま！偶然！奇跡的に！
僕の心にダイレクトアタックを決めたから
その願望を叶えるために馳せ参じたのさ？」

最後疑問形かよ……

「まぁまぁ、人外の厚意は素直に受け取りなよ」

まぁ貰えるモンは病気以外ならなんでも貰うぜ？ニョホ♪

「よろしい☆
それじゃ餞別として僕のスキルをいくつか見繕って貸してあげるよ」

マジで！？
……なーんか怪しいなぁ

だいたいなんで悪平等の安心院なじみが？

【俺】なんて安心院さんにしてみれば
所詮そこらのゴミクズと一緒なんじゃ？

――――――数分後――――――

なんか門みたいなのを準備している安心院さん
たぶんさっきのモノローグも聞こえてたはず……

一体なぜ【俺】を？

「よし！この門を通れば晴れて君も箱庭学園の生徒の仲間入りだよ
……それと今君が思考を巡らせていたことだけど」

……やっぱり聞こえてたんだ

「実はね、折り入って【きみ】に頼みたいことがあるんだ」

【俺】に頼みたいこと？
人外の安心院なじみが？

「おいおい【きみ】、僕のことは親しみをこめて安心院さんと呼び
たまえよ」

今言うんですか……

これはまあ……自分ルールってヤツですよ
友達以外の人のことは心の中でフルネームで呼ぶことにしてるんです

「変わった自分ルールだね」

自分でもそう思います

……で？【俺】に頼みたいことってのはなんですか？

「ああそうだったね

ゴメンゴメン、つい脱線してしまったよ

本題は……いや、問題はここからだ

【きみ】を『向こう』に行かせてあげるかわりにやってもらいたいことがある」

やってもらいたいこと…ですか？

「ああ

なに、難しい話じゃないさ

ただ【きみ】に――――」

まさかこの時は『あんなこと』を頼まれるなんて【俺】は思いもしてなかった

第1箱「難しい話じゃないさ」（後書き）

スキル名とかはそのときそのときで考えます。
生ぬるく見守ってね♪

第2箱「そんなのどちらでも」（前書き）

絶賛迷走中！
やっと箱庭学園に入りました。

第2箱「そんなのどちらでも」

落ちている
【俺】は今落ちている

安心院さんがこしらえた門をくぐったら地面が遥か下方にあった

くぐったというか
くぐらされたというか
タックルされたというか

「仕方ないだろ？僕の腕は見てのとおり、ぶっとい螺子で封じられてるんだ」

「だからってタックルはないでしょタックルは」

ただいま安心院さんと大空をランデヴー中
あなたと私でランデヴー♪ほらランデヴー♪ほらランデヴー♪

「それじゃあ『あの件』、しっかり頼んだよ」

「しっかり頼まれました」

「ああそうそう！大事なことを忘れていたよ
【きみ】が『こっち』で物語を進めていくといずれ僕と会うことになると思う
だけどそれは別の僕だからね
困ったときに助力を仰げるなんて甘い考えは禁物だよ」

「わかりました」

だんだん地面が近づいてきた

「さてと、そろそろお別れだ」

「名残惜しいですね
もうちょっと安心院さんとおしゃべりしてたかったです」

「嬉しいことをいってくれるね
だけど残念なことに【きみ】と会うのはこれが最後になるだろうね」

「……そうですか」

「おやおや？寂しいのかい？」

「ほんのちょっとだけ」

「落ち込むことはないさ
そのうち嫌でも顔を突き合わせることになるよ
……《僕》とね」

「……でしょうね
……それじゃ！お達者で！」

その言葉を最後に【俺】は『その安心院さん』と別れた

「……さてと
そろそろ『安心院なじみ』でいられるのも限界かな
『スキルを貸し出す』なんて偉そうなことを言ってみたけど…
なかなかどうしてそんな必要ないくらいに多種多様なスキルをお持ちじゃないか」
徐々に体が消えていく『安心院なじみ』
「とはいっても【彼自身】自分にスキルがあるとは気付いてないみたいだけど」
クスクスと笑う
「【彼】のスキルはどれもユーモラスなものばかりだったなぁ…
アレとアレ、あとアレも！
特に《あのスキル》！
僕の《手のひら孵し（ハンドレッドガントレット）》によく似てたなー
……
……できることなら」
少し残念そうに安心院は言う
「できることなら僕ももっと【きみ】とおしゃべりしてみたかった

かな……

……なーんて、僕のキャラじゃないか♪」

そう言い残して『安心院なじみ』は――

「あ、言っておくけどフラグは立ってないよ？
あくまで『ただの話し相手として』って意味だからね♪」

……

そう言い残して『安心院なじみ』は（今度こそ）退場していった

一方その頃、安心院さんと別れた【俺】はというと…

「ゲハッ！ゴホッ！ガフッ！
ハァ……ハァ……ハァ……」

着地失敗で瀕死状態ＤＥＡＴＨ☆
激突した衝撃で地面が少しだけ凹んでしまった

全身の骨という骨が粉砕骨折
五臓六腑がズタズタ

こんな状態でも死ねないのはなんでだ？いや死んだら困るが

『僕のスキルを貸してあげるよ』

……もしかして安心院さん
『死延足』も俺に貸してくれたのだろうか？
……『死延足』って寿命が延びるだけなのかと思ってたな

――――――数分後――――――

しかし参った
死なないから命の心配はないものの指一本動かせない
喉も潰れて助けも呼べないで八方塞がりだぞ……
しかもどうやら【俺】が倒れている場所は元々人通りが少ないらしい
あんな轟音を打ち鳴らして地面に激突したってのに
さっきから人っ子一人見かけん

『大嘘憑き』（オールフィクション）みたいな
スキルがあればこんな状況も打破できるんだけど…
そこで【俺】は大変なことに気付いた

スキルについて説明なんにも受けてねぇし！！

途方に暮れていたら急に背後から声がしてきた

「おいおいおいおい
たまには真面目に登校してみるもんだな
まさかこんな場所で人間の死体に出くわすとは思わなかったぜ」

身動きがとれない上に背後に立たれているので声の主の顔は見えない
だが声色からして女の子には間違いない

「貴重な実験材料としていただいとくかな
一度でいいから生きてるのじゃなくて終わってるのを改造りたかったんだよ」
この言動で確信した……
名瀬夭歌だ！もしくはくじら？
…そんなのどちらでも同じか

とか考えてる間に首根っ子を掴まれてズルズルと引きずられていく

顔中包帯でグルグル巻き
頭にナイフがブスリ
オプションとしてボロ雑巾のような男の三点セット

こんな場面見られたら大変なことになるよ名瀬夭歌？
という見当外れな心配を抱きつつ【俺】は学園の門をくぐることに
成功した

第2箱「そんなのどちらでも」（後書き）

どう展開していこうかなぁ？
まさにノープランなのです。
あ、ノープランってスキル名に使えそうかも！

第3箱「もしやあなた」（前書き）

話が進むの遅いです。あと、今までの話を編集しなおしました。よかったら流し読みでいいんで読んでくれたら嬉しいです。至らないトコがあったら感想で指摘をば。

第3箱「もしやあなた」

〈タッタッタッタッタッ…〉

走っている…

〈タッタッタッタッタッ…〉

それはもう走っているとしか表現しようがないくらい走っている…

〈タッタッタッタッタッ…〉

……え？なぜ走ってるのかって？

そうだな……

それじゃあこの小説で初めての回想シーンにいってみようか

～～～～～15分ほど前～～～～～

「チッ……

森ガール一人きりじゃあさすがに骨が折れるぜ……

なんであんな場所に実験室を作っちまったかなー」

……と、ブツブツ文句を垂れながら名瀬さんは【俺】を引きずっている

たしか彼女は【十三組の十三人】（サーティン・パーティ）の一人だが身体能力は普通だったはずだ

ならば全身の力が抜けた男の死体を運ぶのは重労働だろう……
……まあ死んでないが

「まったく…一苦労だぜ…
…このイライラはコイツにぶつけさせてもらうかな」

……さて、このままでは俺は彼女に好き勝手に体を改造くりまわされてしまう
さすがに女の子に自分の体を見られるのは恥ずかしい

この状況を打破したくても体は動かないし声も出ないし
スキルを使おうにもどんなスキルがあるかわかんねぇし……

……待てよ?
そういや安心院さんってスキルを数える為のスキル持ってたよな?

なら…
『そのスキルがどういうスキルなのかを把握する為のスキル』
とかあってもおかしくないんじゃないか?

……ちょっと自分の中を探してみよ

……

……

うむむむ
スキル名はわかるみたいだがスキルの数も能力もわからないからどうすればいいのやら

「はぁ…はぁ…
やっと……着いたぜ……」

とかやってる間に実験室に到着してしまいましたとさ
やべぇ……早いトコなんとかしないとマジでシャレにならんぞ

「よっこらせっと」

〈ドサッ〉

手術台みたいなものに寝かされたようだ

「さてさて？
どんなデザインがお望みだ？
……まぁ聞いたところで死人に口なしだな……」

福山雅治みたいにお願い
……なんて言ってる場合じゃないっての！

〈ドルルン、ドルルン、ヴヴヴィィィィィン！！！〉

おいおいおいおい！
なんか不吉なエンジン音が聞こえてきましたよ！？
まさかチェンさん！？
チェンさん来ちゃった！？

「頭が邪魔だな……
最初に取り外しとくか」

いきなり頭から!?
う、うおおおぉぉぉぉ!
エンジン音が近づいてくるぅぅぅぅ!
ヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイヤバイってコレ!!

〈ガシッ!〉

「!!!」

……?
……なんだ?
エンジン音が遠ざかったぞ?

力を振り絞り目を開く【俺】
……力を振り絞ってやっとまぶたを開くだけってどんだけー
……で、一体何が起こった?

見てみるとチェーンソーを持った名瀬さんの腕を誰かが掴んでいた
……誰だ?

掴んでいる腕をたどっていくと……?
……えっ!?

【俺】だった
【俺】が名瀬さんの腕をガッシリと掴んでいた

……驚いた
だって今の今まで《自分の意志では》指一本動かせなかったのに
《腕が勝手に》動いたんだから

「コ、コレ生きてんのか？
こんな状態で……？」

まぁ一番驚いてるのは名瀬さんだろう
名瀬さんにしてみれば死体が急に動きだしたんだから
……にしても『コレ』はないんじゃないの『コレ』は…

「チッ
なんつー馬鹿力だ……
離しやがれ！うぜぇんだよ！」

腕を振り払われてしまった
と、同時にチェーンソーを振りかぶる名瀬さん…
……普通生きてるってわかったらやめない？

〈サッ〉

〈ズガガガガガッ！！！〉

「……チッ」

紙一重でかわせた……危ない危ない

【俺】の身代わりになってくれた手術台……プライスレス…

それはともかく早くこの場から逃げなければ！

「あ、待ちやがれ！」

聞こえなーいなーんにも聞こえなーいっと

～～～～～～～～～～～～～～～

こうして冒頭へと戻るわけなのですよ

〈タッタッタッタッタッタッ…〉

…やっぱりあった…ビンゴ！

走って逃げている間に『スキルの能力を把握するスキル』を見つけた

さてさて？今【俺】が走っていられるのはたぶんスキルのおかげだろう

さっそくこのスキルの正体を拝ませてもらおう

なになに？『生気者（ゴーストラップ）』……か

能力は……

『自らの意志や肉体のダメージを無視し、四肢それぞれがそれぞれの判断で動く』

……高千穂仕種のオートパイロットの劣化版……
いや……粗悪品みたいなもんか

あの時は体が解体されそうだったから《腕》がそれを拒否した
そんなトコだろう
……それにしても

痛ぇ……
メチャクチャ痛ぇ……
動かないはずの体を無理に動かされてるんだから痛みがないわけがない
実際絶叫したいくらい体中が痛いが喉が潰れてるのでそれすら無理という始末だ
使われてない教室でも見つけて少し休憩を――

〈ドンッ〉

「ほっ!?」

〈ドサッ〉

角を曲がったら人にぶつかってしまった
倒れた……【俺】の方が
謝りたいが声が出せない

「おやおや…
こんな老人とぶつかって倒れるとは……
最近の若者は足腰がなってませんねぇ」

あ、理事長

不知火袴理事長だ

「……あなた…この学園の生徒ではありませんね
何者ですか？」

体中ボロボロの怪我人を前に『何者ですか？』って……
さすが理事長というかなんというか……

「……そういえば随分と怪我をしていますね
大丈夫ですか？」

今気付いたんかいっ！！

「……先程から返事がありませんが……
もしやあなた喋れないのですか？」

【俺】は再び力を振り絞り首を縦に振った

第3箱「もしやあなた」（後書き）

私の頭の中では…

1行スペース＝同キャラのセリフやモノローグ間隔

2行スペース＝異なるキャラのセリフ間隔

3行スペース＝セリフからモノローグ、モノローグからセリフへの移行

4～5以上スペース＝緊張状態時などの演出

みたいな感じです。

第４箱「■■■■です」（前書き）

推理もどきみたいなのをいれてみました。

第4箱「■■■■です」

――――――1ヶ月後――――――

怪我は完治した
体中の骨も五臓六腑も喉もすべてだ
治るの早くね？と思われる方もいるだろう
自分でもどういうわけだかわからないが昔から怪我の治りは早いのだ

「怪我が治ったら来い……ってことだったけど」

あの時理事長に発見された【俺】は、理事長の計らいによって病院へと運ばれた
……でも何で見ず知らずの【俺】を助けてくれたんだろ？

「えー……っと
理事長室ってどこだ？
……校内の見取り図とかないのかな？」

あ！ちなみに今【俺】箱庭学園のお客様用入り口にいます

「待っていましたよ」

「あ！不知火さん！」

「ほっほっほっほっ
予想どおり右往左往していましたね」

「いやー恥ずかしながら……

……ってかどんだけ広いんですかこの学園!?
ここに来るまでにすでにちょっと迷っちゃいましたよ!?」

校門から入ってこのお客様用入り口に着くまでに軽く30分くらいかかった
……もとから少し方向音痴なこともあるが

「これはこれは申し訳ない
こちらで迎えの者を用意すべきでしたね」

「いやいや!
そこまでしてくれなくていいですから!
……で?
入院する時、『退院後、私のところに来てください』って言ってましたけど…
一体【俺】にどんな御用があるんですか?」

「……詳しい話は理事長室でしましょう
こちらですよ」

――――――理事長室――――――

「単刀直入に言います
この学園に入学して頂きたい」
「いいですよ」

「!」

「どうかしましたか？」

「い、いえ
少し新鮮な反応でしたので…
……いきなりこのような事を言われて動揺しないのですか？」

動揺もなにも最初からそのつもりなのです

「……まぁどこに進学するかまだ決まってませんでしたからね
【俺】個人としては願ったり叶ったりの申し出ですよ
……それより、１つ いいですか？」

「な、なんですか？」

「どうしてあの時見ず知らずの【俺】を助けてくれたんですか？」

「あぁ……そのことですか…」

心なしか少しホッとしているようだ
どんなことを聞かれると思ってたんだ？

「たいした理由はこれといってないのですよ
ただ、あのままではすぐにあなたにお迎えが来てしまうと思ったものですから
要するに、ただの人助け……といったところですよ」

「……ただの人助け？
この学園の生徒でもない
体中ボロボロで名前も知らない見ず知らずの男に
素性も聞かず治療費を負担し、その上自分の学園に入学までさせ

るのが
ただの人助けとは……【俺】には思えませんけど」

「……！
……」

「そもそもいきなり【俺】に『私の学園に入学しないか』なんて
聞いてくる時点でおかしいんですよ
普通そういうのって親とかに相談した上で
本人に意志確認するもんなんじゃないんですか？
なのにどうして入院中は一度もそんな連絡がなかったのに
今になっていきなりそんなことを？」

「……」

「……調べたんでしょ？【俺】の素性を…
……あの時【俺】は血塗れでしたからね
床や壁、不知火さんにぶつかった時にあなたの服についた血でもいい
その血からＤＮＡ鑑定でもして【俺】が誰なのか調べようとした」

「……」

だけど結果は……わからなかった
わかるはずがなかった
だって【俺】はあの時まで《この世界》には存在してなかったんだからな

「あの時……、【俺】と不知火さんが初めて顔を合わせた時
なぜかはわからないがあなたは【俺】に関心を抱いた

……でなければ素性を調べたりしなかったはずですからね
……だからこそあなたは入院する時に【俺】に
『退院したら私のところに来てくれませんか』と言った
あの時はたぶん【俺】が入院している間に【俺】のことを徹底的に調べあげて
退院したあとで集めた情報を【俺】に叩きつけ、
学園に引き込もうとしたんですよね？」

「……」

「だけどどういうわけだか【俺】についての情報は皆無」

見つかったとしても名瀬さんとかそのあたりぐらいだろうな

「そこであなたは計画を変更することにした
まあ変更といっても単純なものですよね
順序を逆にすればいいだけ
《調査》と《勧誘》の順序をね……
【俺】を学園に引き込んでからじっくり調査をするという段取りにしたわけだ」

「……」

「……なんちゃって☆」

「……ほっほっほっほっ
いやはや、なかなか面白い話でしたよ
だが所詮、推理は推理

現実ではありません」

「はい、そうですね」

「で？」

「はい？」

「あなたのお名前は？
入学するのであればそれなりの手続きを踏まねばなりませんからね」

「あぁそうですね！
【俺】の名前は……」

「■■■■です」

【俺】は名を名乗った

第4箱「■■■■です」（後書き）

ちなみにまだめだかや善吉たちは入学してない設定です。
名瀬さんもまだ一年生の設定。

入学式でめだかや善吉たちと同じタイミングで入学させるつもり。

あ、主人公の名前は手抜きじゃないよ？
ちゃんとありますから。

第5箱「彼にとって」（前書き）

この回で主人公の思考がどういうものかがぼんやりとわかります。

第5箱「彼にとって」

――前回に続き理事長室――

「……？
す、すみません
もう一度よろしいですか？
よく聞き取れなかったのですが……
（いや、聞こえなかったというよりも『耳』にはちゃんと届いたが
『脳』で理解できなかったといった方が近いかもしれませんね……）」

「……悪いんですけど
【俺】自分の名前はあまり好きじゃなくて
何回も言いたくないんですよ」

「しかしそれでは……」

「手続きに必要な書類だけ用意してくれればあとは自分でなんとかしますから」

「……わかりました
ならばあとはあなたにお任せしましょう」

「すみません、個人的なわがままで迷惑をかけてしまって……」

「いえいえ、お気になさらないでください

……ところで」

「なんですか？」

「お住まいはもうお決まりですか？」

「……」

わ……

忘れてたぁぁぁぁ！！！

今までずっと病院暮らしだったからすっかり……

「……

その様子ではどうやらまだのようですね」

「……はい」

「なんならこちらでいくつか物件を紹介しましょうか？」

「いいんですか！？」

「ええ、まあさすがに生活費などは工面できかねますが……」

「十分です！！

いえ！！十全です！！」

あとはバイトなりなんなりで稼げば問題ない

他人から強要される苦労は好きではないが

自分で苦難を乗り越えたりするのは嫌いじゃないからな

……べつにMってわけじゃないよ？

「ではそういうことで話を進めさせてもらいましょう
……最後に1つよろしいですか？」

「？」

「いやなに
簡単なテストのようなものをしてもらうだけです」

おもむろにサイコロを取り出す理事長
……例の『アレ』か

「サイコロで……テスト？」

一応とぼけてみる

「ええ
出た目によってあなたのクラスを決めようかと」

「……なかなかのプレッシャーがかかるテストですね
一年間過ごすクラスが『運』で決まるワケですか……」

「……『運』
まぁそれも大きな要因の1つではありますね」

「……まぁ普通に振って
普通な結果を出して
普通に受け入れるとしますよ」

「……随分と普通に拘るのですね」

「シンプル　イズ　ベスト
何事も普通が一番ですよ
普通が……ね」

「……」

「ほいじゃあ
いってみようやってみよう☆」

理事長の手からサイコロをひったくり机の上に放る

〈コロンッコロンッ〉
〈クルクルクルクルクル…〉

……サイコロたちが机の上で廻る……果たして結果は？

～～～～～～～～～～～～～～～

普通だった……
なんてことはない
いくら異常性や過負荷を複数所持しているからって
【俺】の本質は至って普通なのだ

「……なんていうか、普通でしたね……
まぁ【俺】自身、普通がいいって言ったから満足ですけどね」

「……そうですね
思ったような結果は得られませんでしたが……
一応あなたのクラスは決まりました」

「何組ですか？」

「それは入学式当日のお楽しみですよ
ほっほっほっほっ」

「じゃあもう帰っても？」

「ええ、構いませんよ
……ああそうそう
住むところが決まるまでの間はこの地図の場所を拠点にするといいでしょう」

「ありがとうございます
それじゃあ【俺】はこれで」

「ええ、……よい学園生活を」

――学園内廊下――

あーーー……
サイコロはちょっと残念だったなぁ

もう少し意外な展開を予想してたんだけど……

そのあと地図の場所を探して道に迷ったのは言うまでもないだろう

――――理事長室――――

「さてと
彼はやたらと《普通》に拘っていたようですからねぇ
希望は叶えて差し上げませんと
……それにしても
『思ったような結果は得られなかった』……ですか
我ながら洒落の利いたことをいってしまいましたねぇ……」

『このサイコロの状態』を普通と言ってのけるとはたいしたものですね……

……いや
彼にとって『この状態』は不可解でもなんでもない
普通のこと……というワケでしょうかね

『結果は得られなかった』

否

『結果はでなかった』

なぜなら

数分前彼が放ったサイコロは

いまだ勢いが衰えることなく机の上でクルクルと廻っているのですから……

第5箱「彼にとって」（後書き）

ちなみに理事長が主人公の名前を理解できなかったのもスキルの能力のせいです。

第6箱「はじめましてだよ☆」（前書き）

今回からモノローグに（）やめました。あと「」の前のキャラの頭文字も削除。

ストーリーはナメクジ並のスピードで進行しとります。

第6箱「はじめましてだよ☆」

サイコロテストから2週間後
住むところは決まった
……ただ家賃と生活費を稼ぐのにバイトをしなければならない
もちろん1つでは足りるわけはない
よっていくつかバイトを掛け持ちするつもりだ

バイトをやるなら……
何かいいスキルはないものか…
と、探してみたらおあつらえ向きなのが2つ見つかった
……でもそのうち1つは下手をすればちょっとした噂になってしまう
だから1つは候補から外した

《眠れぬ檻の非情（スリーピングルーティーン）》

これがバイトで使うつもりのスキルの名だ
単純に《疲れない》というスキル
無論、スキル名にあるとおり眠らなくても……
大丈夫だ、問題ない

ちなみに不採用になった方のスキルは《五人式（クインデッド）》という
《自分を含める5人の自分を出現させる》スキル……
……ぶっちゃけて言えば5人限定の分身の術だ
5人でバイトをすればその分稼げるが……
同じ時間帯に違う場所で姿を見られたら厄介だ
……まさか5つ子だなんて言い訳もないだろう

まぁそんなこんながいろいろあって入学式当日

「今日は入学式だから早く行かないとな……
……げっ
みずがめ座最下位かよ……」

最近ちょっと驚いたことがあった
めざましテレビが放送されていたのだ
めざましテレビだけじゃない
【俺】が元いた世界でも放送されていた番組がいくつかあった
これはテレビっ子の【俺】には嬉しい収穫だ
……だがまぁ多少変わっているところもある
たとえばジャンプにめだかボックスが掲載されてなかったりとかだ
どうやらこの世界にとっても最低限のルールは存在するらしい

「さてと……それじゃ
イテキマース」

……って自分以外に誰もいない部屋に
どこぞのＡＩＢＯみたく挨拶してみてもむなしいだけだな

『キング・クリムゾン！！！』

「……というわけで校門前です
……ん？人だかりができてる……なんだ？」

行ってみると掲示板にクラス分けの貼り紙がしてあった

「うわぁ……
コレ全員新入生かよ……」

ザッと見てみても２００人くらいはいる
もう校内に入ってる人もいるだろうにそれを差し引いてもこの人数
……

「まぁ１３クラスあるからな……
１クラス４０人として考えるとこれくらいになるのは妥当か……
さてさて？
俺は一体何組なのかなっと」

これだけ人数がいるのだ
すぐには見つかるまい……

「と思ったらもう発見
１年１組か……
１組はノーマルだったよな？たしか」

黒神めだかの幼馴染みである人吉善吉も１組だったからな
接点が作りやすいにこしたことはないだろ

「そんじゃま、さっさと教室に……」

〈ドンッ〉

「うおっ！？」

人混みにぶつかって倒れた
……なんかぶつかったり倒れたりが多いな【俺】

「あたたた…」

〈ぽきゅっぽきゅっぽきゅっ〉

「ごめ～ん♪大丈夫？」

ん？
この底抜けに明るい声と独特な足音……
もしかして……

「でもそんなトコでぼけっとアホ面さげてる【キミ】も悪いよ？
そんなボケボケしてたらあっという間に喰われちゃうから
……社会という怪物に☆」

やっぱりな…
『不知火半袖』……
まさかこんな早いタイミングで出会うことになるとは思わなんだ

「……悪い悪い
朝弱くてさー【俺】
その上今日は入学式だろ？
緊張して昨日ろくに眠れなかったんだよなー
だからついボーッとして……」

「あーわかるわかる！
あたしもコーヒー飲んだあととか眠れなくなるもん☆」

「……えっと
今のはツッコむべき？」

「べきべき♪

……？

あれ？もしかして【キミ】ってお爺ちゃんが言ってた……
■■くん？」

！！！

なぜ【俺】の名前を！？

……ああ、なんだ
あのスキルを発動し忘れてた
前にも言ったが【俺】は自分の名前が好きじゃない
完全に名前負けしてるし厨二丸出しの名前だからだ
まあ理由はそれだけじゃないが…

とにかくそういうことだから【俺】はあるスキルを常に発動させている
正直他人からしてみれば「なんだそのスキル」というような代物だっていうか安心院さんから貸してもらったスキルのほとんどがそんな感じだ
まぁ１京以上あるんだからなかには用途のよくわからないのもあるだろうさ
そのスキルというのが……コレだ
ワン・ツー・スリー♪

《戒名（アンコール）》

端的に言えば《他人に自分の名前を呼ばせない》スキル
このスキルを発動していれば誰も【俺】の名を呼べない
呼ぼうとしても出てこないし、まず理解ができないのだ
先日の理事長との対話中、理事長が名前を聞き返したのもこのスキルの所為だ

……故に【俺】が驚いたのは、
不知火が【俺】の名前を知っていたことではなく
【俺】の名を呼んだことに驚いたのだ
【俺】の名前を知ってたのは……
たぶん【俺】が書いた書類を理事長にみせてもらったとかそんなとこだろう
Ｄｏ　ｙｏｕ　ｕｎｄｅｒｓｔａｎｄ？先輩？

「あれ？【俺】どっかでキミとあったことあった？
……っていうかお爺ちゃんって何のこと？」

我ながら名演技だねまったく

「いんや→
あたしたちは、はじめましてだよ☆それが正解
お爺ちゃんってのは……
ほらっ【キミ】理事長に会ったことあるでしょ？
アレあたしのお爺ちゃんなんだよね♪」

「マジで！？（知ってるけどね）
言われてみればアホ毛とかそっくりだな……
そっかぁ……あの理事長の…
あ、ところでキミの名前は？」

「あたし？
あたしは不知火半袖☆
気軽に『袖ちゃん』って呼んでくれていーよ♪」

「そっか、よろしくな袖ちゃん
【俺】は■■■■だ
気軽に『おい』とか『ちょっと』とか呼んでくれていーから」

「…？
えと……ゴメン
もう一回言ってくれない？」

《戒名》だ

「悪い袖ちゃん
【俺】自分の名前は一回しか言わないことに決めてんだ」

「……そう
なら仕方ないね♪」

その後【俺】と《袖ちゃん》は他愛もない雑談を交わしながら教室に向かった
……たしかこの時点では不知火と人吉善吉は知り合ってないはず

2人は『消しゴムを拾った』と『拾われた』仲だったよな？
じゃあ少なくとも2人に接点ができるのは授業が開始した後か……
なかなか長いな……
……気長に待つか

こうして【俺】は入学式を無事に終えた
……どうでもいいことだが
クラスでの自己紹介の時にクラス中が「？」となったのはいい思い出だ

第6箱「はじめましてだよ☆」（後書き）

うろ覚えなので原作に沿ったシーンが出てきたらキャラのセリフとか微妙に変えるかも。
最悪ハショります。

第7箱「……が！駄目！」

――入学式から1ヶ月後――

《戒名》の効果もあってか友達はほとんどできなかった
そりゃ名前も呼べないような奴と友達になろうなんて物好きはいないだろう
なので昼休みになると決まって図書室に通った
教室にいるのは気まずいからな
……はいそこ！ぼっちとか言わない！泣いちゃうよ！

そんな【俺】によく話し掛けてくれるのが袖ちゃん
ありがとう……袖ちゃん……
……なんて感情はまったく湧いてこず、
ただただ彼女に対して物好きな奴だとか変わった奴という認識が深まった
変り者の心理は理解できんなまったく

「あれあれー？
『今日も』図書室に行くの？」

「……やけに『今日も』を強調するね袖ちゃん
キミは他人の心にズカズカと土足で踏み込むことをヨシとする人なのかな？」

「あひゃひゃひゃ☆まっさかー
あたしがそんな酷い奴なわけないじゃーん
ただ心の傷に塩を塗りこむのが好きなだけの
ピュアで可憐な乙女だよ♪」

「……マジぱねぇッス不知火さん」

「……なに漫才やってんだ？お前ら」

「あ、人吉☆」

「おいおい聞いてくれよ善吉っちゃん
ここにおわす不知火様が【俺】をいじめてくださるんだよ
お前からもなんとか言ってくれない？」

袖ちゃんを通じて善吉っちゃんと知り合うのに
そんなに時間はかからなかった
……なんて言い方したらまるで狙ってやったかのように思われるだろう
だが【俺】はべつに自分から近づいていったわけではない
袖ちゃんが善吉っちゃんと学食に行こうとしてるときたまたま居合わせた【俺】も誘われた……
というような感じだ

最初の頃は善吉っちゃんは【俺】に多少不信感を抱いていたようだ
名前が呼べないんだから無理もない
でもここ最近は普通に向こうからも話し掛けてくれるくらいにはなった

「……いじめられてるのが全然嫌そうに聞こえないのは俺の気のせいか？」

「何言ってんだよ善吉っちゃん（棒）
この【俺】がいじめられるのが　好きな変態なわけないじゃない

かー（棒）」

「「……」」

「……冗談だよ冗談
2人共マジに引くなって」

「冗談に聞こえなかったぞ……」

「あひゃひゃひゃ☆
まぁ笑えない冗談はさて置いて……」

「さて置かれた!?」

「早く学食行こうよ2人共♪
昼休み終わっちゃうよ?」

「まだ昼休み始まって5分しか経ってねぇじゃねぇか」

……みたいなやり取りをしながら【俺】たちは足早に食堂に向かった

食堂

昼休みの食堂のこみ方は凄まじい
ただそれだけ言っておこう

「……で?」

「？」

「『？』じゃないよ善吉っちゃん、投票だよ投票」

「ああ……その話か」

そうなのだ
時すでに生徒会選挙の時期なのだ
いやはや『キング・クリムゾン』って恐いね（笑）

「ちっちっちっ
じつは人吉の分の票はあたしが勝手に入れときました♪」

「なっ！？
不知火！テメー何勝手なことを！？」

「えー？べつにいーじゃんさー
どうせ誰に入れるか最初から決めてたんでしょ？」

「え？そなの？ダレダレ？」

知ってるが一応形式的に聞いとく

「憶えてる？
あたしらと同じ1年生のくせにやたらとデカイ目標を掲げてた娘だよ」

「ああ！
全国模試では常に上位をキープしていて

偏差値は常識知らずの９０を記録
スポーツでもあらゆる記録を総なめにし、手にした賞状・トロフィー数知れず！
しかも実家は世界経済を担う冗談みたいなお金持ち！
……てゆーまるでチートを擬人化したような子だよね？
何？善吉っちゃんもやっぱりああいうのがタイプなわけ？」

「んなっ！？
バ、バカ言ってんじゃねぇよ！
んなわけねぇだろ！
誰があんな化け物女なんか―」
「でも幼馴染みなんだよねー☆」

「不知火テメー！！いい加減にしろ！！」

「マジか善吉っちゃん！
はぁ～なるほどねぇ……
あ、なら幼馴染みのよしみで生徒会に入ったりすんの？」

「カッ！
それはねぇな
たしかに黒神とかは幼馴染みだが…
もういい加減あいつに付き合わされるのはうんざりだからな」

「「ふ～～ん……」」

そうは言うが善吉っちゃん
善吉っちゃんは生徒会に入るぜ
いや、入ってもらわなきゃならないんだよ
そうじゃなきゃ『物語』が始まらないじゃないか

『物語』が始まらなきゃ…
【俺】が安心院さんから頼まれた『例の件』が果たせないよ……

～～～～第1箱にて～～～～

ことの始まりは【俺】がこっちにやってくる直前に遡る

「『修正』？」

「そう『修正』
まあ『矯正』でもいいけど」

「はぁ……、っていきなり言われても意味がわかりません
一体全体あっちに行って何を修正すればいいんですか？」

「ストーリーだよ」

「……は？『すとおりい』？」

「そ♪」

「いやいや！『そ♪』じゃないですよ『そ♪』じゃ！
頼みますからちゃんと説明してくださいよ」

「実は【きみ】の知ってる『あっち』の流れと、
僕が知る『あっち』の流れにわずかばかりの差異が起こりつつあるんだよ」

……差異ねぇ

「できることなら『こっち』の問題は『こっち』で済ませたい
まあ僕が本気になればこの程度の問題はチョチョイのチョーさんなんだけどさ
なにぶん今は『彼』の手によってご覧の有様だからね」

そう言って螺子だらけの体をズイッと見せてくる安心院さん
……てゆーかチョチョイのチョーさんて何？

「なるほどね……でも何で【俺】なんですか？
『あっち』には黒神めだかや球磨川禊みたいなキャラが大勢いるんだから
彼らに頼れば――――」

「駄目なんだよそれじゃあ
彼らはあくまで『あっち』の世界の住人だ
たとえ強烈で強力で強堅なキャラを誇っていてもやはり『奴ら』にねじ曲げられてしまうんだ」

「まるで試したような口振りじゃあないですか」

「試したさ
試しに試した
試しに試して更に試してみた
……が！、駄目！
試しに１５５３２回ほど試してみたが同じことの繰り返しだったよ」

「あなたはどこのヒューマノイドインターフェイスですか」

「僕は人外だぜ☆」

「知ってますよ
……で、原作のキャラが太刀打ちできないなら『こっち』から援軍を
ってことですか」

「そうそう」

「なぜ原作キャラに頼らないのかはわかりました
……で？
あらためて聞きますがなぜ【俺】なんですか？」

「べつに【きみ】に狙いを定めてやってきたワケじゃないぜ？
『この事態をなんとかできるかもしれない可能性のところへ』
って念じながら《腑罪証明》を使ったら――――」

「【俺】のところへ来た、と」

「そゆこと」

「なんか釈然としない」

「とにもかくにも【きみ】のところに来たのは正解だったようだ」

え、どうしてそうなった

「あれ？てゆーか原作のねじれを修正するって言ってますけど
【俺】を送り込んだらそれこそ原作が歪むんじゃないですか？」

「その点は大丈夫、問題ないさ
『あっち』での修正（仕事）を終えて『こっち』に戻ってくれば修正（結果）を除いて、【きみ】がした行動はすべてなかったことになるから」

「……雑ですね」

「複雑なんだよ」

「まあおおまかな仕事内容はわかりましたけど……
肝心の修正方法はどうするんですか？まさかマンガだけに修正液をドバッと？」

「雑だね」

「雑です」

「だけどもっと雑でいいんだよ
【きみ】は『あっち』で普通に学園生活を楽しめばいい
そうすればおのずと『奴ら』から仕掛けてくるだろうぜ
『イベントの変化』っていう攻撃（形）でね」

「……さっきから聞いてて気になってたんですけど『奴ら』ってなんですか？
【俺】はてっきり現象を相手に修正するもんだと思ってたんですけど……」

「それで合ってるぜ
『奴ら』は現象でありながらも人の形をしているんだ

まるでカメレオンが使う擬態のようにカモフラージュしてる」

「……まさかねじれの修正方法ってのはもしかして？」

「そう！元凶である『奴ら』を一人残らず倒せばいいのさ！
簡単すぎて笑っちゃうよね」

「やっぱりかー！！！
ってか一人じゃなくて組織なんですか！？むしろそこにビックリなんですけど！」

「いや、詳しい人数はわからないけどとりあえず言ってみただけ」

「……雑ですね」

「この場合は『適当』が妥当だと思うけど？」

「とりあえずその……
現象だか人間だかよくわかんない『奴ら』を倒せばいいと？」

「ルート」

「へ？」

「『ルート』ってのはどうだい？呼び方がないと不便だろう？」

「……そのこころは？」

「物語の筋道を変える……
本来それは原作者のみに許された特権

しかしその権限を奪い、自分たちの好き勝手なＩＦにすげ替える故に『侵攻役（ルート）』さ」

「『侵攻役（ルート）』……
なかなか中二っぽくて【俺】好みのネーミングですね
少し無理がある気がしなくもないですけどいいと思いますよ」

「やっぱり？僕もそう思ってた」

過負荷（マイナス）
悪平等（ノットイコール）
そして侵攻役（ルート）
……いよいよ数学じみてきたな
まあ大げさな名前を付けてみたところで『奴ら』はまったく知らないわけだが

「たぶん【きみ】が『あっち』に着いてもしばらくは大丈夫だと思うよ
さすがに『奴ら』が起こすねじれを片っ端から消していけば気付かれるけど」

「でもそれをやらなきゃなんないんでしょ？」

「よくわかってるじゃないか」

微笑む安心院さん
まあこの人のスキルを貸してもらえるならなんとかやってけるだろ

〜〜〜〜〜回想終了〜〜〜〜〜

だから善吉っちゃん頼むぜ
まずは善吉っちゃんが生徒会に入るのがスタートなんだからよ

で、めでたく黒神めだかは生徒会長に当選しましたとさ

「「よかったね人吉クン♪」」

「俺に振るな!!」

第7箱「……が！駄目！」（後書き）

今、いろんなサイトを見まくってめだかボックスのストーリーを思い出してます。
いっそのこと単行本ほしいけど持ち合わせがないのです……。

第8箱「すっかり忘れてたぜ」（前書き）

決めました。私なりのアレンジを加えて展開させていきます。

原作に沿っていこうか、オリジナルストーリーでいこうか迷いましたが……。

今回主人公のテンションちょい高めです。

第8箱「すっかり忘れてたぜ」

――――――1組教室――――――

「いやーはっはっはっはっ
本当に生徒会長になったね」

「カッ！昔からそういう奴だったんだよあいつは！
やろうと思ったことでできなかったことなんかない
できるのが当たり前
むしろ他の奴ができないことが理解できない
そんな奴なんだ
生徒会長になれたのも至極当然のことだぜ」

「へぇ～♪なんだかんだ言って信頼してたんじゃん☆」

「してねぇ！
あと語尾に☆とか♪付けんな！
この小説読んでる奴らが不知火と間違うだろが」

「意識して付けてみました☆」

「…お前、不知火に似てきたな」

「いや～それほどでも～」

「誉めてねぇ」
〈ぺしっ〉

チョップされた

「あひゃひゃひゃ☆
男同士で何イチャついてんの？気持ち悪いよ♪」

噂をすればなんとやらだな

「いやね？善吉っちゃんがさ、常日頃から袖ちゃんの食いっぷりに憧れてて
よければ毎日でもメシを奢ってやりたいって話を聞いてたトコなんだよ」

「はぁっ！？おまっ！？んなこと言って――」

「へぇ～（にやり）
そうだったんだ人吉ィ～♪
なんなら今からでも見せてあげるよ？
さあ食堂に行こう！
……もちろん人吉の奢りで」

〈ガシッ〉

「ちょっ！？」

ズルズルズルと引きずられ始める善吉っちゃん

「レッツラゴー♪」

「古っ！
じゃねぇ！離せ不知火っ！」

「善吉っちゃん
困った時に備える心と書いてなんと読む？」

「あぁ！？知らねーよ！」

「困憊☆」

「うるせぇ！」

「君の瞳に困憊☆」

「覚えてろよテメーぇぇぇ……」

廊下の彼方へと消えていく二人
南無三、成仏しろよ善吉っちゃん

「さて、今日はもう善吉っちゃんの顔は見れないな
顔を合わせた瞬間に殴りかかられそうだし……
……帰るか」

まだ午後の授業があるが……
たまにはサボるのもいいだろう

「ま、これも青春の１ページと思わなきゃね」

自分に言い訳して帰り支度を始める【俺】

「おい待て」

今から帰れば『ごきげんよう』には間に合うな

「おい……そこの【貴様】だ」

なにが出るかな♪なにが出るかな♪

「おい……」

ごきげんようを観終わったら昨日録画してあった魔女の宅急便を……

……

「『魔女の宅急便』はいいから私の話を聞けっ！！」

「……モノローグにツッコまれたのはこれで二度目だよ」

教室の出口、つまり【俺】の背後に噂の生徒会長様……

黒神めだかが『凛ッ！！』と立っていらっしゃった

……ここはやっぱり自己紹介しなきゃだよな

うん、自己紹介は大事だ

ちゃんと相手の印象に残るような自己紹介にしなきゃ

【俺】は思わせ振りに振り返り……

『「（はじめましてめだかちゃん。）」』

『「（俺だよ。）」』

「!?」

「……なんてね
ちょい括弧つけすぎました?
そんな怖い顔して睨まないでくださいよぉ~
せっかくの美人が台無しになっちゃいますよん?」

「……
(一瞬『あの男』とダブって見えたが気のせいか……
よく考えてみれば私の知る『あの男』とは雰囲気が違った……
……ではなぜ【この男】と『あの男』がダブって見えた?)」

「会長さ~ん?
聞こえてます~?」

「このクラスに人吉善吉という者がいるだろう?どこにいるか知らんか?」

「おおぅ……いきなりですね…
善吉っちゃんなら今頃袖ちゃんと仲睦まじく
食堂でメシを食ってると思いますよ?」

「ソデチャン?」

「不知火半袖ですよ
『半袖』だから袖ちゃんです
……それにしても
麗しの生徒会長自ら出向いてもらえるなんて……
善吉っちゃんが羨ましいです」

「善吉の奴、また不知火と……ブツブツ」

聞いちゃいねぇ

「……まあいい
ところで……貴様は何をしている？
午後の授業がまだあるのだから……
まさか帰り支度というわけではあるまい？」

「そのまさか……だったらどうします？」

「学生の本分は勉学だ
それを怠るというのならば止める他あるまい」

「じゃあどうあってもそこをどいてくれないんですか？」

「そうなる」

「何を言っても？」

「ああ」

『「（のいて。）」』

「！？」

「……って言っても？」

「あ、ああ
（ま、またダブって……
【この男】、一体……？）」

「……なら仕方ないですね
今日のところは諦めますよ…
あ、善吉っちゃんに用があるなら【俺】が伝言頼まれますよ？」

「……そうか
そうしてくれると助かる
なら『放課後、生徒会室に来い』と伝えてくれ」

「はいはい承りましたー」

「……そういえば【貴様】の名を聞いていなかったな」

「あっ、【俺】■■■■っていいます」

「そうか、いい名だな」

「ありがとうございます」

……聞いたところで無駄だろうけどね
《戒名》がある限り誰も【俺】の名前を呼ぶことは――

「ではな、■■同級生」

「！！」

《戒名》が効いてない！？
そういや今名乗った時も聞き返さなかった……
……『完成（ジ・エンド）』の名は伊達じゃない…か
もしくは《戒名》を使いこなしきれてないだけ？

その後、食堂から帰ってきた善吉っちゃんに
ドロップキックをお見舞いされ保健室に直行した
……すっかり忘れてたぜ

第8箱「すっかり忘れてたぜ」（後書き）

やっと出ましためだかちゃん。

さて、皆さんお気付きですか？

まだ原作の1話目にも辿り着いてないんですよ？

笑えちゃうね！（´∀`）

第9箱「普通の奴さ」（前書き）

今回はちょっとしたクイズ入れてます

あと、ちょっとずつお気に入りにしてくださる人が増えるのは嬉しいですね（´∀`）

第9箱「普通の奴さ」

――――放課後・生徒会室――――

〈コンコン〉

「入るぜ生徒会長さん」

〈ガラッ〉

凛ッ！

「んなっ！？な、ななな……」

「おお来たか
待っていたぞ善――」

「凛ッ！じゃねぇよ凛ッ！じゃ！
なんで服を着てないんだよお前は！？」

「ああ、着替えていたものでな
そこにたまたま……」

「だったら少しは隠すなりなんなりしろよ！
なんで堂々と仁王立ちなんだよ！？」

黒神めだかに背を向ける人吉善吉

「隠す？……ふっ」

「なにがおかしいんだよ
……ってか服着ろ」

「この私に隠さねばならないような部分は微塵たりともないっ！！」

凛ッ！

「……ああそうですかー（棒）」

ため息をつく人吉善吉

「時に善吉」

「なんだよ？」

「『生徒会長さん』などとつれない呼び方はするな
私とお前の仲ではないか
昔のように『めだかちゃん』と呼ぶがよい」

「カッ！誰が呼ぶか！
……で？俺になんの用だよ
まさか『めだかちゃん』と呼ばせたいがために呼んだわけでもねぇだろ」

服を着る黒神めだか

「うむ、貴様に一つ用が…

いや、二つだったか」

「……なんだよ
もったいぶらずに早く言えよ」

おそるおそる黒神めだかが服を着たか確認する人吉善吉

「まず1つ目だが……
生徒会に入らないか？
今なら庶務の座が空いているぞ？」

「カッ！想定内の質問すぎて逆に笑えてくるぜ！
答えはＮＯだ黒神！
そもそも生徒会はお前以外いねぇじゃねぇか
勧誘するならせめて『副会長』クラスの座ぐらいちらつかせろってんだ
なんで庶務限定なんだよ？」

「何を言う
いくら幼馴染みといえど
なんの功績も残しておらん者をいきなり『副会長』にすることなどできん！
『副会長』の座が欲しいのならば這い上がって出世するのだな
なんなら『会長』を狙ってくれても構わんぞ？（笑）」

「……ふん
どっちにしろ入る気はねぇから関係ないけどな……
で？２つ目はなんだよ」

途端に真剣な表情になる黒神めだか

「貴様に伝言を頼んだ男のことなのだが……
一体何者だ？」

「は？伝言を頼んだ男って……
…あぁ【アイツ】のことか？
何者も何も俺や不知火と同じ一組生だぜ？
どこにでもいる普通の奴さ
誕生日は２月１日、星座はみずがめ座、酉年、血液型はＡＢ型、
身長は１６５ｃｍと小さめ、体重は５２ｋｇ、髪は黒、瞳も黒、
足の大きさは２５．５、若干猫背、たれ目で少しボーッとしてる
だけの
どこにでもいる普通の奴さ」

「……やけに詳しいな善吉
少し気持ち悪いぞ」

「あ、いや
俺もよくわかんねぇけど
急に【アイツ】のプロフィールを説明しなきゃいけない気がして
……
……まあ唯一変わってるトコがあるとしたら名前が呼べないこと
ぐらいだな」

「名前が呼べない？どういうことだ？」

「言葉どおりの意味だぜ
入学式の日にクラスメイトの自己紹介があったんだがよ
一組生の自己紹介だからたまにひょうきんな奴がいたりするだけで
これといって目立った奴はいなかったんだ……

でも【アイツ】の番が来た途端不思議なことが起きてな」

「不思議なこと？」

「誰も【アイツ】の名前を聞いてなかったんだよ
いや聞いてなかったってーよりも誰もわからなかった、
の方が正しいな」

「……」

「信じられるか？
１人１人自己紹介してるんだからクラスは静まり返ってる
だから聞こえなかったなんてことはありえない
にも関わらずクラスメイト全員【アイツ】の名前がわからなかったんだぜ？
なかには『幽霊なんじゃ？』なんて言いだす奴まで出てくるくらいだ
俺もぶっちゃけ最初は気味悪かったが……
話してみると意外と親しみやすい奴だったよ
……まぁ俺が【アイツ】について知ってんのはそのくらいだ」

「それはおかしいな」

「だろ？名前が呼べないなんておかし――」

「そこではない
いや、それも十分おかしいのだが……
……呼べたのだ」

「なに？」

「私は呼べたのだ
【奴】の名を……」

「はぁ!?どうやってだよ」

「私は特に何もしていない
だが昼休みに【奴】と話した時名前を呼んだら驚いていたな」

「俺がいない間にそんなことがあったのか……
あ、なら【アイツ】の名前をお前の口から教えてくれよ
自己紹介の時に名前を聞きそびれたからもう一度聞いたんだけどよ…
『【俺】自分の名前嫌いだから』の一点張りで教えてくれねぇんだよ」

「ふむ、たしかに友人の名が呼べないというのは不便だな」

「だろ?【アイツ】自身は『おい』とか
『ちょっと』とかでいいって言ってるけど
友達の名前ぐらい呼びたい―」

「だが断る」

「な、なんでだよ?
てか最後まで言わせろ
……そしてなぜ岸辺露伴?」

「本人が『自分の名は嫌いだからあまり名乗りたくない』と言ってるのだ

それを無視する権利は私にはない」

「だ、だけどよ……」

「そもそも一度は自己紹介しているということは
『名乗りたくない』という信念を曲げてでも
周りの者たちに自分の名を知るチャンスを与えたということだ
そのチャンスを掴めなかった貴様たちが油断しすぎだ」

「そうは言ってもよ
やっぱ友達の名前は知っときたいだろうが」

「……たしかにそれも一理ある
……そうだな
ならいくつかヒントをやろう
ヒントをやるくらいならあの者の信念を曲げることにはならんだろうしな」

「……カッ！
いいぜ…それで妥協してやるよ
クイズとかは嫌いじゃねーし」

「ではゆくぞ？
・名前は姓と名を合わせて漢字４文字
・姓は福岡県の地名
・姓が●▲だった場合、名の方は▲●という形になる
つまり『人吉』という姓なら名の方は『吉人』になるという具合だ
・『あ』を数字の１、『い』を２、『ん』を４６、『が』を４７に置き換えた時

名前の総和は２５０になる
・名前をローマ字にすると子音は7、母音は5になる
ただし『ん』は『ｎｎ』ではなく『ｎ』
『し』などは『ｓｉ』ではなく『ｓｈｉ』とする
・漢字で表した場合、名の読み方は厨二っぽい
・イニシャルはＭ・Ｔ
この場合Ｍは名、Ｔは姓

……どうだ？これでわかりそうか？」

「……」

「たしかに聞いただけでは女っぽい名前だと思うが…
キレイないい名前ではないか
なぁ！善吉！……ん？
どうした善吉？これだけ大盤振る舞いしたのだ
まさか解らないなどとは…」

「わかるかーー！！！」

まさか自分の名前がクイズになってるとは夢にも思わない主人公なのであった

「へェックション！ズズッ……

……誰か【俺】の噂してるな」

第9箱「普通の奴さ」（後書き）

・文章読みにくいんだよボゲッ！

・がぁぁぁはらくんよぉぉぉぉ！なんだぁぁ？その思わせ振りな行間はぁぁぁ？

みたいなことがあったら遠慮せずに感想に書き込んでくださいね。
皆さんのアドバイスを反映させてこの作品は進化します！
Bキャンはなしです！

第１０箱「デジャブ！？」（前書き）

買ってきましたブルォッコリー！
……じゃなくて原作コミック

原作独特の印象的なセリフは入れたい……けどオリジナリティが無くなりそうで怖い。

そんな葛藤の末、１～３巻まで買っちゃいました。

第１０箱「デジャブ！？」

――――前回に続き生徒会室――――

「そういやクイズに気をとられて聞き忘れてたがなんでいきなり【アイツ】のことなんか聞くんだよ？【アイツ】、なんかやっちまったのか？」

「……ふっ」

「あ？なんだよ？なんかおかしなこと言ったか？」

「いや…
【本人】も似たようなことを言っていたのでな
思い出し笑いというやつだ
……なぜ【奴】のことを聞いたか、だったな」

「ああ」

「【奴】と顔を合わせた時…
いや、顔を合わせた瞬間と言ったほうが正確か…
……『あの男』に似た雰囲気を感じたのだ」

「『あの男』？『あの男』ってどのおと……
……！！？」

「……思い出したようだな」

「お、おいおい！？
ちょっと待てよ黒神！
【アイツ】が『アイツ』と似てるってどういうことだよ！？
いくらなんでも突拍子がなさすぎるぜ！！」

「落ち着け善吉
『似てる』などと言っていない
『似た雰囲気を感じた』と言ったのだ」

「…どっちも似たようなもんだろうが…
……そもそも『アイツ』と同類ってんなら肌で感じる気持ち悪さがあるはずだろ？
たしかに【アイツ】は少し変わってるけど
そんな気持ち悪さは感じなかった……
さすがに『アイツ』と同類扱いはないんじゃねぇか？」

「……そうだな
私が悪かった
この話は終わりにしよう」

「……仮にも俺の友達なんだ
金輪際『アイツ』と似てるなんて言ってくれるなよ」

「……ああ
（善吉には悪いが……
■■同級生には気を付けておこう…）」

――――所変わって保健室――――

「あいたたた……
もう放課後だってのにまだ痛みやがる
善吉っちゃんの奴おもいっきりかましてくれやがって……
ジョークってもんがわかってねぇよなー」

おかげさまで今の今まで出番なしだぜチキショー

「……そういや生徒会室に善吉っちゃんが呼ばれたってことは
そろそろ目安箱に初めての投書がされた頃か？」

たしか一番最初の投書は剣道部がうんたらかんたらとかだったはず

「ちょうど放課後で部活の時間だし……
ちょっと覗きに行ってみっか♪　ふふふ……オラわくわくしてきたぞぉー！」

『キング・クリムゾン！！』

「ってことで剣道場に到着っと…
《歩行者天極（ウォーカーホリック）》のおかげで適当に歩いてても
目的地に着けるようになったのは嬉しい限りだな
…にしても『キング・クリムゾン』の使用率に定評のある作者だ」

さてと…ちょこーっと覗いてみましょうか
そ～っと覗いてみてごらん♪っと……

「……でよーアイツなんて言ったと思う？」

「なになに？なんつったの？」

「『倍プッシュだ』だとよ！」

「ギャハハハハ！なんだそりゃ！
狂気の沙汰ほど面白いってか？」

……あれ？
ピンピンしてるし…
まだ到着してなかったのかな？

「てっきりもう生徒会長にボコボコにやられちゃってるかと思ったのに……」

「誰が誰にボコボコにやられるって？」

「だからこの剣道場にたむろしてる不良共が
生徒会長の黒神めだかにボコボコに……
……へ？」

振り返ると木刀を持った『いかにも』な先輩がいた
左頬に十字傷がある……たしか門司三年生だったか

「へぇ～、俺たちが『あの生徒会長さん』にねぇ～…
ちょっとその話詳しく聞かせてくれないかなぁ後輩くん？」

「……オワタ」

――生徒会室・さっきの続き――

「ではべつの話題に変えよう」

「べつの話題？
用は２つだけって話じゃ――」

「生徒会に入らないか？
今なら庶務の座が空いているぞ？」

「デジャブ！？
べつの話題じゃなくて一歩手前に戻っただけじゃねぇか！」

「ふむ、そうだったか？」

呆れ果てて背を向ける人吉善吉

「はぁ……
そりゃ１人で会長、副会長、書記、会計、庶務の
仕事をこなすのはキツいだろうけどな！
だからって俺を巻き込むな！」

ヌギヌギ

「お前って奴は昔からそうなんだ！
ことあるごとに当然のように俺を道連れにする！」

ファサッ

「俺の気持ちとか迷惑とかちっとも考えてくれねぇ！
付き合いきれねーんだよ実際問題！」

凛っ！！

「大体お前なら1人で生徒会業務をやり続けることもできるだろ
…ってうおおーーーいっ！！
あっ当たり前みてぇに人の後ろで着替えてんじゃねぇよ！！
ってかさっき着替えたばっかだろーが！」

「あれは貴様を出迎えるために着替えていたのだ
…ところで善吉
私は仕事を手伝ってもらうために貴様を引き込もうとしている訳
ではないぞ」

「ああ？……とりあえず何か羽織ってくれない？」

「私は仕事がキツいと思ったことなど生まれてこのかた一度もない
私に貴様が必要だからそばにいてほしいだけなのだ」

「！！
あ、ああ！？」

途端に赤面する人吉善吉

「で、さしあたってはこの目安箱なのだが……」

『目安箱』と書かれた小さな箱をもってくる黒神めだか

「先ほど開いてみたところ早速第一号の投書があった」

「目安箱…？
あーあったな、そーいや」

赤面がまだ引いてない人吉善吉

「まさかあんなぶっ飛んだ演説本気にする奴がいるとは思わなかったぜ
で？どんな内容なんだよ」

「読んでやろう
『三年の不良達が剣道場を溜り場にしていて困っています
どうか彼らを追い出してください』
だそうだ」

「……もしかしなくても巻き込まれる流れだなこりゃ」

とか言いつつまんざらでもない人吉善吉

「うるせぇ！」

第１０箱「デジャブ！？」（後書き）

オリジナルアレンジと原作を上手く繋げるのに苦労中。
どうやって他キャラに絡ませるか、
どこに主人公がいてもおかしくないかなどなど

課題大量生産中です。

第１１箱「正常だぜ」（前書き）

やべー……（´Д`）

原作どおりに進めたら主人公のキャラがかすむ……

どうにかしなければ…

第１１箱「正常だぜ」

――――剣道場前――――

露出度が高い剣道着（改造）に着替えためだか

「このためにわざわざ着替えたのか…」

「さて、では生徒会を執行しに行くぞ」

〈ガララララ〉

「たのもーー……う？」

道場内を見て固まるめだか

「おいどうした？
なに固まっ……て……」

めだかの後ろから道場内を覗き込み固まる善吉

「はぁ……はぁ……
ぐっ……はぁ……はぁ……
遅刻だよ……二人共……」

不良達の輪の中心にボロボロの主人公が倒れていた

「【お前】！！
なんでここに……！？」

主人公に駆け寄る善吉
と、同時に

「……あ？誰だぁお前ら」

主人公を囲んでいた不良の一人が口を開く
リーダー格らしく、一際目つきが悪い

「……一年十三組生徒会執行部会長職、黒神めだかだ
目安箱への投書に基づき生徒会を執行する！」

「あー【そいつ】から聞いてんぜ
今をときめくイカれた新会長って奴だろ？
こんなところにお出でになられるとは驚きだな！
支持率９８％だか何だか知らねーが生憎俺らは残りの２％の方だぜ！！」

何が面白いのか取り巻きの男たちはゲラゲラと笑っている
その緊張を破るように善吉が叫ぶ

「やってる場合かよ！
早く【コイツ】を保健室……いや病院に連れてかねぇと！」

「待て善吉」

「待てるかよ！！
見てわかんだろ！？
俺は【コイツ】を病院に連れていく！
生徒会を執行するなら一人で――」

「大丈夫だ」

「……は？」

「【その男】のことなら大丈夫だ、問題ないいや…、【その男】『なら』大丈夫だ……そうだろう？【貴様】」

言葉の意味が理解できずに困惑する善吉

「お前何を言って―」

「さすが生徒会長さん……」

「！？」

「【俺】みたいなモブキャラのこともよくわかってらっしゃる…」

「……【お前】本当に大丈夫なのか！？」

「うん…、大丈夫大丈夫……心配してくれてありがとね善吉っちゃん」

何事も無かったかのように立ち上がる主人公

「！？」×８

その様子を見て驚く不良達

「（……大丈夫って言ったものの……
『生気者』が無かったらまともに立つこともできなかったな……
…ハハハ）」

善吉に向き直り自慢気に微笑むめだか

「言ったとおりだろう？善吉」

「お、おう……
（こんだけボロボロで血まで出てるってのに……）」

「……ケッ
イカれた新会長のダチはゾンビってか！？」

〈ビュンッ〉

悪態をつき、めだかに木刀を向ける不良

「さてと…では話を戻そうか
…貴様がリーダーの門司三年生だな
剣道か……懐かしいぞ、私も少しだけかじったよ
この木刀もよく手入れされておる
黒檀とは随分と張り込んだものだ」

そう言うめだかの手にはいつの間にか門司の木刀が握られていた

「！？
（え…あれ！？いつの間に取られた！？

感覚どころか気配もしなかったぞ！？）」

「……やっぱり大丈夫じゃなかったよ善吉っちゃん……
会長さんが門司先輩の木刀を取ったの全然見えなかった……」

「……いや、それで正常だぜ
『無刀取り』……
まあ剣道っちゃ剣道だが、かじった程度でできる技じゃねー
技っつーかフツーに奥義だな」

「……っっっ！！
かっ、囲めおめーらッ！！」

「おっ、おうっ！！」

〈ザザザッ〉

大きく広がり、めだか・善吉・主人公の三人を囲む不良達

「…制服改造に染髪、装飾…

校則違反のオンパレードだな
まぁ私もあまり人のことは言えんが――」

「「（まったくだ）」」

同時に心の中でツッコむ主人公と善吉
……なんてことをやってる間にジリジリとにじり寄ってくる不良達

「善吉っちゃん……

これってかなりヤバいんじゃないの？」

「いや…、心配する必要はまったくないぜ」

「？」

「まあ見てな――」

と、善吉が言い終わるやいなや…

〈ズッ…タタタタタタタタタッッッ！！！〉

軽快な足音と共にめだかが複数人出現する

「！？

なっ、何ぃぃっ！？」×８

〈ふわっ〉と柔らかく止まるめだか

いつ盗ったのか手には不良達のタバコが握られていた

「だがタバコは控えておけ

貴様たちの健全な成長を阻害するし

何より将来の楽しみがなくなるぞ！」

「……やっぱり【俺】はもう駄目みたいだよ善吉っちゃん……

会長さんがいっぱいいるように見えた――」

「だからそれで正常だって

分身の術かなんかに見えたんだろうが今のも剣道の技だよ

いや、技というか基本中の基本の動きなんだが――

まあ素人目には分身に見えても仕方ないな」

「……その言い方だと
『俺は素人じゃねーぞ！どんなもんだい！』
って言ってるように聞こえるよ善吉っちゃん」

「あ？べつにそんなつもり――」

「――哀れなことだ」

「あ、……始まった」

主人公と善吉が喋っている間にめだかと不良達が何かやっている

「貴様たちもかつては真っすぐな剣道少年だったに違いない
何かしらの理由があって道を踏み外してこうなったに決まっている」

「（これが上から目線性善説か……
なかなかにぶっ飛んでらっしゃる……）」

「親に見捨てられたか？
よき師に出会えなかったか？
友に裏切られたか？
…安心しろ
私が貴様たちを更生させてやる
剣のこと以外何も考えられなくしてやる
矯正してやる強制してやる改善してやる改造してやる
二度とだらけようなどと思えぬように
泣いたり笑ったりできなくしてやる！！

まずは素振り千回からだ！
貴様たち今日は歩いて帰れると思うなよ！！！」

「…イナバウアーしながらものすごく怖いこと言ってるよ善吉っちゃん
不良達がドン引きしてるよ善吉っちゃん
なんか【俺】も鳥肌たってきたよ善吉っちゃん」

「……見なかったことにしといてくれ」

そうして不良達は矯正されてしまいましたとさ

めでたしめでたし♪

「めでたくねぇぇぇぎゃあああああぁぁぁ！！」×８

第１１箱「正常だぜ」（後書き）

いまさらですがスキルの能力を把握するスキルの名前は《拙迷書》（マニュアルマニア）とか考えてました

出すタイミングがなくなっちゃった（´∀`）

第１２箱「もう何も聞くまい」（前書き）

感想でよく「文章が読みづらい」というのをいただきます。
私なりに改善していってるつもりなんですが、それでも「読みづらい」と言われるのでなんでだろうと思ってたんですが……

あれですね。携帯で閲覧すると読みづらいですねたしかに。

この小説の投稿は携帯でしているのですが（ＰＣ持ってないので）
私は携帯のフルブラウザの状態で読みやすくなるように書いてるつもりです。

なのでどうしても携帯で普通に閲覧したら不自然なとこで文が段になったりとか……カギ括弧が微妙なとこで途切れてたりとか…

なら携帯に合わせた書き方すりゃいいだろうがってことなんですがそれだと今度はＰＣで閲覧した時に不自然にならないかが心配で……

で、妥協策として出たのが『携帯のフルブラウザに合わせる』です。

もっと効率的な書き方あったらお願いします。

第１２箱「もう何も聞くまい」

――――翌日・昼休み――――

「あ～
昨日はヒドイ目にあった…」

あのあとホントに不良達に素振り千回させた生徒会長
信じられないのは何の関係もない善吉っちゃんや、
ケガをしてボロボロの【俺】にまで素振りさせようとしたことだ

「善吉っちゃんが止めてくれなかったら
マジにやらされてたなありゃ…
……その代わり善吉っちゃんが二千回やらされてたけど」

ちなみに前回、【俺】はケガしてたので……
モノローグの代わりにナレーターさんにナレーションをしてもらってました
ありがとうナレーターさん

「一人でなーにブツブツ言ってんのさ♪」

「あ、袖ちゃん
聞いてくれよーじつは昨日カクカクシカジカでさー」

「なるほどなるほど～
で、マルマルウマウマだったわけだ♪」

「……かぶせてきたね」

「あたしがまともにツッコむとでも思った？」

「さっすが袖ちゃん
【俺】にできないようなことを平然とやってのける
そこに痺れるあこｇ――」

「そんなことより学食行こっ☆」

「言わせてよっ！！」

「人吉が先に学食行って待ってるよ
早く行かないと今日のメニュー人吉が全部食べちゃうかも！」

「袖ちゃんじゃないんだからそれはないって
それに【俺】もう昼飯食べたし行きたいとこあるから」

「行きたいとこ？」

「ちょっと剣道場の様子を見に行ってみよっかなーなんて
ほら、聞いてない？
生徒会が剣道場にたむろしてた不良達を追っ払ったって」

「知ってるよー☆
知ってるけど、……どうなっても知らないからねー♪」

「なんか言った？」

「いえいえなーんも☆」

「？」

――――昼休み・剣道場――――

……いざ来てみたものの

「昨日の二の舞になったりしないだろうな……」

おそるおそる剣道場の扉を開く

昨日はここで門司先輩に見つかったんだっけか

頭殴られたせいで記憶があやふやだけどそうだった気がする

「……む？

おお、【貴様】か」

「ありゃ？

何やってんですか？会長さん」

道場には会長さんがいた

昨日まで廃墟みたいなトコだったのにだいぶ片付いてる…

「見てわからんか？

掃除をしておるのだ」

「いやいやそれはわかってますけど……

なんで掃除してるんですか？」

「あんな状態の道場では気持ちよく稽古はできんからな
あの者たちが少しでも精を出せるようにしているのだ」

「え？生徒会の仕事ってあの先輩方を追い出して終わりじゃないんですか？」

「何を言う
それで終わってしまっては問題を先送りにしただけではないか
根本的な解決にはならん
廃れてしまったあの者たちの剣に対する心を取り戻すまでが私の仕事だ」

どうやら本気であの先輩方が昔は剣道少年だったと信じてるみたいだな
さすが上から目線性善説

「昼休みを返上してまで尽くすなんて見上げたもんですね
【俺】も見習いたいですよ」

「なら【貴様】にも手伝わせてやろう」

「……は？
えっと、今なんて？」

「見習いたいのであろう？
だから掃除を手伝わせてやろうというのだ」

社交辞令って言葉知ってますか会長さん

「えと、あの、【俺】ってばまだ全快してないというか…

まだ体の節々が痛いというか…
そもそも掃除を手伝って【俺】になんのメリットがあるか
わからないというか……」

「メリットならばある」

「え？」

「道場を掃除し清潔にすれば、
【貴様】も心地よく剣道に打ち込めるだろう！！」

凛ッ！！

「あぁ～なるほどぉ～
よしっ、それなら【俺】も掃除を手伝う気に――
ってなるかッッ！！」

「なんだ？嫌なのか？」

「嫌に決まってんでしょ！！
そもそも【俺】剣道部に入る気ないですし！」

「そうなのか？それは残念だ」

あれ？以外とあっさり？
てっきり『剣道はいいぞ』とか言ってくるかと……

「ま、まぁわかってもらえたならそれで――」

「なら個人的に付き合え」

「わかってなかったーー！！」

ダメだ……！！
これはもう完全に巻き込まれる流れだ……

「……わかりましたよっ！
手伝えばいいんでしょ手伝えば」

「うむ
ありがとう、助かるよ」

うっ……
なんてキラキラした笑顔だ…

「…なんか善吉っちゃんみたくなってきたなー【俺】」

こうして【俺】は昼休みいっぱい道場の掃除をさせられた
……なんだかんだ言ったけど掃除ってやっぱ気持ちいいもんだな♪

「では放課後も待っておるぞ」

……前モノローグ撤回でお願いします（泣）

その後、疲れ切ってしまい午後の授業は舟を漕ぎっぱなしだった

――――放課後・剣道場――――

「……なんで来ちゃうかなー」

手伝わされるのが嫌なら約束なんて気にしなけりゃいいだけなんだけど…

……無理矢理させられた約束だし

「あんだけキラキラした笑顔見せられちゃなぁ……」

ぶつくさ言いながら道場の扉を開く

「遅かったな■■同級生」

……また名前呼ばれた

ってか会長さん割烹着だし！

……アリかも

「……随分とお早いお着きですね会長さん

【俺】ホームルーム終わってすぐに来たつもりなんですけど」

「来るように頼んだのは私の方だ

その本人があとから来たのでは申し訳がたたんからな」

あ、一応そういう礼儀はちゃんとあるのね

「……そんじゃあ早いとこ始めましょうか」

「うむ」

昼休みのうちにガラクタの整理は終えていたので
ホウキで掃き掃除をする
それが終わったら雑巾がけだ

「昼休みと随分動きが違うな■■同級生」

「はーーはっはっはっはっはーー！！！
【俺】は最初からクライマックスですからねーー！！」

ワケのわからないテンションで雑巾をかけていく【俺】
午後の授業の時に気付いたが《眠れぬ檻の非情》を使えば掃除なんて楽チンだ
なんで昼休みの時点で気付かなかったんだろうか
あっという間にピカピカだ

「ふむ…
思ったよりも早く終わりそうだ
助かったぞ■■同級生」

……もう気にするまい

「いえいえ、お安い御用ですよ
会長さん直々の頼みとあっちゃあ無下に断れませんからね」

皮肉をこめた言い方で言ってみる

「そうか…

そう言ってくれると助かる」

「……ぷっ」

「なんだ？」

「昼休みといい今といい『助かった』って言い過ぎです会長さん」

「む？そうか？
あまり意識してなかったが…」

「まあ意識せずに感謝の言葉を言えるのはいいことだとは思いますけどね」

「…そう言ってくれると助かる」

「……今のはわざとですね？」

「うむ」

「アハハハ
あ、そうそうお礼で思い出した
昨日はありがとうございます会長さん」

「なんのことだ？」

「名前ですよ
善吉っちゃんから聞いたんでしょ？【俺】が名前を呼ばれるのが嫌いだって
だから昨日みんなの前で【俺】の名前を呼ばないでくれたんです

よね？」

「気付いていたか」

「ええまあ
名前を呼んだ方が自然に話が進むのにそうしようとしてませんでしたから
嫌でも気付きますよ」

会長さんに背を向けたまま雑巾で壁をふく
……失礼かな？

「気にするな
べつに【貴様】に気を使ったワケではない
無意識にそういう会話の運びになってしまっただけだ」

「そうでしたか」

「……■■同級生」

「なんですか？」

「一つ聞きたいことがあるのだがよいか？」

「……かまいませんよ」

手は止めない

「じつは【貴様】を掃除に付き合わせたのも……
聞きたいことがあったからなのだが」

「だから……
なんですかって言って――」

「【貴様】は何者だ？」

手が止まる
壁をふくのをやめて雑巾をしぼる

「……どういう意味ですか？」

会長さんに背を向けたまま返事をする
バケツに向かってしゃがんだ体勢だ

「……言葉どおりの意味だ」

声の方向からして会長さんは
【俺】の背後2～3メートルから立って話しかけてきている

「……会長さんもよく知ってるでしょ？
善吉っちゃん、袖ちゃんと同じクラスなんだから
二人と同じで単なる『普通』ですよ」

喋りながらゆっくり立ち上がる

「……『普通』？

あれだけのケガをしていながら
今日にはこれだけの動きをするのが【貴様】にとって『普通』なのか？」

【俺】は振り返らない

「……あの時、私と善吉が剣道場に訪れた時
【貴様】は『遅刻だよ二人共』と言ったな」

【俺】は振り返らない

「まるで私たちが道場に来ることをあらかじめ知っていたかのような口振りだ
……なぜ知っていたのだ？」

【俺】は振り返らない

「それに、善吉に聞いたが
どういうワケだか【貴様】の名は『呼べない』そうだな
『呼ばせない』のではなく『呼べない』…
一体どういうことだ？」

【俺】は振り返らない

「……極めつけは昨日の昼休み、私と【貴様】が初めて顔を合わせた時だが
……あの時の【貴様】からは――」

『俺は普通ですよ
だって
俺は普通なんですから』

【俺】は振り返り会長さんの目をじっと見つめて言った

「……っっっ！！」

驚いてる驚いてる
……驚いてる顔もこれまた麗しいことで

「……冗談ですよ
ってか聞きたいこと一つじゃなくなってますよ？
……会長さんは少し【俺】を過大評価しすぎですいや、過小評価かな？まぁどっちでもいいですけど」

「……」

「そんなに警戒しなくてもいいですって
【俺】はどこにでもいる『普通』で『普通』な…
ただの『普通』ですから」

「……信じて……よいのか？」
「ええ」

とびっきりの笑顔で答える

「……わかった
もう何も聞くまい」

これで会話は終了した
…と、同時に

「なっ！
何いいいい！？」

善吉っちゃんが道場の入り口で絶叫していた
そりゃ一日でこうなってりゃ驚くわな

「それじゃあ会長さん
【俺】はそろそろ帰りますね」

【俺】はいそいそと掃除用具を片付け始める

「ああ
気をつけて帰るのだぞ」

善吉っちゃんとすれ違う

「あれ？
なんで【お前】ここに？」

「んー…
説明するのめんどいから会長さんに聞いて」

そのまま道場を出る
すると

「……あ」

「あ」

昨日の先輩方とばったり
……道着着てるし

「……どうしたんですか？その格好？（にやにや）」

「うっ、うるせぇ！」

「……会長さん待ってますよ？
早く行ってあげてくださいね」

「余計なお世話だっ！！」

「うわぁ怖い！んじゃ【俺】はさっさと退散します
頑張ってくださいね先輩方」

「……お、おい」

呼び止められた

「なんですか？」

「き、昨日は……あれだ…その…
……悪かった」

「……ふふっ
気にしてませんよ
それじゃあ今度こそさよなら」

そうして【俺】は剣道場をあとにした

第１２箱「もう何も聞くまい」（後書き）

主人公は基本的に平和主義者なのであんまり戦闘は好きじゃないです。

一応戦闘能力を引き上げるスキルとかも考えてはありますけどね。

《壊倒乱撒》（オールレッド）
攻撃力を超人的に高める。攻撃力のみ。

《至高柵護》（オールグリーン）
防御力を超人的に高める。防御力のみ。

みたいな

第１３箱　番外編・読み飛ばし可（前書き）

１３箱目ということで番外編です

この話はべつに読まなくても物語には影響しません……と思います

第１３箱　番外編・読み飛ばし可

この回はナレーターがナレーションを担当させて頂きます
ふむ……番外編といっても何をお話すればいいのやら……

では主人公、■■■■の生い立ちについて少しお話いたしましょうか……

【彼】は一体どういう人物で、どういう過去を持ち、
『めだかボックス』の世界に訪れる前はどういう生活をしていたのか……

興味がある方は是非……

◇０歳

【彼】は生まれて早々デンジャラスな目にあったことがある

電車の線路の上に捨てられたのだ
それも裸で

この生い立ちについて【本人】は特に何も感じるところはないらしく
面白おかしく過去の失敗談を語るかのように喋る
……もちろん聞かされた方はドン引きである

捨てられたことについてなんとも思わないのか？という質問をされても

「んー…
子供を養うってのはそれはそれで大変なことだからねー…
仕方ないんじゃない？
アハハハハ」

……というおおよそ一般の思想とはかけ離れた返答をしたこともある

◇1～5歳

孤児院に拾われた【彼】は他の子供たちと
同じく健やかに育った

……だが少し変わったこともあった

こけて擦り剥き、血が出て大泣きしたにも関わらず
次の日には傷は消え失せ、ケロッとした顔でおやつを食べていたり
するのだ

そんな【彼】を大人たちは気味悪がった

そんな感じの5年間

◇6～11歳

小学校に入学してからは親がいないことでよくいじめられていた

低学年のうちはからかい半分だったが
高学年にもなればいじめは過激になってくる

無視は当たり前、教科書には落書きされ、机は隠された
だが【彼】はべつに困惑する様子はなく…

無視されるならまず話し掛けないし、
教科書に落書きされるなら教科書の内容をすべて暗記、
机を隠されたなら机なしのままで授業を受けた

そんな【彼】をクラスメイトは気味悪がった

そんな感じの6年間

◇12~14歳

中学に入ってからその『奇妙さ』が顕著に表れ始めた
勉強は普通程度、運動は苦手
人気者、いじめられっ子問わず誰にでも分け隔てなく話し掛けていた

だがそういう人間をよく思わない輩もいる

中二の頃に三年に呼び出され袋叩きにされた
三年曰く、「誰にでも調子がいいのがムカつく」からだそうだ

だが次の日には怪我はほぼ完治
平気そうな顔で登校
三年は二度と【彼】と関わろうとしなかった

クラスメイトも三年に目をつけられたという噂を聞き、
【彼】から遠ざかった

実際三年に呼び出されることはもうなかったのだが
そんなことはクラスメイトにはわかるはずもない

しかし【彼】は
友達がいなくなったことを別段悲しむこともなかった

そんな【彼】を先生、クラスメイト、先輩、後輩は気味悪がった

そんな感じの3年間

高校生になった【彼】は孤児院を出て一人暮らしを始めた

そして今までの自分の人生を振り返り、こう言うのだった

「【俺】の人生ってホントに特徴のない人生だよなー」

第１３箱　番外編・読み飛ばし可（後書き）

主人公がどういう人間なのか？
他人に対してどういう感情を持っているのか？

その片鱗を垣間見せる回ですた

第１４箱「とりゃっ！！」（前書き）

新しいバイトがキツくて最近更新できてませんでした。

これからも今までのような早さでは投稿できないかもしれません。

物語中の会話の運びがおかしく感じるかもしれません。

それはたぶん作者が疲れてて正常な判断ができなくなってるからでしょう。

第１４箱「とりゃっ！！」

剣道部のいざこざから数日が過ぎた

善吉っちゃんはいつのまにか会長さんを「めだかちゃん」と呼ぶようになり

そしてこれまたいつのまにか生徒会に入っていた

本人曰く、「めだかちゃんには俺がついてないと」らしい

……えっ？

日向くんの剣道サンバルカン？

なにそれ？おいしいの？

……ってゆーか【俺】、日向くんと面識ないんだよね

だからいきなり見ず知らずの人を殴り飛ばすワケにもいかないから

……

そこは原作どおりに善吉っちゃんに譲りました☆

どこにでも原作介入するとは限らないのさ！

というワケで原作での第１箱の話は前回で終了なのでした

――――生徒会室――――

遊びにきました

「いや～それにしても似合わないねぇｗｗｗｗ」

「うるせぇ！芝、生やすな！！
大体俺は黒い制服は似合わねぇんだよ
だから制服白のこのガッコ来たってのに――」

「いや、そんなことはない
善吉には黒がよく似合う」

「「どぅわっ！！」」

びっ、びっくりした……！！
会長さんいつの間に背後に？

「だからお前はなんでいつもいきなり後ろにいるんだよ！！」

「そうですよ会長さん！
心臓に悪いからいるならいるって言ってください！」

「見てくれが気になるなら内側にジャージでも着てみたらどうだ？
きっと格好よいであろう」

「「え、シカト？」」

「……ったくよー
ジャージの上から制服なんて何をバカな……」

とか言いつつ着るんですね
わかります

「って、うわ何だコレ！？

デッ、デビルかっけぇ！！
反骨精神のカタマリみてーだ！！」

善吉っちゃんェ……

「ところでなぜ【貴様】がここにいるのだ？」

「え？あ、ああ
べつにこれといって理由はありませんよ
善吉っちゃんが生徒会に入ったってんで
ちょっと冷やか――様子を見に来たんです」

「今なんて言いかけたコラ！！」

「……ソレ脱いだ方がいいと思うよ善吉っちゃん」

「話をそらすな！」

「……まぁよい
目安箱をチェックしてきたぞ
善吉、明日から目安箱の管理は貴様の仕事だ
本生徒会の最優先事項なのだからくれぐれも手を抜くでないぞ？」

「だってさ善吉っちゃん
庶務の仕事頑張らなきゃね」

「カッ！わざわざ言われるまでもねぇよ！」

「あはは！
それじゃあ生徒会の仕事の邪魔にならないように

【俺】はそろそろおいとましますね会長さん」

「うむ

【貴様】も悩み事があれば遠慮なく目安箱に投書するがよい」

「ありがとうございます
じゃあ善吉っちゃん
初仕事がんばってねー」

「おう、サンキュー」

生徒会室を出る
……その直後に

「きゃっ！」

「うおっと！」

危ねー…
ぶつかるトコだった

「すいません、前方不注意でした
生徒会に用事ですか？」

「え？あ、うん
目安箱に投書したんだけど…
ちょっと気になっちゃって様子を見に……」

この人は陸上部の……
あり…あり…あり…ありありアリアリアリアリアリアリア

リアリアリアリアリアリアリーヴェデルチ！
じゃなくて有明先輩だったな、たしか

「気になって見に来るくらいなら直接悩み相談してみたらどうです？
今ちょうど目安箱の中を確認してるみたいですし」

「あ、そうなんだ
えっと……【君】は生徒会の人じゃないの？」

「【俺】？【俺】は違いますよ
ほら、制服も白いでしょ？」

「あ、言われてみればそうだね」

「でしょ？」

なんかポヤッとした人だなぁ…
先輩って感じもあんまりしないし……
……でもこういう人がけっこうタイプだったりして

「じゃあなんで生徒会室から出てきたの？」

「たまたま遊びに来てたんです
……で？有明先輩」

「え？」

「入るんですか？
入らないんですか？」

「あ！ごめんなさい！今入りますから」

……かわいいなこの人

「失礼しまーす」

有明先輩が中に入るのを見送って

【俺】は今度こそ生徒会室を去った

「……あれ？

私【あの子】にいつ名乗ったっけ？」

――――学園内廊下――――

さて……と

「どうしようかな……」

有明先輩が生徒会室に来たってことは

会長さんの気持ち悪いまでの推理力が発揮される回まで来たってことだ

「……絡んどいた方がよかったかもしんないな」

今さらながら後悔

……あれ？

「ここどこだ？」

おいおいマジかよ……

学園内で迷子なんて方向音痴の範疇越えてるぞ

「仕方ない……

《歩行者天極》使うか…」

あんましスキルを乱用すんのは好きくないんだけど…（ただし《戒名》は除く）

そうも言ってられないよな

「って、もうこんな時間かよ！？

観たいテレビがあるのにー！」

時計を見て焦り、小走り気味になる

五分ぐらい走ったあと――

「あっ、一組の教室みっけ！

早く帰ってテレビを――」

「待てコラ」

〈ガッ〉

「オンドゥル！！」

こ、ころんだ……

変な声も出ちゃったよ……

……足を引っかけられたのか？

「随分とユニークな転び文句だなぁオイ」

声の方向に向き直ると
やたらと目つきの悪い子供がいた

白い制服だが【俺】が着ている制服とは違う
たしかアレはダンプに轢かれても平気な
『白虎』（スノーホワイト）とかいう特別製なヤツだ
……それを着ているのはもちろん

「雲仙…冥利…」

モンスターチャイルドが【俺】を見下ろして…
否、見下していた

「あ？
なにいきなり呼び捨てにしてくれてんだ【テメー】
上級生には敬語が基本だろうがよ！」

「ぐほあ！！」

いきなり顔に衝撃が……！
あのスーパーボールか……

「……すいません先輩
ちょっと驚いちゃって無意識に呼び捨てにしちゃいました
それにしてもいきなり制裁は厳しくないですか？
呼び捨てが気に障ったんならまずは注意してくれればいいのに」

「……（コイツ自分の顔に何が当たったのか気にならねぇのか？）
べつに呼び捨てされたのがムカついたからどついたワケじゃねぇ
まぁその分も含めてあとでキッチリ清算するがな」
怖ぇ…
ホントに１０歳かよ雲仙先輩
……１０歳だったよな？

「んじゃあ今のは一体何に対してなんですか？」

「走っただろ」

「……え？」

「廊下だよ廊下！
廊下走っただろうがっつってんだよ！」

「そ、それだけ？」

「あ？それだけ？
【テメー】今、言うに事欠いてそれだけっつったか？」

あ！やべっ！

「風紀委員長の前で堂々と校則破っといて
よくもまぁンなことが言えるもんだな
怒りも呆れも通り越して笑えてきちまうぜ！」

「あ、いや、今のはえっと、言葉のあやっていうか、その」

「今時『廊下は走っちゃいけません』なんて小学生のガキでも守れるぜ？
それを仮にも高校生ができねーなんてよォ…
小学生に顔向けできねぇよなぁオイ！」

小学生でも守れる……
あ、だから雲仙先輩はちゃんと守ってんのか？

「……今【テメー】かなーり失礼なこと考えたろ」

「うぇ！？
い、いやいや！滅相もない！」

「その反応でバレバレなんだよ！ダボが！」

「ガッ！！」

また顔面に……

「くぅっ……！痛ってぇ……
マジでこれスーパーボールの衝撃なのか？」

「！
（【こいつ】……二発食らっただけでもうタネを…？
……いや、最初に当てた時もさして驚いた風な態度は見せてなかった
つーことは一発目からいきなり見破ったってのか？）
……へぇー
よくスーパーボールだってわかったじゃねぇか
運動神経は悪くても動体視力はまあまあるみてーだな

これを見破ったのは【テメー】が初めてだぜ」

「え？動体視力？」

……あ、そうか

雲仙先輩は【俺】が攻撃の正体を『見破った』と思ってるんだ

実際は『知ってた』だけなんだけどなぁ……

「残念ながら動体視力で見破ったわけじゃありませんよ先輩

最初からスーパーボールだって知ってたんです」

「……知ってただぁ？」

「ええ、知ってました

先輩と会うずっとずーっと前からスーパーボールのことは知ってました」

あんまりバカスカやられまくるのもヤダからな

いっちょ意味深なハッタリかましとくかな

「俺と会う前から？

……【テメー】意味深なことほざいて

俺をケムにまこうって魂胆じゃねぇだろうな」

「…だとしたら？」

「俺がケムにまかれる前に【テメー】を消し炭にしてやんよ！！」

瞬間、雲仙先輩は【俺】に向かって飛び上がってきた

『白虎』の袖口には大量のスーパーボール

たぶん今のセリフからして炸裂弾『灰かぶり（シンデレラ）』だ
まったく……『普通』相手に容赦ないなぁ

……仕方ないね
ここは《あのスキル》と《あのスキル》で乗り切るか
《あのスキル》も使えるかな？

「すぅーーーーっ……」

息を吸って……

「〈ズンッ〉」

「うお！？」

途端に滞空中の雲仙先輩の体が廊下に落下した
それこそ〈ズンッ〉という感じで

「な、なんだこりゃあ……
体が……クソ重てぇ……！」

「あれれぇ～？おかしいぞぉ～？
急にどうしたんですかぁ～？雲仙せんぱぁ～い」

「クッ……！
何しやがったテメェ！」

「べつにぃ～？何もしてませんよぉ～？」

嘘だ

もちろん何かしたに決まってる

スキルの一つ
《音欺話（ボイスデンジャー）》を発動した
要約すれば
1、擬音を口で言う（メラメラとかビリビリとか）
2、対象の耳にその擬音が届く
3、対象の体に擬音に見合った現象が起きる
（ただし対象がその擬音に対して抱いている概念によって起きる現象は変わる）
みたいなスキル

ぶっちゃけ都城王士の真骨頂である『言葉の重み』の擬音版だね

「……クソがっ！
見下してんじゃねぇ！」

「見下してません
見下ろしてるんです
ってか先輩に言われたくありません」

《音欺話》を解除する
重みがなくなり立ち上がる雲仙先輩

「ケッ！俺は昔からこういう性分なもんでね」

見下し性悪説だったっけ？

「……先輩、もう許してくれませんか？

今回は急いでたんで走っちゃいましたけど……
普段はまったく走らないんですよ？廊下」

「っっざけんな！！
『また今度ガンバル』だとか『もうしないから』なんて
根拠のねぇ言い訳で許すわけねぇだろ！！ガキじゃねんだぞ！！
つかそれで許したら風紀委員いらねぇんだよ！！」

いきなり廊下に叩きつけられたからだろうか
さっきよりも凶暴チック……
……《あのスキル》効くかな？

「……風紀委員の仕事をまっとうしようとするのは素直に感心します
でも……相手は選ぶべきでしたね……」

言葉に迫力がつくように気をつけて喋りながら《あのスキル》を使う

「あ？
何いきなり態度エルになってんだよ【テメー】
またスーパーボールのつぶてを浴びせられてぇの……か……
……！！？」

……『見え始めた』か

「どうしたんですか先輩？
いきなり言葉を詰まらせて」

「……なんでもねェよ、心配無用だ
（【コイツ】さっきっからなんなんだ!?
最初はごくごく『普通』な雰囲気の【ヤツ】だったってのに…
スーパーボールのことは『見破った』んじゃなく『知ってた』なんてぬかすわ
ワケわかんねー力で廊下に叩きつけられるわ
キャラも喋り方もコロコロ変わるわ……）」

「そうですか？
……のわりには随分と震えてますけど？
どこか体調でもすぐれないんですか？」

「……
（極めつけは『コレ』だ
体の震えが止まらねぇ…
【ヤツ】から目が離せねぇ…
まともに呼吸もできやしねぇ…
頭で動こうと意識しても体が動くのを拒絶しやがる
……まさかビビッてる？この俺が？たかが『普通』ごときに？
いや……もういろんな意味で【コイツ】……
普通じゃない!!）」

「……」

たぶん今雲仙先輩の目には……
【俺】は化物みたいな雰囲気を醸し出してるように映ってるんだろうな
まぁ【俺】がそのイメージに見合った実力を備えているのか？というと……
答えはノーだ

これもスキルの力
《誇大妄操（メガロマニュアル）》によって
【俺】のありもしないイメージを今、雲仙先輩は見ている
じつは会長さんに対しても何回か使ったことあるんだよね

「……なんにもしてこないってことはどうやら
お咎め無しで釈放ってことでいいんですか？」

「あぁ！？ンなワケねぇだろ！！
ただちにぶっ殺して――」

「無理でしょ今の先輩じゃ
……
じゃあ【俺】は帰りますね」

「～～っっ！！
待てゴルァ！！」

「そんなにむきにならなくてもまた会えますよ先輩
制裁はその時にきっちり受けますから
……とりゃっ！！」

二つのスーパーボールを思いっきり壁と床に投げつける

「！？
（さっき俺が【ヤツ】に放ったボール！
いつの間にか回収してやがったのか！？）」

スーパーボールは床に壁に天井にとランダムに乱反射する

そして……

「ガッ！！」

二つのボールは先輩の両目にクリーンヒット
ちなみにこれもスキルの力
《七点八当（オーバーヒット）》というスキルだ

投げた物、蹴った物が確実に的に命中する
それも標的の弱点や急所に

投げる物によっては簡単に人を殺せる危険なスキルだ
今回はスーパーボールだったからよかったが…

「それじゃあ先輩、縁があったら……
『縁が合ったら』……また会いましょう」

悶絶している先輩にそう言い残して【俺】はそそくさと帰宅した

第１４箱「とりゃっ！！」（後書き）

というワケで登場しました雲仙冥利！

なぜ彼が一組教室前に？とかは深く考えずに流してくださいな。

めだかや善吉たちが有明先輩の依頼をこなしている裏で
こんなことが起きてたんですね……。

オリジナルな展開なので雲仙の喋り方とか
微妙に原作と違うかもしれませんが大目にみてください。

第１５箱「ちょっとビックリ」（前書き）

特に何も思いつきませんのでパスでお願いします。

第15箱「ちょっとビックリ」

――――――生徒会室――――――

「…今日は三通も入ってやがる
みんな色々悩んでんだなー
しかも今回に関して言えば、どうやら異彩を放つ相談が一つあるようだぜ…」

「どれどれ？
どんな依頼？」

「子犬探しだとよ
去年の冬休みに学園内ではぐれちまったってんで
そいつを見つけてくれって――
おわぁっ！？」

「ヤッフー善吉っちゃん
目安箱の調子はどうよ？」

「……俺の後ろに立つな」

「怖ッ！
あの殺し屋みたいな顔になってるよ善吉っちゃん！？」

「……ったく
めだかちゃんみたいな真似してんじゃねぇっつーの」

「うむ、すまん」

「言っとくがまったく似てないからな？」

「バッサリだー！」

「……で？何の用だよ？
なんか用事があるからここに来たんだろ？」

「いんや、特にこれといって
たまたま善吉っちゃんが目安箱を回収してるのを見かけたからさ
でもまぁしいて言うのなら…
善吉っちゃんに会いに来た……ってトコかな？」

「気持ち悪い」

「またまたバッサリだー！
あははは！いいねぇ善吉っちゃん！
そのノリの悪さは善吉っちゃんにしか出せないよ」

「誉め言葉として受け取っといてやるよ」

「でも、ふーむ…そっかそっか…
子犬探しねぇ……」

「どうした？」

「いやいや、なんでもないよ
んじゃ子犬探しがんばってね善吉っちゃん」

「？

お、おう」

――――学園内中庭――――

「そっかそっか…
もう子犬探しの回か…
種類はボルゾイだったっけ？」

そういえばそんな回もあったななどと思いながら
中庭に迷い込ん……散歩のため立ち寄った【俺】

えっ？また迷ったのかって？
やだなぁ、自分の通ってる学校で道に迷うワケないじゃないかー（棒）
……まぁ言い訳はこれくらいにしといて、だ

先日の雲仙先輩との一件……
原作には無い『流れ』だった…
アレは【俺】がこっちに来た影響？それとも『侵攻役（ルート）』の……？

「……なーんか嫌な予感がしないでもないような感じだね」

でもそんなに危惧する程のことでもないのかもな
安心院さんが言ってたように、いずれは向こうからやってくるんだろうし
そうそうエンカウントするワケもない――

〈ムギュウ〉

なにか嫌な感触のものを踏んだ気がした

「グルルルル……」

「……」

嘘だと言ってよ、バーニィ…」

――学園内中庭・別の場所――

「ふーん意外だね！
あの無敵のお嬢様に『動物が苦手』なんて弱点があったなんてさー！」

「まあな
完璧超人みたいに言われてっけど、めだかちゃんにも色々あんだよ」

子犬探しに出向いてきた善吉
そしてそれに付き添う不知火

「あいつ小学一年の頃に飼育係やったことがあってさ
その時色々あったんだよ
トラウマじみたことがな」

「へぇ～
だけどさ、そんなこと言ってちゃ業務に支障をきたさない？」

「だーかーら！
そういう時のために俺がいるんだろうが！」

どや顔でキメる善吉

「さぁ不知火！わかったら早く俺を案内するんだ！
その心当たりの場所とやらにな！！」

「ああ…うん…
いいんだけどね別に…
…そのテンションキモいな～」

善吉を案内するため先行する不知火

「まあ心当たりっていうかさー
ちょっと前から学園内に住みついてる犬がいるらしいってだくなんだけど……
えーっと確かこの辺に……」

「ガガウッ！ガウッ！ガガガウウォォン！」

「うおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！
チクショー！別のモノにエンカウントしちまったァァァ！！！」

善吉と不知火が茂みから出ると
【主人公】が大型犬に追いかけ回されていた

「つかいつまで追いかけてくるんだこの犬！？
《眠れぬ檻の非情》使ってるとはいえ、かれこれ１０分以上追ってきてるぞ！？

いい加減あきらめろよ……って、ああ！
善吉っちゃん！袖ちゃん！
ちょうどよかった！この犬なんとかしてくれー！」

「……
ね、あの犬そのイラストと模様とか一緒じゃない？」

「不知火さん、あれは違うよ
あれは散歩中に飼い主とはぐれちゃった可哀想な犬とかじゃねーよ
あれはあれだよ
獲物を追いかけ回して疲れさせ、今まさに捕らえんとしている
ヨーロッパの貴族とかが狩りの時に放つ猟犬だよ」

「少しは【俺】にも興味を示せよ！！そこの二人組！！
って……あっ」

「「あ、こけた」」

「ガオォォウッ！」

「ギョワァァァァァ！」

「「南無三」」

――中庭・また別の場所――

「……酷い目にあった」

なんとか一命は取り留めたけど……
オデノカラダハボドボドダァー！

「オイオイ嘘だろ？
俺今からあいつ捕まえるの？マジで？
くっそ…信じらんねぇ
不知火、お前手伝ってくれるんだよな？あと、【お前】も」

【俺】はついでかい

「え！？あたしが！？やだよ！！なんで！？
あたしは親友のあんたが酷い目に遭うのを
安全圏から眺めていたいだけの人間なんだから！！」

「いや、お前は人間じゃねえ」

「【俺】に言わせれば、友人が猛犬に襲われているのにも関わらず
助けずに眺めている二人が信じられないけどねっ！！」

「あんたの勇姿を写メで撮って待ち受けにするの！」

「……
お前今日中に天罰くだるぞ」

「……ねぇなんで二人共シカトするの？
【俺】なんかした？ねぇ？」

「ガウガウッガウッ！！！」

「「「！？」」」

「……フシュルルル」

「…ほら☆
『お兄ちゃんこっちにおいでよ、一緒に遊ぼうよ』って言ってんじゃん☆」

「どうだろうな
俺には『ヒト共！次に俺様の眠りを妨げれば容赦なく食い散らかすぞ！』
って聞こえたけど」

「【俺】は『今度はそこの黒い制服のヒトと追いかけっこがしたいな☆』
って聞こえたよ」

「お前ら二人して俺を生け贄にするつもりか！？」

「やかましい！
こちとら一足先にもう襲われててんだよ！
善吉っちゃんも同じ目に遭ってしまえ！」

「んだとコラ！！」

睨み合う【俺】と善吉っちゃん

「じゃあもう帰る？
すごすご帰っちゃう？
せっかく人吉がお嬢様にいいトコ見せるチャンスなのに？」

睨み合う【俺】達を面白そうに眺めながら
袖ちゃんが善吉っちゃんをけしかける

「ぐ…
あーーわかったよ！
行きゃーいいんだろ行きゃ！」

会長さんのこととなると決断早いなー善吉っちゃん

「あっ待って人吉！
行くんだったらこれを持っていくんだ！あたしのお昼ごはん！」

そういう袖ちゃんの手には魚肉ソーセージが握られていた
某猫型ロボットが
ポケットから未来の道具を出す時のＢＧＭが聞こえた気がしたが気
のせいだろう

「あん？ソーセージ？
ああなるほど！こいつを餌付けに使うわけだな！？
冴えてんじゃん！」

「んーんそうじゃなくってさ
これをおなかのトコに仕込んで
『ぎゃああ！内蔵を喰われたー！…と見せかけて実はソーセージ
でした☆』
ってギャグやってほしいの☆」

「あははは！いいねそれ！
【俺】もぜひぜひ見てみたいよそのギャグ！」

「……そのギャグさあ
やった二秒後に本当に内蔵喰われるよな？
てゆーか【お前】に至ってはただ単に俺を巻き込みたいだけだろうが！！」

「なに言ってんのさ善吉っちゃん
巻き込むもなにも、そもそもあの犬を捕まえるために来たんでしょ？
だったら多少のリスクは覚悟しないと」

「笑いを堪えながら言ってるから全然説得力がないね☆」

袖ちゃんにツッコまれちゃった
ちょっとビックリ

「…クソッ
やっぱ俺がやるしかねぇのか
とりあえず貸せ！」

袖ちゃんの手からソーセージをひったくる善吉っちゃん
雄叫びをあげながらボルゾイに特攻していく
漢だぜ善吉っちゃん
……プププッ

「グルルルル…」

あっ
善吉っちゃんに気付いたみたい

「え？」

あっ
犬が飛びかかった

「ぎゃああ！内蔵を喰われたー！と見せかけて実はソーセー…
ってマジでぎゃあああっ！！」

「ああステキ！ステキ！
人吉くんてば超ステキ☆」

襲われてる人吉を見て
恍惚とした表情で写メを連写する袖ちゃん
……の横で腹を押さえて大爆笑しながら転げ回っている【俺】

「あはは！あはは！
イテテ…笑いすぎて傷が…
あはははは！…アイテテ」

「やっぱり【お前ら】人間じゃねぇ！
ぎゃあああああっ！！」

第15箱「ちょっとビックリ」（後書き）

犬の回前編です。

思いついたスキルは一発モノじゃなくて何回かは使いたいですね。

使えるかどうかは物語の作り方次第なんですが…。

第16箱「……いやん」（前書き）

かなり間が空いてしまいました。
ストーリーを考えてたのと日頃の疲れが原因かもです。

第16箱「……いやん」

――――翌日・生徒会室――――

「えーー、というわけでございまして
不知火と一緒にターゲットを発見するも捕獲には失敗
その後の逃走を許してしまいました」

ボドボド…
もといボロボロになった善吉が任務の進行具合を報告する

「……そうか
まあなんというかアレだな
とりあえず貴様達の仲の良さは不愉快だな」

報告を聞き若干不機嫌になるめだか

「要するに行方知れずになっていた半年間に
子犬は成犬になってしまったというわけか？
犬の成長は早いからな」

「あー…まあそんなトコだ
いやそれどころか、ありゃあ完全に野生化しちまってるよ」

気まずそうに頭を掻く善吉

「一応投書主にもあってみたんだけど
それがいかにも感じよさそうな娘さんでさ……まぁ先輩だけど
とてもじゃねーが現状は報告できなかったよ」

「ボルゾイとはロシア語で俊敏を意味していてな
もともとは狼狩りのための狩猟犬なのだ
生半可な猛獣よりよほど獣性が高いぞ」

「カッ！どうりで手も足も出ねーわけだよ！（内臓は出たけど）
まあつってもほっとくわけにはいかねーよな
このままじゃ保健所が動きかねねーし」

「……保健所？」

ピクリと反応するめだか

「ま、心配しなくていーよめだかちゃん
俺もやられっぱなしじゃ収まりつかねーし
こっちは俺と不知火で何とかするからさ」

「……不知火と？」

ピクピクリと反応するめだか

「ああ
まああいつは絶対嫌がるだろうが頼めば協力くらいはしてくれるはずだし
めだかちゃんは知らないと思うが不知火はあれで結構頼りになる奴なんだぜ？」

「……」

「そんなわけでお前は自分が担当してる案件にだけ集中して――」

「待て善吉
やはりその件私が動こう！」

「……あぁ？
いや別にいいけど…
つーかいいのかよ
相手は動物だぜ？」

「構わんさ
私の方の案件は既にあらかたカタがついておるし
何より！
私の不甲斐なさが原因で貴様が他の誰かに頭を下げるなど我慢ならん！！
ゆえに改めて！
目安箱への投書に基づき生徒会を執行する！！」

――その数分前の中庭Ａ――

ある生徒達が野生化した犬のもとへと足を運んでいた

「え～と……メールじゃこのあたりらしいんだけど～…」

「…疑ってるワケじゃねーんだけどよォ
そのメールは信用に足りえるもんなのか？
送り主が不明だったんだろ？」

「私も最初は気味悪くて無視しようと思ったよ？

でも『添付してある地図の場所にとってもワンダフルな動物を見かけました
あなたが担当してる動物園の実験動物の一匹にいかがでしょうか？
キュートでプリティーな謎の美少女より☆』
…なんて書いてあったんだもん
気にならない方がおかしいよ」

「まぁたしかに怪しいな……
特に自分のことを謎の美少女って言っちまうあたりとか」

「いやいやそこじゃなくってさ」

「『あなたが担当してる動物園』ってトコだろ？」

「そうそう！そこだよ！
私が時計塔の地下研究所で動物園を担当してるって知ってるの
理事長とか十三組の十三人ぐらいしかいないのに……」

「よしんば地下に施設があると知ってたとしても
『誰』が『何処』を担当してるかまで把握してるとはな…」

「こんなことにわざわざ付き合わせちゃってゴメンね名瀬ちゃん
べつに私一人でもよかったんだけどなんか寂しくて…」

「いーっていーって
大親友の古賀ちゃんの頼みは断れねェよ」

十三組の十三人のメンバーである名瀬夭歌と古賀いたみが
中庭でそんな会話を繰り広げていると…

〈またかチクショーーー！！！〉

叫び声があたりに響いた

「……今の聞こえた？」

「……ああ
あっちの茂みの方からだな」

「行ってみよう！」

声のした方へと急ぐ二人
茂みの中へと入ってゆく
そして茂みを抜けるとそこには……

「あ！誰か猛獣に襲われてる！」

「いや、猛獣に見えるがありゃボルゾイっつー種類の犬だぜ古賀ちゃん
狼を狩るための狩猟犬だ」

「へぇー…博識だね名瀬ちゃん」

「見たところ今あの犬の標的はあの【男子生徒】みたいだな
……ん？あいつは……」

「？」

――――その数分前の廊下――――

「いやはや…なんか最近ケガする機会が増えてきたような気がするな【俺】」

昨日のケガはもう治ったけど

「もうあの犬捕まえたのかな？
ちょっと善吉っちゃんたちの様子見に行くか」

〈ヴィィーン、ヴィィーン〉

「ん？」

メールだ…
誰からだ？【俺】のアドレスは誰にも教えてないのに…
ってか【俺】自身も自分のケータイのアドレス知らねェ
……機械って苦手なんだよね

「えーと…なになに？
『昨日の場所でまた生徒会が面白いことやるってさ☆
興味があるなら来てみれば？』
……文面から察するに袖ちゃんからかな？」

昨日の場所か…
あんましあの犬には会いたくないんだけどなァ…

「見つからなきゃ大丈夫かな？
……うん、大丈夫だ問題ない」

独り言をブツブツ呟きながら中庭へと向かう

――――――中庭B――――――

「生徒会のみんなはどこかなー」

あの野獣に見つからないように気をつけながら善吉っちゃんたちを探す

「あるぇー？いないじゃんかー」

まだ来てないのかな？

……そういえばなんかこんなこと前にもあったな

もう善吉っちゃんたちがいるもんだと思って剣道場に忍び込んだら先輩方に見つかりフルボッコ

「もしかして【俺】ってトラブルに巻き込まれやすい体質？なんちゃってー、あははは」

「グルルルルルル……」

「……スーパーウルトラグレートデリシャスワンダフルやばい」

「ガガァウガウッガァァッッ！」

「またかチクショーーー！！！」

間違いない！【俺】は確実にトラブル体質だ！

「クソ！怪我してもすぐに治るが痛いのは痛いんだぞ！」

ジリジリと迫ってくるボルゾイ

「ガウガウガウアッッ！！」

「『今度は仕留める』ってか？
ははっ、そうかそうか逃がしてはくれないみたいだなー
だったら仕方ない！【俺】も男だ！潔く諦め――――
る！ワケ！には！いかないィィィーーーー！！！」

命をォォォォ……
燃やせェェェェーーッッッ！！！

「ウオオオォォォッッッ！！！」

ロケットスタートで逃走を開始する【俺】
頭の中で『クリアマインド』が流れ出す
全速前進ＤＡ☆

「ガガァウガウアァァッッ――」

しばらく追いかけられていると突然……

「！！？

クーン……クーン……」

「？
なんだ？急に追ってこなく…」
急ブレーキで止まる
「クーン……クーン……」
何かに……怯えてる？
「ひっさしぶりだなオイ
前に会ったのは……入学式前ぐらいだったか？」
！！
この、女声なのに男っぽくてどこか気だるそうな喋り方は……
「……たしかに久しぶりですね
あの時は殺されるかと思いましたよ名瀬先輩」
「殺される？もう死んでただろ？あれは」
「じゃああなたの目の前にいるのは一体全体誰なんですか？」
「……双子？」
「……本気で言ってるワケじゃないですよね？」
「たりめーだろーが」
「……ボソボソ
（ねぇねぇ名瀬ちゃん、誰【あの子】？知り合い？）」

「いや、知り合いっつー程でもない――」

「やっほー古賀先輩
はじめまして！
【俺】は■■■■！名瀬先輩の元彼でーっす！！」

「！！？」

「えっ、元彼！？嘘！？」

「――というのはもちろん冗談なんですけれど…
あはっ！今の冗談信じちゃいましたか？」

「なッ！？」

「…ったく
初対面の奴に対するジョークにしちゃちょっと重すぎだろ
つーか【お前】そんなキャラクターだったんだな」

「そーですよー？【俺】ってばこんなキャラだったんですよー？」

「…何故だろう名瀬ちゃん
【あいつ】見てるとイライラしてくるんだけど」

「そういう風に振る舞ってるんだろうよ
…ところで、だ
……えーと名前はなんだったか
……まぁいいや」

いいのかそれで？

「いろいろと聞きてーことはあるんだが…
なんであの時の【お前】がこんなトコでボルゾイに
追いかけ回されてんのかが気になるな」

「あー…
それには深いような深くないようなワケがありまして…」

「なんだそりゃ？
『謎の美少女』からのメールでも来たのか？」

「え」

「「え？」」

「なんでメールのことを……
え？てゆーか『謎の美少女』って何ですか？」

「私のところに『キュートでプリティーな美少女』って奴からメールが来たんだよ
【あんた】は違うの？」

……たぶん袖ちゃんだな
まさか袖ちゃん【俺】とこの二人を引き合わせるために……？

「……どうした？
なんともいえないような表情になってんぞ」

「……気にしないでください

【俺】のメールは友人からのものですから古賀先輩のメールとは無関係ですよ」

「じゃあ【あんた】がここにいるのはあくまで偶然なんだね？」

「ええまあそうですけど……」

「ならその犬と【お前】は無関係なんだな？」

「？？？
はい、そうで――――」

そこまで言って気がついた
『この二人』がここに来た理由、そして『今の質問』
まさかこの二人……

「じゃあその子、こっちに引き渡してくれない？
実は私たちその子に用事があるんだよね」

「――ッつーワケだ」

やっぱりそう来たか
当のボルゾイは【俺】の後ろで小さくなっている
……いつの間に？

「……わかりました」

「じゃあそういうことで決まりね
さぁ私と一緒に行こう？
仲間もたくさんいるよー？」

古賀先輩が笑顔でボルゾイに近寄ってくる
顔はにこやかだが雰囲気が怖い
ボルゾイは震えながら【俺】に助けを求めてきている
まったく、さっきまで【俺】を追いかけ回してたってのに調子のいい奴だな……

「怯えなくていーんだよー？
怖いことはなーんにもしないから――」

「だがその調子のよさ……」

「！！
危ない！古賀ちゃん！」

「え？」

「嫌いじゃあないぜッッ！！」

力一杯の蹴りを繰り出す！
…が、もちろん空振り

「……なんのつもりだ？
その犬は【お前】と無関係なんじゃなかったのか？」

「ええ、『【俺】とは』無関係に等しいですよ
でもそいつには先約がいるもんで連れていかせるわけにはいかないんですよ」

「何よそれー！さっきと話が違うじゃない！

大体いきなり女の子を蹴り飛ばそうとするなんて――」

「あー、なんだ先約がいたのか
なら仕方ねぇ潔く諦めるぜ」

「え？いいの名瀬ちゃん？」

「さっすが名瀬先輩！話が早くて助かりますよ」

「その代わりに【お前】を拉致らせてもらうことにする」

「……いやん」

やたらすんなり諦めてくれたと思ったら……
転んでもタダでは起きないというかなんというか

「何言ってんの名瀬ちゃん！
【あんな奴】連れてたってどうしようもないよ！」

【あんな奴】……

「……古賀ちゃんは知らねーだろうけど
【あいつ】と俺はちょっとした因縁があるんだよ」

「い、因縁？
ってどんな？」

「詳しくはあとで話す
とりあえず今は【あいつ】捕まえてくんねーか？」

「むぅ～……わかった
私も名瀬ちゃんに無理言ってついてきてもらったんだもん
お返ししなきゃだしね」

あっ、古賀先輩戦闘態勢に入った
「さてさて…
地上戦最強の改造人間にどこまでついていけるかな～【俺】」

第16箱「……いやん」（後書き）

この小説で初めてまともな戦闘に入るかもしれません。

第17箱「言わずもがな…」（前書き）

古賀先輩のキャラが若干ブレ気味かも？

ブレブレブレブレ

第17箱「言わずもがな…」

――――前回のあらすじ――――

『いやん』

以上。

――――中庭――――

「気をつけろよ古賀ちゃん！
【そいつ】は俺たちのことを知ってる風だ
なんの策も用意せずに向かってくるはずがねぇ！」

べつに策なんてないんだけどなぁ～
どこかの策士…
いや、『策師』じゃあるまいし

「大丈夫だよ名瀬ちゃん！
どんな策だろうと正面から粉砕してあげるんだから！
もちろんライダーキックで！」

「ライダーキックですか……
どうでもいいことですけど【俺】はアギトが一番好きです」

「聞いてないよッ！」

「！！！」

あんな離れた場所から一気に……！！

「うお……ッッ危ねー！」

ギリギリかわせた……

目測でも４、５ｍは離れてたのに…どんな脚力だよ

「威勢のいいこと言ったわりには随分余裕がないんじゃない？」

「……今のは不意をつかれたからですよ」

そろそろあのスキルたちの出番かな…

「『不意をつかれた』って…そんなの言い訳にもならないよ？」

「なら試しにかかってきてくださいよ
今度は目を瞑っていても避けてみせますよ？」

「（カチン）
……ふーん、そんなこと言っちゃうんだ
手加減するつもりだったけどやめた！！
もうギッタギタにしてやるんだから！！」

「……あり？もしかして怒らせちゃいました？」

何がスイッチで怒りだしたんだ？

「不意をつかれるのが嫌なら今度は予告してあげる！

どこかのスタンド使いやゴム人間もビックリの拳のラッシュ！
避けられるもんなら避けてみてよね！！」

言い終わるや否やまた一気に間合いをつめてくる古賀先輩
だが今度は慌てない
なぜなら……

「ダリャリャリャリャリャリャリャリャリャリャリャリャリャリャリャ
リャリャリャリャリャリャリャリャリャリャリャリャリャリャリャリャ
リャリャリャリャ！！！！」

「あははははははは！
どうしたんですか古賀先輩？
全然当たりませんよ〜？」

《生気者》
このスキルがあればいちいち目で見て判断…反応する必要すらない
体が勝手に危険を察知し、避ける

「嘘…ホントに一発も当たらない……
かすりもしないなんて……」

「どうしたんですか？もう終わりましたか？」

「うるさいッ！」

「落ち着け古賀ちゃん！
攻撃が当たらないからってイライラするな！
まんま相手のペースだぜ！」

「名瀬ちゃん……
それはわかってるけど……ホントに何発打ち込んでも当たらないんだもん」

「無理に『当てようとしなくていい』んだよ
相手に『避けさせない』
相手が『避けられない』攻撃をすればいいんだ」

「？
それってどういう――
……
あッ！そういうことね！なるほどなるほど～」

「……作戦会議は終わりましたか？」

「にゃはは！
うん、もう終わったよー☆」

「？」

「どうやら【あんた】に何発パンチを繰り出しても無駄みたいだからさぁ～……
標的を変えることにしたッ！」

言い終わらないうちに上空高くジャンプする古賀先輩
ライダーキックでもかますのか？

「だからァ～どんな攻撃しようと【俺】には当たらないって――」

……ん？

今、古賀先輩『標的を変える』って言ったか？
『標的を変える』って……
今この場には【俺】しか――

「！！！
しまった！そういうことか！」

「にゃはは！
今さら気付いても遅いよ！」

あの二人、標的を『【俺】』じゃなく『ボルゾイ』の方に変えやがった！
そういやあのボルゾイどこ行ったんだ！？

「クーン……クーン……」

あんなトコで縮こまってやがる！

「クソッ！間に合え！」

ボルゾイに向かって走りだす

「（やっぱりな…
何でかは知らねーが【お前】はボルゾイを守りたいらしい
ボルゾイを狙えば【お前】が守りにくると思ってたぜ）」

「にゃはは！
名瀬ちゃんの作戦は世界一ィィィィィィ！！」

「させるかァァァ！！」

直後、耳障りな鈍い音が両腕から響いた

「グゥッッ……！！」

「！！？

キャインキャイーン！！」

危険を察知したのかボルゾイは逃げ出した

ったく…逃げるの遅ェっつーの

「あちゃーやっちまったなー

今の音は完全に骨がいっちまった音だぜ」

言われなくてもわかってます

「…【あんた】馬鹿じゃないの？

べつに盾にならなくてもボルゾイを抱えて回避すればいいだけの話じゃん…

受けるにしてももっとうまいやり方が――」

「なんですか？心配してくれてるんですか？

優しいんですね古賀先輩……

惚れちゃいますよ？」

「なっ！？

し、心配なんかしてないッ！」

動揺なんかしちゃって

古賀先輩ったらかわいいんだからもう

「また【そいつ】のペースに巻き込まれてるぜ古賀ちゃん」

「はっ！？危ない危ない…」

遠巻きに見ていた名瀬先輩が近寄ってくる

「どうしたんですか？名瀬先輩？
近寄ってきたってことはまさか勝利を確信しちゃってたりなんかしてます？」

「いやいや確信はしてねーが確実ではあるだろ
【お前】、今両腕の骨が折れてんだぞ？」

「……わかってませんね名瀬先輩
両腕の骨が折れてる『だけ』ですよ」

「強がってんじゃねーよ
少年ジャンプじゃあるまいし、
『骨が折れても気合いで勝利』なんて展開には間違ってもならねーぞ」

「……すみません
言葉が足りませんでしたね
【俺】『一人』の両腕が折れただけですよ」

「……あ？」

「何言ってんの【あんた】？」

「……ほら、お前ら
いや、【俺たち】……
お二方に自己紹介しなきゃ」

「だからァ！
【あんた】さっきから何ワケわかんないこと――」

「ギャーギャーうるせぇ女だなァ
ちったぁ黙って人の話を聞けねーかよ」

「！！？
（……二人に、増えた？）」

「な、何？やっぱり双子？
え？てゆーか今どこから――」

「口が悪いですよ【俺様】
相手は『仮にも』先輩なのですから」

「（今度は三人…！）」

「み、三つ子……？」

「そーゆう【ワタクシ】も『仮にも』の部分をえらく強調しとるやないか
ケラケラケラケラケラッ」

「……」

「よ、四つｇ――」

「も、もうぅ～
【俺様】も【ワタクシ】も【オイラ】もみんな失礼だよ～
あ、す、すみません先輩方
気を悪くしないでくださいね？
み、みんな悪気はない……と思いますから」

「……」

「……もう驚かない」

「あぁ？なんだよなんだよ
せっかく【俺様】が出張ってきたってのによぉ～」

「【ワタクシ】が見るかぎり【オイラ】が出てきたあたりで
名瀬先輩のリアクションはなくなりましたね」

「え、えぇ～！？
ってことは【僕】が出てきた時にはもう飽きられちゃってるんじゃ…」

「ケラケラケラケラケラッ！
そないちっちゃなこと気にしとったらアカンて【僕】！」

「だからまずは自己紹介しろって【俺達】
先輩方が困ってるだろ？
……あと、自由に喋りすぎ
収拾つかなくなってるから」

「あぁ～ハイハイわかってますよっとぉ

ヨロシクな先輩方、【俺様】は【俺様】ってんだ

仲　良　く　し　て　ね」

「遅ればせながら……
【ワタクシ】は【ワタクシ】と申します

仲　良　く　し　て　ね」

「え、え～と…
ぼ、【僕】が――」
「ハイハーーイ！！
ほんでもって太陽のように明るく朗らかな【オイラ】が
【オイラ】いいますー！！

仲　良　く　し　て　ね」

「うぅ～…まだ【僕】が喋ってたのにぃ～…
あ、あの…それで【僕】が【僕】っていいます

仲　良　く　し　て　ね」

「……そして言わずもがな
この【俺】が■■■■です

仲　良　く　し　て　ね」

第17箱「言わずもがな…」（後書き）

突如現れた四人の男！
果たして正体は！？

（たぶんみなさんお気づきでしょうけど）

第１８箱「しますよそりゃあ！」（前書き）

今回ちょい長めです。
話の運び方が変になっちゃってるかも。

古賀＆名瀬ＶＳ主人公編決着？です。

第18箱「しますよそりゃあ！」

「……にしても、だ」

「！！！

いだだだだ！！

ちょっ、何いきなり腕つかんでんだよ【俺様（お前）】！！

見てわかんねーのか！？折れてんだぞ！！」

「ケッ！

あんな女の蹴り一発で骨折たぁ……情けねぇ限りじゃねぇかよ

なあ？【僕（お前）】もそう思うだろ【僕】？」

「ぼ、【僕】に振らないでよぉ」

「おやめなさい【俺様】、【僕】が困っているでしょう」

「へいへい」

「う、うぅ～…ありがとう【ワタクシ】」

「そもそも、いつもウジウジオドオドしている【僕】に話題を振ったところで

まともな返事が返ってくるはずがないのですから話しかけるだけ無駄です」

「う、うぇぇぇ～～～ん！！」

「【ワタクシ（テメー）】のがよっぽどひでーこと言ってんじゃね

ぇか！！」

「ケラケラケラケラケラッ！！
ほんまに【ワタクシ】はドSやなぁ～
でもあんまし【僕】いじめたらアカンで
【僕】は一度泣きはじめたらなかなか泣き止まへんのやから
ケラケラケラケラケラッ！！」

「そう思うのならケラケラ笑ってないで少しは【僕（彼）】を慰めては？
【オイラ（あなた）】の『馬鹿みたいな』明るさがあればすぐに泣き止むでしょ」

「ま～た『馬鹿みたいな』を強調してしゃべる～
ほんまに人の神経を逆撫ですんのが好っきゃな【ワタクシ（自分）】」

「【オイラ（あなた）】にはまったく通用しないようですがね……
チッ」

〈ギャーギャーワーワー〉

「……なんてゆーか」

「一気に賑々しくなったな……」

「ちょっと【あんた達】！！いつまでじゃれあってんの！！」

〈ギャーギャーワーワー〉

「……聞いちゃいねーな
さて、標的が増えちまったところでどうする古賀ちゃん？
やっぱ『五つ』も運ぶのは骨が折れるか？」

「名瀬ちゃん…私の験体名忘れちゃったの？」

「？
『骨折り指切り』だろ？
それがどうしたって――」

「験体名に入ってるくらいなんだよ？多少の『骨折り損』なんて朝飯前だよ！」

「……いろいろツッコミたいとこはあるが
とりあえず『骨折り損』の使い方間違ってるぜ古賀ちゃん」

――数分後――

「ストップ、ストーップ！
いい加減にしろ！
マジで収拾つかないから！
とりあえず今は目の前の敵に集中すること！いいな？」

「ハーイ」×４

「……終わったか？」

「あ、名瀬先輩

お待たせしました」

「あらためて聞くけど【その子達】は誰なの？
見た目がそっくりだけど五つ子かなにか？
てゆーかどっから湧いて出てきたのよその４人は」

「質問の多いやっちゃなー」

「まぁ何の前触れもなく突然増えたのですから
疑問に思うのも無理はありませんが」

「え、えーとですね…
【僕達】はなんなのかっていうと――」

「いちいち説明なんざする必要はねーんだよ【僕】！！
【俺様達】を呼び出したってことはアレだろ？
ピンチだったから呼んだってことだろ？【俺】」

「まぁピンチなことには変わりないけど…
……そうですね、待っててくれたお礼に【こいつら】のことを
ざっくりですが説明します」

「あァ？おいおいマジかよ【俺】
ンなことする必要ねーだろ！」

「まぁまぁ落ち着きーや【俺様】
楽しみはあとにとっといた方がええやろ？」

「……わーったよ、サッサと終わらせろよ」

「んじゃあらためて……
【こいつら】は言うなれば【俺】の分身ですよ」

「……分身だァ？」

「分身って……そんな漫画じゃあるまいし―」

「ところが実際に目の前にその漫画みたいな現象が起きちゃってるんですよ」

「……ますます【お前】を拉致りたくなってきたぜ」

「ふ、ふん！【あんた達】程度の奴が何人に増えても関係ないもんね！
一人はもう戦闘不能なんだ！あと四人を確実に仕留めれば――」

「一人はすでに戦闘不能…？
はて？彼女は一体誰のことを言っておられるのですか？」

「さあ？もしかして…【僕】？」

「【オイラ】やないとは思うけどー？」

「【俺様】なワケがねぇ」

「【俺】でもないな」

「な、何言ってんのよ！
【あんた】よ【あんた】！
両腕が明後日の方向にひん曲がっちゃってる【あんた】！

そんな腕で闘えるワケがないでしょ！？」

「さっき自分でもピンチだっつってただろ」

「あぁ！

それはこの腕で古賀先輩を相手にするのは難しいと思ったからで

別に戦闘不能になったからピンチって言ったワケじゃありませんよ

……脚はまだ無傷ですしね」

「……ッ！！

どっちにしろそんな腕じゃまともに――」

「【ワタクシ】、【オイラ】、やってくれ」

「わかりました

【ワタクシ】が左腕をやりますから【オイラ】はそっちを」

「ホイホイ、うわちゃ～これまたえげつないことになっとんな」

「？

お、おい【お前ら】何を――」

〈ゴギン〉

〈ボギン〉

「！！」

「う、嘘……折れた腕を無理矢理元に……！」

「……あの人達何をあんなに驚いてるの？」

「【俺様】に聞くな」

「何を驚いてるって……！
両腕が折れてんのよ！？
それを無理矢理元に戻すなんてそんなの――」

だろ」
でしょう」
「『普通』だよ」
ですよ」
やろ」

「ふ、普通って……！」

「よく言うじゃないですか
『突き指したら引っ張ればＯＫ』だって
それと同じですよ」

「……突き指と骨折じゃ症状が違うし、そもそもその治療法は迷信だぜ
突き指した時は患部を冷やすのが適切な処置だ」

「へーそーなのかー」

「おい、その態度は先輩方に失礼だろ【俺様】」

「あーうるせーうるせー！
なぁもういいだろうが！さっさと暴れさせろってーの！」

「これだから単細胞バカは…」

「なんか言ったか【ワタクシ】」

「いえ、なにも」

「さてと、それじゃそろそろ再開しましょうか古賀先輩
どっかの単細胞バカがウズウズしっ放しみたいですからね」

「五人対一人……古賀ちゃんが仮面ライダーなら
さしずめ【お前ら】は戦隊ヒーローってか？
なかなかウィットに富んだジョークじゃねーか」

「でしょ？
そういう意味も込めて【こいつら】を呼んだんです」

「えっ！？」×４

「？
どうした【お前ら】」

「そ、そんなくだらない理由で【ワタクシ達】を……？」

「呆れてものも言えへん…」

「あはははは！
まあまあいいじゃないの
ほら、さっさとやるよ」

「もうすでに一人で突っ走っとるのがおるで」

「え？」

「だーはっはっはっはっは！
やっと暴れられるぞゴルァ！」

見てみると【俺様】が古賀先輩に向かって突進していた
猪か【俺様（あいつ）】は

「ダラァッ！ドラァッ！デヤァッ！ウリャアッ！シャアッ！」

掛け声は威勢がいいけど……

「へーんだ☆一発一発が大振りすぎ！全然当たんないよーだ！」

「ウギギギギ……！
ちょこまかしてんじゃねー！」

「……完全に遊ばれていますね」

「せやな」

「て、手伝わなくていいの？」

「そだな、ほんじゃそろそろ【俺達】もいくか」

その一言を合図に各々が各々のタイミングで戦闘に参加していく
最初に【俺様】、次に【オイラ】、【ワタクシ】、【俺】といった順番だ
【僕】はなんかそこら辺をあたふたしてる

……【僕（お前）】が「手伝わなくていいの？」って言ったんじゃなかった？

「クッ…！
さすがに四人相手は……」

額に汗が見え始めた古賀先輩
果たしてあの汗は疲労からか？焦りからか？

「そろそろ降参しますか？」

「しない！してたまるか！後輩にナメられっぱなしで終われるワケないでしょ！」

「片意地張っとったってえぇことあらへんよ先輩？」

「うるさい！意地なんか張ってない！」

気のせいか古賀先輩、ヒートアップしてらっしゃる
そんな会話をしてる間ももちろん交戦中だ
気付いたら【僕】からかなり離れてしまっている
どうやら戦闘に参加するかしないか迷った結果、参加しないことにしたみたいだ

…弱虫なくせにこういう時は神経図太いんだよな【僕（あいつ）】

「……」

名瀬先輩は沈黙……
かと思いきや突然口を開いた

「かーっ！古賀ちゃんも性格悪いなまったく
ピンチのフリして敵の意表をつく！
いやはや、戦闘においてはセオリー中のセオリーだろうけどよぉ…
おおよそいたいけな【後輩】にとる戦法じゃあねーぜ」

……は？
いきなり何を――

「（ニヤリ）
もう～駄目だよ名瀬ちゃん！
せっかく演技してたのに～
バレたら元も子もないんだ……よっ！！！」

瞬間、大跳躍で【俺達】から遠ざかる古賀先ぱ……
……いや違う！！
【俺達】から遠ざかったんじゃない！！
確かあっちには！

「にゃははは☆
ほら、私ってばマメな性格だからさ～
夏休みの宿題とかも最後の日に一気にやるんじゃなく
毎日コツコツやる派なんだよね
だ・か・ら！
まずは潰せる奴から潰す！
それが闘いのセオリーってもんでしょ！」

「アカン！あっちには【僕】が一人や！」

「ハンッ！

今さら気付いたって遅いぜ！
【お前ら】の足じゃ古賀ちゃんには追い付け――」

「何を呑気なことを言ってるんですか先輩！」

「……何？」

「【ワタクシ達】が心配しているのは【僕】ではなく古賀先輩の方です！」

「……どういうことだ？
あの【オドオドしてる奴】がそんなにヤベーってのか？」

「ヤバいのは【僕】じゃなくて【俺様】です！
特にイラついてる時はとんでもないですよ！」

「あぁ？
【俺様】ってのはいの一番に古賀ちゃんに向かってきた【野郎】だろ？
そいつなら今ここに――」

と、名瀬先輩が【俺様】を指差す
それとほぼ同時に

「【ぼぉぉぉく】！！今！すぐに！【俺様】と『代われ』ぇぇぇぇ！！！」

【俺様】の怒号が轟く

「『代われ』？

代われっどういう――」

「び、びっくりした～
いきなり【俺様】ってば怒鳴るってくるんだもん
心臓止まるかと思ったよ」

「！？
なんだ？急に怒鳴ったかと思ったら今度は雰囲気が……」

「遅かった…！
とりあえず名瀬先輩もついてきてください！走りながら説明します！
【ワタクシ】！」

「わかっています！」

【ワタクシ】が名瀬先輩をお姫さま抱っこする

――数分前・【僕】の場所――

「あ～あ、【みんな】もう見えないとこまで行っちゃった」

手伝わなくていいの？って自分から言ってはみたものの…
【僕】なんかが役にたてるとは思えないしな……

「どうしよう……木陰で昼寝でもしてようかな？
でもそんなことしてたら後で【みんな】になんて言われるか…」

やっぱり【僕】も【みんな】のところに……あれ？
誰かこっちに来る……？
あれは……

「にゃはははは☆
みーっけた！
まずは一番弱そな【あんた】から撃破だよ！」

「う、うわわわぁぁぁ～～！！」

こ、古賀先輩だ！ど、どうしよう！？どうしよう！？どうしたら！？

〈【ぼぉぉぉく】！！今！すぐに！【俺様】と『代われ』ぇぇぇぇ！！！！〉

「ヒャァァァァ！？
お、【俺様】？
か、『代われ』って…でも…」

「はい！まず一人目ぇ！！」

「うわわぁ！！」

拳が目の前に迫ってくる！！
ええい！もう、どうにでもなれぇ～！！

〈バシィッ！〉

「！？
（止められた！？）」

「やっと捕まえたぜ……
（ニ〝ィィィィ）」

――――――回想終わり――――――

「…で？どういうことなんだ？
まずは、なんで【お前ら】がそんなに焦っているのかを教えろ」

【ワタクシ】にお姫さま抱っこされながら名瀬先輩が問い掛けてくる

「問題は古賀先輩が【俺達】に『向かってきた』ことです」

「向かってきたことが問題？
なんだそりゃ？普通敵がいたら立ち向かうだろ」

「そうさせないために【オイラ達】は五人おるんや」

「普通五人から一斉に向かってこられたら逃げるか、
もしくは攻撃を避けることで精一杯になるでしょうからね」

「もし敵が『五人の誰かに向かってきたら別の一人が迎撃、その攻

撃を阻止』
それを繰り返して敵の体力を削り、降参させるのが【僕達】のやり方なんです
…ど、怒鳴られた拍子にびっくりしてつい代わっちゃったけど」

「それだよ
『代わった』ってのはどういうことなんだ？
【お前】さっきまで鬼のような形相で古賀ちゃんに向かってたじゃねーか
全部かわされてたが」

「そ、それは【俺様】ですよ
【僕】は【僕】です……」

「……え～と」

「……それは【ワタクシ】から説明します」

ため息をつきながら【ワタクシ】が説明を始める

「先程も言いましたが【ワタクシ達四人】は【俺（彼）】の分身です
一人一人は特に大した力は持ってはいません
ですが少々特殊な技術を備えていましてね」

「特殊な技術？」

「『意識の交換』です」

「意識の……交換？」

「【ワタクシ達】は見ての通り外見がまったく一緒です
外見だけじゃない
視力、聴力、体調、その他もろもろが寸分違わず同じなのです
性格と喋り方を除いてね」

「そりゃ分身だったら普通だろ
むしろ分身なのに性格と喋り方がバラバラなのがおかしいんじゃねーか？」

「……」

「ケラケラケラケラッ
ツッコまれてやんの～」

「（ギロッ）」

「サーセン」

「……とにかく！
【ワタクシ達】はどれだけ離れていようとお互いの意識を交換できるんです！
容器の中身を別の容器の中身と取り替えるようなそんなイメージが一番わかりやすいでしょうかね」

……そう
お互いの意識を交換し、まるで別人に『代わる』
そこにいると思わせて実はいない
故に、『誤認識』の『五人式（クインデッド）』

……五人の意識を交換なんて芸当

どこぞの殺し名序列第一位にでも入れそうだな

「なるほどな……
だからさっきまで暴れ回ってた【お前】が
急に借りてきた猫みたいにおとなしくなったのか
これで合点がいったぜ
……でもまだわからねーことがある
いや、根本的なところがわかってねー
なぜ【お前ら】はそこまで焦るんだ？」

「……【俺達】の闘い方の説明はしましたよね？」

「ああ、敵に『立ち向かわせない』んだろ？」

「そうや
せやけど【オイラ達】の中で一人だけごっつ好戦的なメンバーがおる
いや、あれはもう戦闘狂言うてもおかしないで」

「……それが【俺様】です」

「あの【猪突猛進野郎】か……」

「そもそも『立ち向かわせない』ってやり方は……
【俺様（あいつ）】の相手への攻撃を抑えるために編み出したんです
【俺様（あいつ）】自身はめったに攻撃を当てられません
攻撃のほとんどがさっきみたいな大振りばっかですからね
だから【俺様（あいつ）】から向かっていく分には別に構わないんです」

「……だがもし
『メンバーの一人が離れた場所にいて』、
『その一人を敵が狙っちまった場合』は、
『意識の交換によって入れ代わりが行われ』、
『立ち向かせないやり方は無効果しちまう』……ってことか
……ハンッ！
俺も敵のパラメータを無効果する策はいくつか知らねーでもねーがよー
『味方』を無力化させる闘い方なんざ聞いたことねーぜ」

「そうでしょうね」

「でもよー、それならなんで【こいつ】が離れた時にそこに気を付けなかったんだ？
まさか気を付けなかったんじゃなくて気が付かなかったとか言うなよ」

「言いませんよ
それは、まさか古賀先輩がピンチの演技をしてるなんて思わなくて本当にすぐに降参してくれそうな雰囲気だったから……
降参まではしなくとも逃走ぐらいはしてくれるかと……
まんまと騙されちゃいました」

「…つまり古賀ちゃんは、勝つためにやった演技で負ける羽目になるってことか」

「負けるだけならまだいいんですがね…」

そんなこんなでやっとさっきの場所に到着

随分離れたもんだ
周りを探してみると……

「オラァァッッッッ！！！！

さっきまでの元気はどうした先輩よォォォ！！！」

「う、ああ、ぐ、うあ……」

「こ、古賀ちゃん！！」

まるでボロ雑巾のようになった古賀先輩と【俺様（あいつ）】がいた

「あぁ？なんだ名瀬先輩か……
なんつーかアレだな？あんたご自慢の改造人間も大したことねーのな」

ボロボロになった古賀先輩に駆け寄る名瀬先輩

「古賀ちゃん…」

「どいてくれや名瀬先輩
今からちゃっちゃっちゃっとトドメ刺すからからからよォ」

「…………」

「なぁどいてくれって」

「……」

「…おい」

「……」

「（ブチッ）
あーハイハイ
そーかそーですか
名瀬先輩も一緒にブチ殺されたいんですねわかります！！！」

「「「「やり過ぎだ」」」」

【俺様以外の四人】で【俺様】を羽交い締めにする

「！？
【テメーら】…何してんだ？」

「それはこちらのセリフです
何をやっているんですか【俺様（あなた）】は？」

「さすがの【オイラ】もこれはちょっと笑われへんよ」

「い、いくらなんでもひどい」
「勝手に暴走してんじゃねーよバカタレ」
「……放せ
……おい、聞こえねーのか！
放せって言って――――！！」
〈バギン〉
〈ベギン〉
〈ゴギン〉
〈ボギン〉
「ガァァァァッツ！！？
う、腕がァ！脚がァァァ！！」
「頭、冷やしとけ
……あの、すみません名瀬先輩
古賀先輩がそんな風になったのは【俺様】の……
いや、【俺】の責任です」
暴れる【俺様】をあとの【三人】に任せて
【俺】は名瀬先輩と古賀先輩の下にに歩み寄る
「謝るな
…謝って済む問題じゃねー」
「……名瀬先輩」

怒ってる…
これ以上ないくらいに

そりゃそうだ
大事な大事な友人がボロ雑巾みたいにさせられちまったんだ
怒らない方がどうかしてる

「本当にすみません名瀬先輩
【俺】にできることならなんでもします」

「……本当か？
本当になんでもするんだな？
なら、おとなしく拉致られろ
もちろん嫌とは言わせねー」

「うぐ！？」

やはりそうきたか
でもここまでやっちゃったからには何らかの責任は果たさなきゃならないし……

「……わかりました
【俺】も男ですから覚悟を決めます」

「やったね名瀬ちゃん
験体が増えるよ☆」

「おいやめろ……って
え？……あれ！？古賀先輩！？あれ！？ケガは！？」

「ん？
にゃはは☆
あの程度のケガ、よ→ん十秒もあれば完治できるよん☆」

「んなぁっ！？」

そ、そういや古賀先輩って複雑骨折程度なら
十秒で治るぐらいの凄まじい回復力なんだった……

「いやはやハリウッドも真っ青な名演技だったぜ古賀ちゃん
『分身の術』や『意識の交換』なんつー隠し芸にゃ驚いたが
なんとか目的は達成だ」

「いやー私もまさか一年坊にあそこまでやられるとは思わなかったよ☆」

め、目眩がしてきた……
いや、でも…

「……よかったぁー」

「え？」

「何がだ？拉致られるのがか？
随分と特殊な性癖をお持ちじゃねーか」

「じゃなくて！！
古賀先輩のケガですよ！
大事にならなくてよかったってことです！！

てか名瀬先輩！
一応女の子なんだから『性癖』とか軽々しく言わない！！」

「お、おう…（一応って…）」

「……私のケガ、心配してくれたの？」

「しますよそりゃあ！！」

「……ふーん」

「はぁ…なんかドッと疲れましたよ……
おーい！【お前ら】ー！もう戻っていいぞ！」

【四人】に声を掛ける
【三人】が頷いた後に戻り、残りの【一人】を強制的に戻すと、同時に『五人式』のデメリットを受ける

〈バギン〉
〈ベギン〉
〈ゴギン〉
〈ボギン〉

「うおっ！？」

「な、何？どうしたの？」

「グゥッ……～～ッッ！！
はぁはぁ……、『分身の術』の…副作用です…」

「副作用？」

「はい

『分身を戻す時、分身が負っている傷や病気はすべて本体に還元される』

それが『分身の術』の副作用なんです

さっき【俺様（あいつ）】を止める時に両手両足をへし折りましたからね

それが還元されて…、【俺】は今合計六ヶ所骨折していることになります」

「……使い勝手の悪い術」

「ははははは……

それじゃあ【俺】はこれで失礼します……」

「待てコラ」

「あぎゃあ！！」

お、折れた腕を掴まれた……

「今折れてるって言ったばっかりなのに……」

「なに当たり前のように立ち去ろうとしてんだよ

俺に拉致られる約束だろうが」

『拉致られる約束』って……

そこだけ聞いたらすごいインパクトあるな……

「いや、でもそれは、アレですよ、アレ

古賀先輩に取り返しのつかないことをしたお詫びとして
結んだ約束であってですね…」

「その言い方やめて
変な誤解生むから」

「あ、すいません」

古賀先輩に真顔で注意された

「ほー、そーか……
【お前】はアレか、『約束は破るためにある』とか
そんなことを言っちゃうような連中（ワルモノ）ってことか」

「う」

「そもそも【お前】覚悟を決めたって言ってたよな？
男の覚悟ってのはそんな安上がりなもんなのか？」

「……」

「古賀ちゃんはたしかに今はこうしてピンピンしちゃいるが
一度ボロボロにしちまったことは事実だろーが
違うか？」

「……」

「乙女の柔肌をあれだけ傷つけておいて……
今さら『約束はなかったことに』なんて、そんな虫のいい話が―

―」

『生気者』発動！！！

「あ、逃げた」

「あ、待ちやがれコラ！！
クソッ！脚、折れてるんじゃなかったのかよ【あいつ】！
古賀ちゃん！ケガが治りたてで悪ぃが追ってくれねーか！？」

「……やめとく」

「ど、どうした？
やっぱりまだどっか完全に治りきってねーとか？」

「違うよ
ケガはもう大丈夫」

「じゃあなんで……？」

「んー……なんていうか……
疲れちゃった☆」

「……
そっか
疲れちゃったならしょーがねー
帰るか」

「うん☆帰ろ帰ろ

あ、ゴメンね名瀬ちゃん
今日はこんな面倒ごとに付き合わせちゃって」

「いーってことよ
ボルゾイは手に入れられなかったが……
代わりに【面白い奴】に会えたからな
メールをくれた『謎の美少女』様様だぜ」

「そういえばあの『謎の美少女』って一体誰なんだろうねー？」

そんな雑談を交わしながら
『十三組の十三人』、名瀬夭歌と古賀いたみはその場をあとにした

まさかそんな出来事があったなどとは知る由もない生徒会は
そのあと、きっちりボルゾイを捕獲致しましたとさ

第18箱「しますよそりゃあ！」（後書き）

どうでしたか？
不自然じゃありませんでした？

名瀬の古賀に対するしゃべり方とか感情の起伏とかには気を付けたつもりです。

第１９箱「……関係ないか」（前書き）

繋ぎ回でありフラグ回です。会話の運びが早いです。不自然に感じるかもです。

あと、めだかボックスのキャラ達は共通して九州地方に存在する『市の名前』があてがわれていますけど……
この作品の主人公の名前は『市の名前』から取ってはいません。もっと小さい区分です。

なんか『市の名前』ってルールよりも『かっこよさ』を優先しちゃいました。
でも『九州地方の地名』には違いないからギリギリセーフだよね？

第19箱「……関係ないか」

食堂

〈ズズズズズ…〉

昼休みの食堂は本当ににぎやかだ
食堂に来るたびにそんなことを思う

「えーっと
昨日ボクシング部行ったから…格闘技系はこれでコンプリートか
じゃあお次は趣向を変えて格闘球技攻めてみっかなー」

〈ズズズズズ…〉

「……お前どうしてそんなあちこちで暴れてんだ?
そんなスポーツ好きだったっけか?」

〈ズズズズズ…〉

「別に
ただ俺の中のルールでな
一日五リットルの汗をかくって決めてんだ
お、ラクロス部あるじゃん」

「……脱水症状起こすよ善吉っちゃん」

「その分ちゃんと補給してるからいんだよ」

今【俺】は善吉っちゃん、日向くん、袖ちゃんの四人で食堂に来ている
何げに日向くんとはこれが初対面だから気まずい

〈ズズ…チュルンッ〉

「ぷっはぁぁぁぁぁ
あーーわかるわかる
あたしも一日五リットルのラーメンを飲むって決めてるし
似たようなもんだよね♪」

「不知火
ラーメンはドリンクじゃない」

「『カレーは飲み物』以来の衝撃発言だね」

「シーザーサラダって野菜ジュースだと思うんだよねー♪」

「ま、それくらいしないとあの黒神（バケモン）には
付き合いきれないってのはわかるけど
……もうやめといた方がいいかもな」

日向くんのスルースキルぱねぇ

「お前噂になってるぜ
生徒会の『部活荒らし』だとよ
入る気もないクセにって」

「（じーーーっ）
なにお前

俺のこと心配してんの？」

「バッ！？
お前の心配じゃねーよ！！」

…しかしこの男、ツンデレである

「いーんだよ
こちとら最初から名前を売るつもりでやってるんだから
つーか、お前なに仲間みたいな顔して一緒に飯食ってんだよ」

さらっとキツいこと言う善吉っちゃん

「……ごちそうさまでした」

「あ？
なんだもう食っちまったのか？　随分早いな」

「あぁうん…
ちょっと野暮用があるからさ
悪いけど【俺】もう行くね」

「お、おぅ」
サッサと食器を片付けて食堂を去る

「……なんかよぉ
【あいつ】って思ったより暗い奴なのな
お前と不知火とでつるんでるのをたまに見かけてたから
もっと印象深い奴かと思ってたんだがよ」

「いやまぁいつもはもうちょっと生き生きとしてはいるんだけどな…
今日は特に元気がねーみたいだったな
日向、お前がいたからじゃねーか？」

「俺のせいかよ」

「人見知りなんだよ、たぶん」

「ふーん」

「あたしには『先輩達とケンカしちゃって気まずい』って感じに見えたなー♪」

「？
なんか知ってんのか不知火？」

「いやいや
あたしはなんも知らないよ？」

にやりん♪と微笑む不知火

「その顔はなんか知ってるって顔だぜ不知火
教えろよ」

不知火の肩を掴もうと手を伸ばす善吉
……だが

〈バシッ〉

その手を払う不知火

「『教えろよ』？
教えてください…だろ？」

「教えてください」

「よろしい☆
って言いたいところなんだけど
あたしは本当になんにも知らないんだよねこれが（棒）」

「嘘だっ！！」

「……とりあえずお前らの仲が良すぎて気持ち悪い」

――――――中庭――――――

ただいま人目につかなそうな所で会議中…

「だからァー！
反省してるって！」

「してるだけではダメなのです
それを次に結びつけなくては何の意味もないのですよ？」

「相手が古賀先輩やったからよかったものの…
他の先輩方やったらアウト必至やったで」

「そ、そんなに【俺様】ばかり責めないであげてよ…

そ、そもそもあの時【僕】が代わったりしなければよかったんだし…」

「庇う必要はないぞ【僕】
【俺様（こいつ）】が暴走せずに抑えていればああならなかったんだからな」

「だってよー！
あんだけやって一発も当たんねーんだぜ？
ブチ切れもするだろ！」

「【俺様】のパンチなんて何発も食らってられへんで
骨が何本あったかて足りひん
最悪ミンチやな　ケラケラ」

「どこに笑うポイントがあったのかはわからないけど……
次からは気をつけるようにな【俺様】」

「善処はする」

「よし！この話はこれで終わり！
いつまでも引きずってたって仕方がないからな」

「そやそや、悩んでる暇があったら青春を謳歌した方がええで
部活にいそしんだりとかなー

もっと具体的に言うなら柔道部とかがオススメやな」

「……やけに柔道部をプッシュしてくるな【オイラ（お前）】」

「え？【オイラ】？

何も言うてへんで？」

「は？
……じゃあ今のは？」

「こっちや、こっちこっち」

「ん？」×5

振り返るとそこには『柔道界の反則王』こと

「鍋島先輩……でしたか」

鍋島猫美先輩が立っていた

「ん？ウチのこと知っとんの？」

「そりゃ知ってますとも
特待生（チームトクタイ）で
柔道界の反則王とも呼ばれるあなたを知らない奴なんていませんよ
いたとしたらそいつはモグリですね」

「ククッ
それは誉めすぎやってジブン」

反則王なんて言われてるのにそれを誉め言葉として受けとめるとは…

「で、その反則王（鍋島先輩）がどうしてこんな場所に？」

「いやな？

たまたまこの近くを歩いとったら随分と親近感のわく
しゃべり方が聞こえてきたもんやから気になってちょっとな」

「『親近感のわくしゃべり方』って…」

「もしかして【オイラ】のことやったりします？」「そうそう！ジブンやジブン！」

「『しゃべり方が気になったからちょっと立ち寄ってみた』って…
そんなに珍しいですか？」

「少なくともウチが知っとる中で
関西弁しゃべっとる生徒はこの学園にはおらんな」

たしかに『めだかボックス』で鍋島先輩以外に関西弁キャラっていなかったな

「んで、声のする方に来てみたらこんなとこで五つ子ちゃんが――」

じゃねーよ」
ではありません」
「五つ子じゃないよ」
ちゃうわ」
じゃないです」

「な、なんや急に…コワイ顔して声まで揃えて…
ウチなんか気に障るようなこと言うてもうた？」

「あ、す、すみません

気にしないでください」

「？」

……『五つ子』

『兄弟』や『双子』とかの単語を聞くと嫌でも［あいつ］の顔が浮かぶ……

今頃どこで何をしているのやら

「……関係ないか」

「ん？

なんか言うた？」

「いえいえ独り言ですよ」

「ふ～ん、あっそ」

見事に興味なしっすね

「まぁそれは置いといて…や

（じぃ～～～～～～）」

「な、何？」×５

「ふむふむ、なるほどな…

なかなかどうして……」

【俺達】をまんべんなく隅々まで見る鍋島先輩

「なぁ【キミら】
さっきの話、ちょっと本気にしてみぃひん？」

「さっきの話？」

「青春を謳歌するために柔道部に入ろー！！
っちゅう話のことや」

「か、勧誘ですか」

「まぁぶっちゃけそうなるな」

「でも【俺達】スポーツとかはあんまり得意な方じゃ……」

「いやいや、そんなことない！
ウチが見たところ【キミら】には才能がある！
これはもう運命や！【キミら】は柔道部に入るべきやって！」

「そ、そうですかね？」

「ああ！間違いない！ウチが保障する！
今すぐ柔道部に入りぃ！さあ今すぐに！」

「ちょちょちょ…！
さすがに今すぐは…ちょっと」

「そうか？
……そうやな、ほんなら【キミら】の気が向いた時に柔道部に見学に来てや
その時に柔道部の雰囲気や練習風景なんかを見て……

あっ！体験入部も大歓迎やからヨロシク☆」

「は、はぁ…」

すごいな…この人…
いろんな意味で

「ならそういうことで！柔道場で会えるのを楽しみにしとるで」

そう言って鍋島先輩は去っていった
……嵐のような人だったな

「おい、いいのかよ」

「……何が？」

「柔道部に入部の件ですよ」

「ほんまに入る気ぃなん？」

「んなワケないだろ？
……でも見学は行くつもり」

「な、なんでさ？
入部するつもりがないなら行く必要はないんじゃ……」

「なに言ってんだ
阿久根高貴と善吉っちゃんの勝負の回があるだろ？」

「あ、そういえば」×４

「見学はその日に合わせて行くつもりだよ」

「ですが…」

「もし本当に入部させられそうになったらどうすんだよ？」

「ああ、それなら心配ないよ
あの人【俺達】を本気で勧誘したワケじゃないから」

「なんでわかんの？」

「【俺達】を勧誘する時に鍋島先輩、『【キミら】には才能がある！』
って言ってただろ？」

「た、たしかに言ってたけど…」

「あの人が『才能がある！』なんて口説き文句を使うと思うか？
あの人は才能がある天才を嫌っているからこそ、
その天才に汚く勝つためにこそ、柔道をやってるんだぜ？」

「あぁ…なるほど」×４

「大方、新入生の一年坊に片っ端から声かけてるんだろうさ
『それで入部してもろたら儲けもん♪』ぐらいの気持ちでね」

【俺】は大きく伸びをしながら考えてみる

善吉っちゃんと阿久根高貴の勝負回は重要なイベントだ

侵攻役が何か仕掛けてこないとも限らない
……まぁ何もなくても見に行く価値はある

気付くと【俺】は、期待と不安
そして武者震いと鳥肌と寒気と疲労感を感じていた

「……それは病院行け」×４

さらに、愛しさと切なさと心強さも……

「いい加減にしろ！！」×４

第１９箱「……関係ないか」（後書き）

ちなみに、

【俺様】：短気。しゃべり方は乱暴でがさつだが不良というワケではない。上から目線で命令されるのは嫌いだが頼まれると断れない。注意は素直に聞く。

【ワタクシ】：ドS。基本的に丁寧な口調でしゃべる。【みんな】をまとめるサブリーダー的なポジション。けっこう根に持つタイプ。

【僕】：気弱。しゃべり出しがほぼ、どもる。一度泣き出すとなかなか止まらない。被害妄想がひどい時がある。猫背気味なのが最近の悩み。

【オイラ】：楽観的。基本的に笑顔が絶えない。笑い方が特徴的だけど、実は意識してやってる（キャラを立てるため）。関西弁と一人称が噛み合ってないのは自覚済み。

っていう設定です。一応。

第２０話「微塵も思ってません」（前書き）

善吉と阿久根の勝負の回です。
見なくても物語にはなんら影響しないので飛ばしても大丈夫です。

この回からかなり話を飛び飛びにする予定です。

第２０話「微塵も思ってません」

「鍋島って…、特待生（チームトクタイ）の鍋島猫美さんか？
あの有名な？柔道界の反則王と呼ばれたあの人？」

生徒会がいつものように目安箱の投書をチェックしていると、
珍しい人物からの投書があった

「あの人今部長だったのかよ
知らなかったな
けど話を聞くかぎり、あんま悩むってタイプにゃ思えねーぞ？」

なにせ『柔道界の反則王』などという仰々しい呼び名だ
悩んでいる姿をイメージするのは難しい

「まあ何にせよ行ってみようではないか
柔道部といえば懐かしい顔にも会えるだろうしな」

「……
（それは知ってたよ
だから俺は柔道部には近寄りたくなかったんだ）」

すでに柔道着に着替えやる気満々なめだかとは裏腹に、
急に『柔道部に出向く』という事実を突き付けられた善吉は
ただただ気が重くなる一方だった

――柔道場付近――

「で？
なんで【お前】がここに？」

「いやいや奇遇だね！むしろ奇遇としか言いようがないね！
まさか『たまたま』柔道部に見学しに来たら生徒会と合流するとは！」

柔道部への道すがら、生徒会メンバーは主人公と合流したが、もちろん偶然ではない
来る日も来る日も柔道場の影にひっそりと隠れて生徒会が来るのを待っていたのだ

※主人公はイベントが起こる具体的なタイミングを把握していません

「ふむ
【貴様】は柔道部に入るつもりなのか？」

「いえ、あくまで見学です
『どっかの誰かさん』みたく入部する気もないのに体験入部だけを繰り返して
部を引っ掻き回すようなことはしたくありませんから」

「……」

「ん？
なに善吉っちゃん？
【俺】の顔に何かついてる？」

「……なんでもねーよ」

「あー！ひょっとして勘違いしてる？
【俺】が善吉っちゃんのことを皮肉ってるとか！
善吉っちゃんのことをバカにしてるとか！さ！
うわ恥ずっかしいー
自意識過剰ー
どんだけ自己中な考え方してんの善吉っちゃん！
自分のことをそーんな重要人物だと思いながら日々を生きてるんだおもしろーい」

〈ゴスッ！〉

「痛い！」

「悪い、手が滑った」

「ぼ…暴力をふるった…
冗談だったのに……」

「だから謝っただろ」

「いつまで遊んでいるのだ
着いたぞ」

柔道場に到着した
中から物凄い轟音がする
それだけハードな練習をしているんだろうな

「やーやー、ようこそいらっしゃいませ！
ウチが差出人！柔道部部長の鍋島猫美でっす！
本日はどーぞよろしく！」

道場に入ると鍋島先輩がお出迎えしてくれた
もちろん【俺】ではなく生徒会をだ

「生徒会長の黒神めだかだ
今日はできる限りのことをさせてもらうぞ」

「うんうん、頼りにしとるで黒神ちゃん！」

がっしと握手を交わす鍋島先輩と会長さん
……の横を我関せずと通りすぎる善吉っちゃん
……のあとについていく【俺】

「いやーウチは部長ゆーても名前だけみたいなもんやったから
誰に後継がせたらえーんかなんか決めきれんでなー！」

「……（意外なキャラだ）」

「なんか意外なキャラだよね
鍋島先輩って」

「え？」

「いやさ、噂では反則王とか言われてるから
もっと薄汚いようなオーラを纏ってるかと思ってたんだよ
でも実際に会ってみたら全然そんなことはなかったなってゆーか
――」

「……今回が初対面ってワケじゃないみたいだな」

「え？なんでわかんの？」

「言葉の端々に出てるっつーの」

マジでか

全然意識してなかった

「やーやー、そこの一年坊諸君！
そーんな隅っこの方でなにを話しとんの？」

会長さんとの話を切り上げたのか鍋島先輩がこっちに来た

「【ジブン】は……
たしかこないだ柔道部に入るゆーてくれた子やろ？
【ジブン】も生徒会のメンバーやったんか？」

生徒会のメンバーじゃないし

そもそもそんなこと約束した覚えはない

「今日はとりあえず見学のつもりで来たんです
そしたらたまたま生徒会と鉢合わせたのでついでに……というワケで」

「なんだ
やっぱ【お前】知り合い？」

【俺】と鍋島先輩のやり取りを見て気になったのか

善吉っちゃんが話に入る

先輩と【俺】は顔を見合わせ…

「先日柔道部に勧誘されました」

「先日柔道部に勧誘しましたー」

「「とりあえずそんな感じ？」」

「……あっそ」

「あからさまにスルーしたね
そこは『にしては息ぴったりじゃねーか』とかツッコんでほしかったな」

「べつにツッコミ入れるほどでもねーだろ」

……あれ？もしかしてさっきのこと怒ってらっしゃる？

「そーいえば…
今日は見学だけやゆーてたけど【ジブン】一人なんか？
あとの四人はどないしたん？」

「え！？」

「ん？『あとの四人』？『あとの四人』って誰ですか？」

「いやいや、誰て決まってるやん
五つ子の残りの四人――」

「わーわーわー！！！」

「うお！？
なんだよ急に！？」

「い、いや！なんでもないよ！？うん！全然なんでもない！」

「？」

「鍋島先輩！！」

「な、なんや？」

「今日は会長さんに挨拶がしたいって人がいるんじゃないんですか！？

いいえ、いるはずです！いるに決まってます！」

「あ、あー
そーやそーやそーやったわ（なんで知ってんの？）
黒神ちゃん！実はジブンに挨拶したいゆー奴おんねん！
阿久根！おーい阿久根クン！」

あ、焦った…
善吉っちゃんや会長さんは【俺】に兄弟がいないことを知ってるだから【アイツら】のことを知られたら不自然に思われてしまいかねない

まだ善吉っちゃん達には、【俺】が妙なスキルを持ってることは知られたくないしな

鍋島先輩は……
アレが初対面だったからギリギリセーフってことで

「……堅苦しい真似はよせ阿久根二年生
他の者がみておるぞ」

……なんてモノローグやってる間に阿久根高貴の登場シーン飛ばしちまったＺＥ
……マジでイケメンだなー阿久根高貴
…とりあえず爆発すればいいと思います

「私に感謝していると言うのならば頭を下げるな！胸を張れ！！」

「は、はいぃっ！めだかさんの御心のままにっ！！」

ふと横を見てみる

「……」

善吉っちゃんスゲー顔になってる

「おっと…それはそれとして生徒会を執行せねばな
後継者、つまりは新部長の選定だったか
とりあえず貴様は特別枠だ阿久根二年生
善吉と談笑でもしておいてくれ
貴様達は貴様達で積もる話があるだろう」

あ、こっち来た

「……久し振りだね
えーっと
キミ名前なんだっけ？」

「人吉善吉クンですよ
ところで
あんた一体誰ですか？」

「虫が！相変わらずめだかさんの足を引っ張る仕事に精を出しているらしいな
言っておくがめだかさんの支持率が１００％に達しなかったのはキミのせいだぞ！！」

「カッ！あんま意地悪言わないでくださいよ
人格者で通ってる柔道界のプリンスが
下級生いじめなんてファンの女の子が知ったら泣いちゃいますよ？」

……なんでこの二人【俺】を挟んでケンカしてんの？
見えてないの？
気付いてないの？

「さて、私に言わせれば柔道は教わるものではなく学ぶものだ
それゆえに！
まずは鑑定してやろう
貴様達の値打ちをな
我こそはと思う者から名乗り出よ
全員まとめて一人残らず！
私が相手をしてやろう！！」

道場内がざわつく
まあ天地魔闘の構えで下級生からんなこと言われたらざわつきもす

るか

「よぉし！
だったら最初は俺からだ！！」

あの人の名前はたしか城ｎ――

〈グシャッ〉

「私は全員まとめてかかってこいと言ったつもりだぞ？」

……名前を思い出す間もなかった

「おいしいなあ城南クン」

「さすがだなめだかさんは
中学生の頃より更に輝きを増している！」

「……なあ人吉クン
人吉クンはどう思う？」

「…別に
あいつは中二で赤帯取得するようなバケモンなんですから
今更何しても驚きませんよ」

幼なじみにバケモン呼ばわりされる会長さんって……

「ククク
そーかいそーかい
実はウチもおんなじ意見でな

化物言われようと天才呼ばれようとあのコはできることができる
だけやろ？　不可能を可能にしとるわけやない
極端な話、あんなんウチらが普通に歩いとるんと変わらへんで」

「……」

「それに比べたら凡人のクセに天才（バケモン）に
付き従っとうジブンの方がよっぽどスゴイやん
なぁ？部活荒らしの人吉善吉クン？」

ずいずいと善吉っちゃんに近寄る鍋島先輩
さりげなく逃げる善吉っちゃん

見ていてちょっとおもしろい

……にしても会長さんスゴイなー
現役の柔道部員をちぎっては投げちぎっては投げ……

……

そろそろ善吉っちゃんと阿久根高貴の勝負が始まる頃だと思うんだけど……
もし侵攻役が仕掛けてくるんだったらそこだろうな

「…鍋島先輩アンタ
ひょっとして最初からそのつもりで投書したんですか？」

「うん！人吉クンみたいながんばり屋さんがウチはめっちゃ好きなんよ☆」

おっ、始まった

――――数十分後――――

〈ズダァンッ〉

凄まじい音を打ち鳴らして善吉っちゃんが投げ飛ばされた

「…ハァ…ハァ」

若干ふらつきながら善吉っちゃんが立ち上がる

無制限十本勝負
対
無制限一本勝負

先に阿久根高貴が十本取れば阿久根高貴の、
善吉っちゃんが一本取れば善吉っちゃんの勝ち、
という特別ルールで始まったこの勝負だけど……

「おいおいあっという間に九本取っちまったじゃねーか！
阿久根の野郎容赦なさ過ぎ！」「当然だろ
他の格闘技と違って柔道にラッキーパンチはねーからな」

「ほとんど素人みたいなヤツと阿久根とじゃ勝負になるわけないんだよ」

がやがやざわざわと柔道部員が騒ぎ始めてきた

……ここまでは原作どおり

もしかして今回はハズレかな？

「（……そうや
それが才能ゆうもんや
天才はおる！
しかもうじゃうじゃとそこかしこに！
ウチはそういう綺麗な天才に汚く勝つのんを生業にしてきた
まあ今日は素直に負けとけや人吉クン
半年もあれば阿久根クンに勝てるようにウチが鍛えたるわ）」

「……先輩、鍋島先輩ってば」

「ん？
おぉ、なに？
どないしたん？」

「【俺】そろそろ帰ります」

「へ？
もう帰んの？
まだ勝負ついてへんで？
（ま、そーゆーてもほぼ阿久根の勝ちは決まりやろーけどな）」

「ええ、結果が見えてる勝負事ほどつまらないものはありませんからね」

「ひどいなー【ジブン】
仮にも人吉クンの友達やろ？
少しは友達の勝ちを信じてやったらどうなん？」

「…先輩、何言ってんですか？」

「は？」

「【俺】は善吉っちゃんが負けるなんて微塵も思ってませんあんまり【俺】の友達を甘く見ないでくださいよじゃあそーゆーことなんで」

そう言い残し【俺】は道場の出口に向かって歩く

「なにゆーてんねん……今から人吉クンの大逆転なんてあるわけが――」

「善吉！」

「！」

「いつ如何なる場合においても決して私は貴様に負けるなとは言わん」

あはは
きたきた

「だから勝って！！貴様がいなくなったら私はすごく嫌だぞ！困るぞ！泣いちゃうぞ！」

会長さんの応援を最後に道場を出る【俺】

「あっ…ダメだ！倒れるっ！」

応援の甲斐なく善吉は崩れ落ちる……かに見えた

「あーーっもうっ…
お前が泣くとこなんか見たことねえし見たくもねえよ!!」

ふらつき倒れる、と見せかけ阿久根の足めがけて善吉が突進する

「!?
うっ!うおおっ!
しっしまっ……」

咄嗟のことに面食らい、一瞬判断が遅れる阿久根
そして……

「がっ……!!」

背中から激しい音をたて、阿久根が倒れる

「もっ、双手刈り!
珍しい!なんであいつあんな技知ってんだ!?」

まさかの出来事に部員達が沸き上がる

「はぁ…はぁ…
文字どおりアンタの足も引っ張ってみました――
ってところで何を認めてくれるんでしたっけ?阿久根先輩」

「……っ!
負けを認める!

一本取られたよ」

その言葉を聞き、嬉しそうに微笑む善吉

「信じられへん……

阿久根クンにほんまに勝ってしもた……

（あのコ……こうなるのがわかっとったゆーんか……）」

――――――道場・外――――――

「うーん……

一応、阿久根高貴の生徒会加入イベントだから絡んどいたけど…

肝心の阿久根高貴とまったく会話しなかったな……」

侵攻役も今回はなにもしてこなかったみたいだし……

無駄足だったかな？

てゆーか、今回【俺】の出番自体あんまりなかったなー

……ホントに主人公か【俺】？

＼アッカリ～ン／な感じにならなきゃいいが…

「はぁ…帰ろ」

ため息をつきながら帰宅する

第２０話「微塵も思ってません」（後書き）

わかってたことですが原作に沿わせると主人公が……。

第２１箱「秘密です☆」（前書き）

今回は大幅にキングクリムゾンしてます。

キングクリムゾンで飛び越した話を
見てみたいって方がいたら（たぶんいないだろうけど）
感想で言ってください。番外編、もしくは回想編として書きます。

第２１箱「秘密です☆」

いきなりだが善吉っちゃんと阿久根高貴が勝負した次の日から
二週間ほど時は飛ぶ

その間に阿久根先輩とあらためて知り合い、
もがにゃん（喜界島さんのこと）ともそれなりに話すようになった
この二人と友達になれたのは善吉っちゃんのおかげだ

ただいま教室で善吉っちゃんと談笑中

「扉を開けたらもがにゃんが善吉っちゃんを押し倒してたのは驚いたなー」

「その話はもういいだろ！」

「あははは、ごめんごめん」

「ったく…、んじゃあ俺は生徒会あるからそろそろ行くわ」

「あ、じゃあ【俺】は特にやることないからついて行くわ」

「来なくていい」

「つめたーい」

「人肌程度には温かいつもりだよ
じゃあまたな」

斬新な返しですこと

「……さてと、そろそろ行くか」

善吉っちゃんが生徒会の仕事に向かって数分後に【俺】は教室を出た

今からの時間なら充分間に合うだろう

――――――数分後――――――

迷った

――――――その数分後――――――

やっぱ便利だな《歩行者天極》

ずっと発動してよっかな

「…にしても、まさか音楽に行くのにこんなに時間がかかるなんて思わなかった」

そう、【俺】は今音楽室に向かってる

え？なんでかって？

もちろん原作介入のためですよ

『めだかボックス』で音楽室が出てきたイベントなんて一つしかない

そのイベントに関わるために今足を運んでるわけだ

「だったらオレのスタイルは見下し性悪説だ！

テメーが花を育てる側ならオレは芽を摘む側なんだよ！！」

お？もう始まってる？

雲仙先輩の声が音楽室の外に響き渡っている

……さすが防音設備に問題がある音楽室だ

「失礼しまーっす」

扉を開ける、と

「！！　■■同級生！？」

「！！　テメーあの時の！？」

「あれ？　意外な人物が登場☆」

「え？　誰？」

音楽室の中には会長さん、雲仙先輩、袖ちゃん、そして鬼瀬針金がいた

……あとオーケストラ部の部員達らしきモノ

……そういえば鬼瀬針金とは初対面だ

とりあえず自己紹介をば

「はじめまして鬼瀬さん

【俺】、一年一組の■■■■っていいます

仲　良　く　し　て　ね」

「え？　あ、は、はい……

（なにこの人…なんでこの状況で自己紹介なんてできるの？

……え？てゆーか何で私の名前知ってるの？）」

「なに言ってんのさ鬼瀬さん！
風紀委員会の『手錠メリケンの鬼瀬』といえばそれなりに有名なんだよ？」

「え！？あ、なんで考えてることがわかって……」

知らない奴から名前を呼ばれたら誰だって『なんで自分のことを？』と考える
その思考に合わせて発言しただけであって、べつに心を読んだわけじゃない

「オイ、テメー！　登場早々ナンパなんてしてんじゃねーよ！！」

雲仙先輩が吠える

「自己紹介しただけでしょ…
てゆーか【俺】のことは気にしなくていいですから
ほら、話進めて進めて」

ジェスチャーでストーリー進行を促す

「あァ？　勝手に仕切ってんじゃねーぞテメー！！」

と、雲仙先輩が言った瞬間
〈バシッ〉と【俺】の手が何かをキャッチする

「なっ！？」

「危ないじゃないですかいきなり……
当たったらかなり痛いんですよ？コレ」

いつの間にか手の中にスーパーボールが握りこまれていた

《生気者》のおかげで助かったな

「会長さん」

「……なんだ？」

「……そんな警戒しないでくださいよ、傷ついちゃいますよ？」

おどけながら言ってみる

「だから『なんだ？』と聞いているだろう」

…怖いなぁもう

「……すぐに善吉っちゃんたちのトコに行ってあげてください
風紀委員が生徒会メンバーを狙ってますから」

「「「！？」」」

驚いたのは会長さんと雲仙先輩と鬼瀬さんだ

「テメーなんでそれを――」

「それは本当か■■同級生」

会話に割って入る会長さん

「ええ」

「……やれやれ　愚かなことをしてくれたものだ」

「……あ　ぅ？」

雲仙先輩を一瞥し、なかば呆れたようにため息をつく会長さん

「不知火　ここは任せたぞ」

「はい？なんであたしが？」

「今度私が手ずから満漢全席を振る舞ってやるから
頼むよ」

一方的に頼み事をして駆け出す会長さん

「あ！？どこ行こうってんだよ黒神！お仲間を助けに行こうってか！？

今からこっから間に合うワケねーだろが！
ムダな悪あがきしてんじゃねーよボケ！！」

スーパーボールのつぶてをくらう会長さん

……だが

〈ボウン〉

「あり？」

……変わり身の術で回避とか
会長さんマジ忍者

「チッ…　甲賀卍谷の忍者かよあのバケモン女…」

会長さんを追おうとする雲仙先輩
そしてそれを阻む袖ちゃん

「何のつもりだ？エアオッパイ」

……二人が会話している間に音楽室の中を見回してみる

「……ひでえなこりゃ」

部員達はボロボロ、そもそも元が人間だったのかを判別するのも難しい
壁には一面返り血が飛び散り、さながら殺人現場のよう
楽器はただの鉄屑と化してしまっている

「『やり過ぎなきゃ正義じゃねえ！！』……か」

でもこれじゃいくらなんでもオーケストラ部員が可哀相じゃなかろうか？
……《あのスキル》を使えばどうだろう？
《この間見つけたあのスキル》を使えば……

「いや、ダメか…」

《あのスキル》は『すでに起こり終わったこと』を対象にはできないそれこそ『この惨状』をなんとかするには《大嘘憑き》でもない限り…

「ならばこの際高みの見物って奴をさせていただこうぜ
バケモン女の文字通りの悪足掻きをなあ！！」

ん？
どうやら会話が一区切りついたみたいだな

「さてさて？とりあえずこっちはそういうことにしておいて…だお次はテメーだ！
……あぁ…えーと、一年！！」

「…名前がわからないなら聞くくらいしましょうよ」

「っるせー！
テメー随分と久しぶりじゃねーかよオイ！こんなとこに何しに来やがった？」

「ええ！？　ひどいなぁ忘れちゃったんですか？雲仙先輩」

「……あ？何をだよ？」

「あの時の約束ですよ！
言ったじゃないですか　『廊下を走った罰は今度受けます』的な

ことを
覚えてませんか？」

「……あぁ、そういえば言ってたような気がすんな
……は？まさか、テメー…」

「はい！今その罰を受けに来ました！」

「「「……」」」

ん？何この空気？
なんで先輩も袖ちゃんも鬼瀬さんも
そんな変態を見るような目で【俺】を見るの？

「……ケケケケケ！なんだよなんだよ！テメー以外と優等生クンなんだな
あれか？テメー読書感想文とかの類いは最後の行までビッチリ書く派か？」

な、なぜそれを！？

「いいぜ！わかった！テメーのその心意気に免じて……
『リハビリ三年』程度で許してやらぁ！！」

リハビリ三年って学園生活終わるっつーの……

――――三分後――――

「……」

「ケケッ！まあこんなとこか？」

…三分間、滅多打ちにされた
スーパーボールで打たれ、炸裂弾で撃たれ……
我ながら生きてるのが不思議なくらいにズタボロだ

《生気者》は……使わなかった
特に理由はない

「やっぱりやり過ぎ過ぎます委員長！
このままじゃその人本当に死んでしまいますよ！！」

今まさに死の一歩手前状態の主人公を見て鬼瀬が叫ぶ

「ケケケッ！だーかーら！保健室には連絡済みだって鬼瀬ちゃん
まったく、敵の身を心配するとか優し過ぎるぜ？」

「で、でも…いくらなんでも―」

「……ずいぶん派手にやりますねー風紀委員長☆」

黙りこくって仁王立ちを決め込んでいた不知火が突然口を開く

「なんだよ急に？文句あんのかエアオッパイ？」

「いえいえ文句なんてとんでもない☆
ただ『終わった気でいる』のは時期尚早な気がするだけです」

「……？」

「まあ意味深なことを言ってみたりしてますけどー…
要は『あたしの友達はかなりしぶといですよ』ってことを言いたいワケです☆」

「急にしゃべり出したかと思ったらいきなり何言って――」

「人をゴキブリみたいに言わないでほしいなー袖ちゃん」

「「！？」」

「あひゃひゃ☆ごめんごめん」

…まあ昔はよく言われたけどね
悪口としても、誉め言葉としても

「……どういうことだ？」

「……その言葉の意味を計りかねますね
どういうことっていうのはどういうことですか？雲仙先輩」

「まんまの意味だよ！
どうしてあんだけズタボロにしてやったのに平気な顔して立てる！？
いや、そもそも……テメー『傷はどこいった』！？
なんで『制服まできれいさっぱり元に戻ってやがる』！？」

「……んー
秘密です☆」

「……はぁ゛？」

うわ…露骨にイラッとされた…

「いやまあ…それはアレですよ…
わかんないことをいつまでも引っ張ってたらダメですよ先輩！」

「…さっき『わからないなら聞くくらいしろ』っつったのはどこのどいつだ」

「あははは……」

「笑って誤魔化すな！」

「うわっ！？」

〈ピリリリリリ〉

「チッ…誰だ、こんな時に」

完全にスーパーボールを投げる体勢だった…
先輩のケータイが鳴ったおかげで助かったよ
……え？ケータイじゃなくてアイフォン？
……細けぇこたぁいーんだよ！！

「ああ？任務失敗？
どいつがよ！？全員！？」

……どうやら会長さん間に合ったようだ

「それじゃ【俺】はそろそろ…」

「あれ？もう行くの？」

「しーっ！
声がでかいよ袖ちゃん！
…まあ目的も果たしたから
長居は無用って奴だよ」

「ふーん☆」

「……そういえば【俺】が立ち上がった時、袖ちゃんだけ驚いてなかったよね？
……なんで驚かなかったの？」

カマをかけてみる

「あひゃひゃ☆そりゃアレだよアレ！
『私は仲間を信じてる！』的な？漫画でもよくあるじゃん」

「ははは、さいですか」

「さいですさいです☆」

善吉っちゃんが言うとおり、喰えない奴だなー袖ちゃん

「んじゃ【俺】はもう行くね袖ちゃん　バイバイ」

「じゃーねー」

そして【俺】は先輩と鬼瀬さんに気付かれないようにそっと音楽室をあとにした

「この後のショータイムのために特等席を探さなきゃな」

第２１箱「秘密です☆」（後書き）

「先輩から罰を受けるために音楽室に来たと言ったな……ありゃ嘘だ」

というワケで主人公は本当に罰を受けるために音楽室に出向いたんじゃありません。

その時、主人公が思いついて口から出たデマです。

ちなみに、『どこかへ行った傷』と『きれいさっぱり元に戻った制服』は

《大嘘憑き》でなかったことにしたのではありません。

《大嘘憑き》に近しい、《主人公のスキル》です。

そのうち説明するつもりです。

ヒントは『起こり終わったことは対象外』ってことと、

『主人公がズタボロになる前の状態』になったこと。

第２２箱「知ってるか？」（前書き）

この作品をお気に入り登録してくださってる方がもう少しで３００に届きそうです。
こんな作者の痛い妄想みたいな話を２００人強の方々が楽しみにしてくれてると思うと胸が熱くなりますね。

あ、今回［あいつ］についての描写が少し具体的に描かれます。
って言ってもザッと一気に書いたので少々不自然かつ不愉快な出来になってしまっているかもしれませんのでご注意をば。

第２２箱「知ってるか？」

――――――廊下――――――

音楽室でのイベントを終えた【俺】は
その後に控える『黒神めだかＶＳ雲仙冥利』に向けて特等席を探していた

「やっぱ生徒会室に近い方がいいかなぁ？」

原作では音楽室のあとに、生徒会室に乗り込み生徒会メンバーを襲う雲仙先輩
だったらやはり生徒会室近辺の方がより面白いモノが見れそうだというワケで…来ちゃいました生徒会室☆

「またまた失礼しま――」

〈ドガッ！〉

「あべしっ！？」

「あ」×４

生徒会室の扉を開けた途端、顎に衝撃が走った

「お、おごあぁぁ…」

「…大丈夫か？」

「だ、大丈夫大丈夫……ってんなワケねぇだろえぇぇぇ！？
何が起こった！？
何で生徒会室に入った瞬間にタイガーアッパーカット並の
一撃をもらわなきゃなんないのさ！？」

「いや…風紀委員長の正体不明の武器の説明をしてる時に
ちょうど【キミ】が入ってきたから…」

あぁ…スーパーボールね…
てか、そんなタイミングで入ってくる【俺】って……

「ちょうどよかった■■同級生
さっきは言いそびれたが生徒会の危機を伝えてくれてありがとう
助かったよ」

「ああ、いえいえとんでもない
当然のことをしたまでですから
…にしてもいきなり顎にスーパーボールを食らうとは思いませんでした」

顎をさすりながら返事をする

「え…？
なぜそれを知ってるんだい？」

「はい？」

「いやだから、風紀委員長の武器の正体がスーパーボールだってことをだよ」

「……」

やっべー…
そういや原作で雲仙先輩の武器の正体が明かされたのは
この時が初めてだったな……

「私も気になるな■■同級生
さっき音楽室で【貴様】は雲仙二年生の一撃を受けとめた
それは武器の正体を知っていなければできないだろう
一体どこでスーパーボールだと気付いたのだ？」

「あー、いやそのー、それはですねー、なんというかそのー」

まさか
『原作読んでるから知ってるに決まってるでしょー』
とは言えないしな…

「？」×４

「あー、えー、それはー…」

目がバタフライで泳ぎまくり、
全身から冷や汗吹き出してるのが自分でもわかる
うあぁっ、みんなの視線が一気に【俺】へと…

「邪魔だボケ」

「どぅわっ！」

突如後ろから衝撃が襲う

派手に前転をしながら生徒会室の中央まで転がる【俺】

「!?」×4

〈パチパチパチ〉

「いやーお見事お見事!
一年以上そのテクでやってきたけど
タネを見抜いたのはテメーが初めてだぜ黒神!」

生徒会室内に緊張が走る

「う、雲仙先輩…
お早いお着きで…」

「ケッ、またテメーかよ
いつのまにかいなくなったと思ったらこんなトコにいたのか
神出鬼没とはテメーのためにある言葉なんじゃねーか?」

【俺】って知らずにいきなりケットバシタの?
風紀委員長としてどうなのそれ?

「まあ今は【テメー】のことはどーでもいーんだよ
今オレが用があるのはテメーだよ黒神」

言いながらスーパーボールをザラザラと袖口から出す先輩
あれ?そういえばこの後生徒会室って……

「……
何このヒネてそーな子供

全然可愛くないんだけど」

もがにゃん空気読んで！！
いや！てゆーか思い出した！
この後に生徒会室爆破されんじゃん！
すっかり忘れてた！

「あのー…重要そうな話みたいなんで【俺】はこの辺で…」

慌てて出ようとする……けれども

「まあ待てって！そんな急いで出てくこともねーだろ」

先輩が立ちはだかる
うぅ……

「手品の解説に来てくれたわけでもあるまい
何の用だ雲仙二年生」

会長さんが話を進める
あらためて会長さんに向き直る雲仙先輩

「用がなくちゃ来ちゃいけねーってのか？
冷てーことおっしゃるなよ悲しいなあ！
学年は違えど同じ十三組の仲間じゃねーか」

会話が始まってしまった
どうしよう…もうすぐ爆破が…
隠れようにもロッカーは三つだけ
ということは善吉っちゃん、もがにゃん、阿久根先輩の三人で埋ま

ってしまう

「ならせめてダメージが少なく済みそうな場所は……」

キョロキョロと室内を見回す
ただいまの生徒会室内状況
・生徒会メンバー四人
・風紀委員長一人
・挙動不審の男一人
……なにこの状況

「いや実際テメーが入学してきた時から思っちゃいたんだよ
テメーとオレは鏡写しさながらによく似てるってなあ！」

「…でも左右逆なんだろう？」

「おうよ
そっくりだから相容れねえ」

二人の会話が耳に入る
……『鏡写し』
……『そっくり』
……『相容れない』

「チッ、どれもこれも［あいつ］を連想させやがる言葉だな…」

思い出したくなくても思い出してしまう記憶は誰にだってある
【俺】にとっては……［あいつ］がまさにソレだ

『あーあーまったくもう、■■ってばしょうがないなぁ』

頭の中で［あいつ］の姿がフラッシュバックする……

～～～～～13年前～～～～～

主人公には両親というものが存在しない
いや、存在しないというより主人公が個人的に顔を知らないだけなのだが……
たぶん探せば世界のどこかで幸せな家庭を築いて暮らしてはいるだろう

そんな自分を捨てた…
『自分達』を捨てた両親を、
『彼ら』は特に何とも思ってはいなかった

彼らは絶対的に似ていた
それこそ鏡写しのように

だが鏡は鏡
左右は対称
もちろん二人は絶望的なまでに仲が悪かった

いつも二人いっしょのくせに目が合えば喧嘩ばかり
そんな二人をまわりの大人たちはたかが子供の喧嘩と
微笑ましく眺めていた

しかし当の本人達は本気で相手を疎ましく思っていたし
うっとおしく思ってもいた

そして『ある事件』を境に□□□□は■■■■と決別し、孤児院を
出た

もちろん□□□□の行方を主人公が知るわけもないし
知りたいとも思ってはいないだろう
□□□□がまだ生きているのかも不明だ

忘れないでいてほしいが、この時二人は共に弱冠3歳なのだ

……そんな二人だが唯一一致する部分があるにはある
その一致する部分というのは
『もし両親に会えたらまず何がしたい?』という質問に対しての返
答だ
もちろん一人ずつ質問した
二人いっしょに聞くと『自分が最初に聞かれた』などと喧嘩に発展
しかねない

通常ならば『一発殴ってやりたい』や『もう一度いっしょに暮らし
たい』が
普通の答えだが……

その二人の望みは『一つだけ質問したい』だった

『何を聞きたいの?』と問われると

かたや満面の笑みで、かたや面倒くさそうにこう答えた

【俺】を捨てる時どんな気持ちだった？

［俺］を捨てる時どんな気持ちだった？

～～～～～現在～～～～～～

「［あいつ］と同じ答えってあとで知った時はトリハダたったぜ」

「貴様達離れろ！さっきこやつがバラ撒いたのはスーパーボールではない！

火薬玉だ！！」

……［あんな奴］のこと思い出してる間にだいぶ会話が進んだな

……てゆーか

「おっとバレたかい？ダメだなーオレって本当にダメだ！手品下手過ぎ！

だがまあ遅い

仕込みはギリギリ終わってる」

もう隠れる暇なんてなくない！？

「……密閉状態の部屋でそんなの爆発させたらキミもただじゃすまないよ」

「そうだ！子供っぽい脅しはやめろ！悪ふざけにも度をこしている！」

知ってるか？

『やり過ぎなきゃ正義じゃない』って言葉があってだなぁ……

「テメーらニュースとか見てねーのか？ダッセエな
最近のガキは何考えてっかわかんねーんだぜ？」

自分でガキっつっちゃったよこの人

「どーするよ黒神
こっからオレを見事改心させてみせるんだろ？
それともやめてくださいってお願いしてみるか？」

「……やめてくだ」

「おせェよボケ」

そして爆音と共に【俺】の視界は真っ白になった

第２２箱「知ってるか？」（後書き）

やっぱりお気に入りの方をもっと増やすには宣伝しないと駄目なんでしょうか？
ブログとかツイッターとかやってないのでまったくしたことないんですが…

それともこの話が処女作で作者の知名度が足りないせい？

単純に面白くないせい？

あってほしくないですが最後のが一番可能性は高いですね…。

第２３箱「【俺】の名を叫んだ」（前書き）

今回で主人公の本名が明らかになります。
前にも言いましたが、九州地方の地名ではありますが市名ではありませんので！

※この話を見る前に注意です！
活動報告のトコでも書きましたが、物語の内容を大きく変更しました。
書き直した１、２、７、９、１５、１９、２０箱を見なおさないとこの回ワケわかんないことになります。

最低でも→に挙げた回だけでも見なおしておいてください。
ちなみに９は主人公のプロフが変わっただけです。

第２３箱「【俺】の名を叫んだ」

「…ん？」

「…どーしたよ日向？」

「いや、なーんかあっちの方から爆発音みてーなのが聞こえた気がしまして――」

「あっちの方って…確か生徒会室があるんじゃなかったか？」

「だったらまーたぞろあの生徒会長が何かしでかしたんじゃねーのかよ

おお、ケムリが上ってら」

「あーそっかそうですね

そんなところでしょ！」

「そうそう！驚くにはまったくあたらねえ」

「「いっつもどーりの普通普通☆」」

――生徒会室だった場所――

「……ゲホ」

あーくそ

ちょっと意識飛んじまったじゃねーかよ
爆発の衝撃でこんな離れたトコまで吹っ飛ばされたし

「ケガはまあ《あのスキル》があるから大丈夫だけど…」

痛いのはやっぱり慣れないなぁ…
〈ドンッ！〉

「うわっ…嫌な音が…」

音のした方向を見てみると

「ダンプにはねられてもへっちゃらな制服だって？
それを聞いて安心した
つまり三発までなら大丈夫ということだよな
私が本気でなぐっても！！」

ダンプと三発でイコールになるパンチって……
ちょっとのつもりが結構長い時間意識飛んでたみたいだ
もうこのシーンとはな

「実際、このバトル間近で見てみたかったんだよな～」

我ながら呑気なもんだ

「たいしてダメージがあるとは思えないが
そのまま立ち上がれない振りをしておけ
今ならまだ許してやれるかもしれん」

「…ケケケ、冗ー談！

痛くもカユくもねーっつーの！
ノーダメージだよボケ！」

…本当に十歳児なのかあの人？
『白虎』を着込んでるにしてもキャノン砲ばりのパンチを受けたってのに…

「そうかあくまでも戦争を選ぶか
私も同じ気持ちだがならば私の理性がわずかでも残っておるうちに忠告しておこう
空手・柔道・合気道・日本拳法・ジークンドー・骨法・ムエタイ

私はありとあらゆる格闘技の指南を受けておるが
その技術を貴様相手に使うことはない
何故ならそれらは人間が練り上げた崇高なる技術だからだ
衝動的な怒りに任せて使うようなものでは決してない
だから私はただの衝動的な怒りに任せて
暴力に訴え人間ではなく獣のように貴様を撃つ！！」

どんだけ武道を究めてんだこの人は…
“史上最強の弟子”の師匠の一人になれるレベルだぞ

「いいだろう！テメーが獣のように戦うのなら！オレは人間のように戦ってやる！
テメーの大好きな！オレの大嫌いな人間のようにな！！
そしてテメーからのありがたい忠告に対して
オレはありがたくねえ忠告をしてやるぜ！
黒神めだか！正しい正しくないにかかわらず正義は必ず勝つんだよ！！」

『正しい正しくないにかかわらず正義は必ず勝つ』……か
なかなか重たい言葉だよな

「ぐ…！ぐふぅっ！」

ドテッ腹にモロに会長さんのパンチをくらい、校舎内に吹っ飛ぶ雲仙先輩
確かこれって会長さんをおびき寄せる作戦だったよな？
結局失敗してたけど

「……どうやら何か企んでいるらしいな
しかしまあとどめを刺さずにいられる気分でもないか」

完全に悪役のセリフですね、わかります
そして崩れた校舎の中に先輩と会長さんは消えていった
……あれ？なんだろ？なんか違和感が……
……まあいっか

……
何が起こってるのかまったくわからなくなったな

「ちょっと近寄ってみよう…」

少しずつ校舎に歩み寄ってみる

「攻撃……理由はもう……ろ！それ……オラ！……もん…
……みろ！！」

うーん……
微妙に聞き取りづらいな…

でもこれ以上近づいたら巻き込まれそうだし…
……なんて考えあぐねていると

〈ゴゴゴゴゴゴゴゴゴ…〉

「おわ！な、なんだ？なんの音だこれ！？」

〈ビキッビキビキィッ〉
〈ドズゥゥゥンッ〉
〈ドドドドドドドド〉

「そ、そうかこの音！会長さんが校舎を引っ張ってる音！」

雲仙先輩の切り札である『鋼糸玉（ストリングボール）アリアドネ』
その切り札で校舎の瓦礫にがんじがらめにされながらも、それを無理やり引きずって動かしてる音だ！

「いよいよ黒神めだかＶＳ雲仙冥利の対決もクライマックスだな……
あっそうだ！善吉っちゃんたちは？善吉っちゃんたちがいないと会長さんが…」

辺りを見回す

「あ！あんなトコに！
おーい！みんなー！そんなトコで何やってんのさー？」

小走りで善吉っちゃんたちに駆け寄る

「早く会長さんを止めないと大変なことに……
……！！？」

嘘だろ……？
気ぃ失ってる！？
善吉っちゃんも！阿久根先輩も！もがにゃんも！

「はっ！そうか！
　さっきの違和感の正体は…！」

原作では、校舎の中に吹っ飛んだ雲仙先輩を会長さんが追う時に
善吉っちゃんがそれを呼び止めるシーンがあったはず！
さっきはそれがなかったんだ！

「クソッ！
　今までなにもなかったくせにここにきて侵攻役が手を出してきやがったか！」

なんて言ってる場合じゃねえ！
早くみんなを起こさないと雲仙先輩が…！
あの人にはまだそれなりに活躍するシーンがそこそこあるんだから！！

「起きろよ！早く起きろってみんな！いつまで寝てんだよ！！」

「「「う、う～ん…」」」

ダメだ起きない！
爆破の衝撃で脳震盪でも起こしたのか！？

「クソッ！どうする！？
　さすがにあの状態の会長さんの相手はゴメンだぞ！？

せめてみんなが目を覚ますまで時間が稼げれば――」

……時間が稼げれば？

「そうだ……時間稼ぎだ」

絶対に『勝つことはできない』が『時間を稼ぐだけ』なら《あのスキル》がピッタリだ！

「いや、でも《あのスキル》の発動条件は……」

……うぅ～

「えーーーい！ままよ！！」

悩んでる時間はねえ！

【俺】は急いで半壊した校舎の中へ駆け出す

――――校舎内――――

その頃校舎内では……

「？、何か言ったか？」

「いやあ、オレは十歳のお子様だけど人生経験じゃあテメーより上だからよ

わかっちゃうんだよな
テメーが遠からず人間に絶望しちまうってコトがよ
その時テメーがそんな細い神経で耐えられるのかどうか心配になっちまってさ」

いよいよ決着がつきそうな雰囲気になっていた

「……いらん世話だ
私は人間に絶望などしない」

「あっそ、そいつは失礼
(確かにいらん世話だろうな
しかし黒神、オレはこれでも面倒見のいい先輩なんだ
だから……オレがテメーを改心させてやるよ)
だったらもうトドメを刺しな
大好きな人間を守るためにオレを排除してみせな」

「……そうする」

「(ああそうしろ
だけどあとでよくよく思い返してみるんだな
テメーが潰そうとしているこのオレもれっきとしたひとりの人間なんだ
オレもオレでひとつの人間のありようなんだ
人間を守るために人間を排除するんじゃ
それはもうやってることはオレと一緒なんだぜ?

オレに勝ち
オレを潰して
オレになれ

絶望の末にやり過ぎの正義を受け継ぎやがれ

やり過ぎなけりゃ正義じゃねえ！！）」

ゆっくりと瞼を閉じる雲仙

〈ズドォォォォン〉

「……？」

なにも起こらない

「（なんだ？なぜ何もしてこない？）」

確かに凄まじい打撃音が聞こえたのに雲仙の身には何も起こっていない

「【貴様】……なにをしている」

めだかが言う

雲仙を相手にしての発言ではないようだ

「（一体何が……

……！？）」

うっすらと瞼を開くとそこには…

「おっ…ぐっ…ふぅ…」

「テ、【テメー】！なんで!?」

「い、いやぁ…ハハ
なんででしょうねえ?」

雲仙の目の前には【あの一年生】が立っていた
雲仙の身を守る盾となって立っていた

「……腕を離せ■■同級生、巻き込まれたいのか」

めだかの拳は主人公の腹に深く埋まっていた
その腕を主人公はガッシとつかんでいる

「なーに言っちゃってるんですか会長さん……
巻き込ませてもらうためにこんなことしてるんですよ」

腕を離す主人公
腕を引くめだか

「ごふっ……と、とりあえず生きてますか雲仙先輩?」

「一体何のつもりだ【テメー】！
邪魔してんじゃねーぞ!!!」

「邪魔って……あと少しでやられてたじゃないですか雲仙先輩」

「だから何だっつーんだ!?オレはテメーらの敵だぞ!!
助けてもらう義理も守ってもらういわれもまったく――」

「そんだけ騒げるなら大丈夫そうですね……えい」

〈ドガッ〉

「ガッ!?」

「ちょっと気絶しててください雲仙先輩」

雲仙の腹を蹴り気絶させる
弱った先輩なら【俺】でも気絶させられる

「そこをどけ■■同級生
私はそいつにトドメ刺さねばならん」

「残念ながら会長さんの頼みでもそれは無理ですね
ある理由があって雲仙先輩にここでリタイアされると困るんですよ」

「……ある理由？」

「まあ個人的な理由です
というわけで会長さん、雲仙先輩にトドメを刺したいんなら
まず【俺】をこの場から排除してくださいな」

「……【貴様】と――」

「『闘う理由が無い』ですか？

いやいやこんな時でも会長さんは会長さんですねー
まったく恐れいっちゃいます
……でも本当にそうでしょうかね？」

「なに？」

さてさて…こっからは会長さんの敵意を【俺】に向けなきゃ
『立てば嘘吐き座れば詐欺師、歩く姿は詭道主義』の彼を見習っても
もっともらしい嘘を吐いてみようかな

「…考えてもみてください
あの時なんで【俺】が音楽室に現われたのか？
なぜ【俺】が雲仙先輩の武器の正体を知ってたのか？
そして今なぜ【俺】が雲仙先輩の前に立ち、
会長さんの前に立ちはだかっているのかを」

「……」

「まあ二つめの『なぜ武器の正体を知ってたか？』は簡単ですね
以前から雲仙先輩と知り合っていれば武器の正体を探ることなんて造作もない」

「……」

「問題は一つめと三つめです
『なぜ音楽室にいたのか？』と『なぜ雲仙先輩を助けたか？』」

「……」

「この二つの問題を一気に解決する答え……

それは『実験台の観察と保護』ですよ」

「……『実験台』？」

ここからかなり現実離れした空論になる

「ええ、実験台です
……ところで話は変わりますがね会長さん
【俺】って実は催眠術が得意だったりするんですよ」

「？」

「……わかりませんか？
ならこう言えばわかります？
『【俺】の催眠術は人の凶暴性を高めることができます』」

「……
！！？
ま、まさか【貴様】ッ！！」

「やっと理解できましたか
なかなか鈍いですね
そう、『雲仙先輩は【俺】の催眠術によって操られていた』んですよ
…そもそもありえないでしょ？
いくら風紀委員会だからってこれは明らかにやり過ぎです
でも実際雲仙先輩はなんの躊躇いもなくこんな凶行に及んでる」

「……それは【貴様】が催眠術で、雲仙二年生の凶暴性を高めた結果だと？

にわかには信じられんな」

でしょうね

【俺】も自分で言ってて恥ずかしいです

「信じられんって……会長さん
あなたさっき雲仙先輩に
『貴様もかつてはウンタラカンタラドータラコータラ』言ってた
でしょ？」

「……しかし、そうなると
【貴様】は友人である善吉たちまで巻き込んだことになるな」

「ええ、そうなりますね」

「……つまり【貴様】は自らの手も汚さずに、
雲仙二年生を使って善吉たちを傷つけたワケか」

「ええ、そうなります
まあ実験は成功みたいですね
実は自分の催眠術に自信がなかったもんで……
まさかここまで上手くいくとは思いませんでした」

「（ピクッ）
……上手くいく、だと？」

「はい、大成功でし――」
〈ズドンッッ！〉

「！！！？？

ゴボッ！ゲッハァッ！！」

〈ドゴォォン〉

「ガッ……、ガハッゴホッ」

み、見えなかった…！全然！
気付いたらパンチを食らって
気付いたら吹っ飛ばされてた！

「なぜだ？
友人を傷つけておいてなぜヘラヘラしていられる？
なぜこの状況を見て平然としていられる？
【貴様】には感情というものが存在しないのか？
【貴様】には罪悪感というものが存在しないのか？」

……どうやら成功したみたいだ
標的を雲仙先輩から【俺】に！

「前々から【貴様】のことを怪しく思ってはいた
だが善吉が【貴様】を友達だと言うから信じようとした
しかし！【貴様】は！
私の信頼と善吉たちの友情を踏みにじった！
そんな【貴様】を私は絶対に許しはしない！」

さぁて……
ここからはマジで歯ァ食い縛らなきゃだな……

……《戒名》を解除して
《あのスキル》を発動する

準備は……調った
あとは会長さんが【俺】の名を呼ぶだけでいい

「どうやら私は間違っていた！
いや、間違っていなかった！
真に討つべきは雲仙二年生ではなく【貴様】だった！」

そして……
会長さんは【俺】の名を叫んだ

「天神神天（てんじんみそら）！
【貴様】に明日は来ない！」

天神　神天
（てんじんみそら）

所属：一年一組
血液型：ＡＢ型
備考：主人公

第２３箱「【俺】の名を叫んだ」（後書き）

主人公！
天神神天って名前だったんです！
にしても、神天って書いてみそらって読むのは自分でもどうかな？
と思いました。

第２４箱「負けられない！」（前書き）

お待たせしました。
やっとこさ新話投稿です。
最近忙しくて全然筆が進んでませんでした。
申し訳ありません。

あ、いや、違いますよ？
別に録り溜めしてたアニメを観てたとか
積みゲーを処理してたとかでは断じてありませんよ？（汗）

第２４箱「負けられない！」

〜〜〜〜前回のあらすじ〜〜〜〜

天神　神天

所属：一年一組

血液型：ＡＢ型

備考：主人公

なにげに→の枠線作るの手間がかかります。

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

「天神神天！

【貴様】に明日は来ない！」

「（ついに…、ついに呼んでくれたな……。フルネームで！【俺】

の名を！）

……明日は来ない、ですか。

……プッ、アハッ、アハハハハハハハハハハハハハハハ！！

ガハッ！ゲホッゲホッ！

……ハァ……ハァ」

狂ったように笑う主人公。

めだかに殴り飛ばされたダメージで咳き込む。

「……何がおかしい。」

離れた所から様子を伺うめだか。

「何がおかしいって…、

そりゃおかしくもなりますよ。

だって会長さん……、

明日ってのは来るとか来ないとかじゃなくって――」

「！！

グハァッッ！？」

突如、めだかの腹部に電流……もとい鈍い衝撃が走る。

「……明日ってのは迎えるものなんですよ？

自分から、ね☆」

目測でも5、6メートルの距離を瞬時に詰めてきた主人公。

『今の』黒神めだかを相手に、

『主人公の身体能力』で、

まったく気取られることなく詰めることは可能だろうか？

答えはＮＯ。
『主人公の』身体能力では『今の』黒神めだかには近づくことはおろか
怪しい動きをした瞬間に一撃を貰うのがオチ。
あくまで主人公の身体能力は一般人と変わらないのだ。

ならばなぜ？
今まさに主人公はめだかの腹部に拳を叩き込めているのか。

「う、うぐ…」

「よっ、と」

そのままめだかを校舎の外へ放り出す。
しかし、さすがは黒神めだか。
空中で体勢を立て直し着地する。

「……」

はじめは驚いたような表情をしていたが
主人公に対しての認識をあらためたのか、
すぐに厳しい表情に戻り校舎の方に向き直る。

めだかの視線の先、半壊した校舎の瓦礫の山をかき分けて主人公が出てくる。

「……」

「……」

睨み合う乱神と、もう一人…。

「……ん？」

校舎の割れたガラスに主人公の顔が映る。

「……ははは…っ。
すげーなこりゃあ……。」

目は釣り上がり眼光は鋭く、
髪は逆立ち変色、
もう一体の乱神が割れたガラスの中にいた。

《今発動中のスキル》の影響か？
『インスタント乱神モード』といった状態である。

「…よそ見とは、随分余裕だな」

「……《異名》」

「……なに？」

「いやなに、【俺】がこんな風になっちまった理由をちょっと説明してあげようかなーと思いまして」

「いらん」

「……そうですか。
ならさっさと始めましょう。」

「ああ、
そうしよう。」

主人公が呟いた一言、《異名》
それは《戒名》と、ある意味対局に位置するスキル。

読みは《異名（イコール）》

名前を呼ばれると、名を呼んだ者のありとあらゆるすべてのパラメータから
－1した数値のパラメータに自らを強化するスキル。
先ほどめだかが主人公の名を呼んだことで効果が発動したのだ。

つまり今、
めだかのパラメータが攻撃力９９９・耐久力９９９・体力９９９だとするならば
《異名》発動状態の主人公の名を呼んだことで主人公は９９９－1の強さ、
攻撃力９９８・耐久力９９８・体力９９８に強化されているということになる。

「……まさに時間稼ぎにはもってこいなスキルだよな。」

言いながらめだかに歩み寄る。

「なにか言ったか？」

めだかも主人公に向かって歩く。

「いえ、なにも。」
更に近づく。
「そうか。」
更に近づく。
「はい。」
気付けばお互いがお互いの攻撃範囲の中。
「「……」」
何も言わずに目の前の『敵』を睨み付ける両者。
……そして。

「……ハァァアアアッッ！！」
「……ウォォオオオッッ！！」

地の底から響くような雄叫びを同時に上げる。
拳と拳とのぶつかり合い。
そうとしか表現できない状況。

両者とも相手の攻撃を防御する気も回避するそぶりも見せない。
お互いの拳をもろに浴び続ける。汗が散り、血が飛び、砂埃が舞う。

〜〜〜〜〜5分後〜〜〜〜〜

顔面、首、腕、胸、腹、脚。
おおよそ名称がついている部位はあらかた殴り終えた頃。

「……会長さん！！」

突然、殴り合いながら主人公がめだかに話しかける。

「……。」

「知ってますか！
一流の格闘家や剣士ってのは！
お互い拳や刃を交えるだけで！
相手の考えてることがわかるらしいですよ！！」

「……」
「会長さんは！今！
【俺】の考えてることが！
わかります――かっ！！？」

言い終わらない内に主人公の腹部に一撃を打ち込むめだか。
まるで『さっきのお返しだ』といわんばかりに。

「知らん、知りたくもない。」

「ゴホッゴホッ！

あ、あっれぇ～……？
おかしいなぁ～……ははは
（今の【俺】の実力はほぼ会長さんと同じな筈なのに…
どうしてここまで差が…？）」

予想以上の重い一撃を受け、思わず距離を取り膝をつく。
《異名》が正しく発揮されているのならば
お互いの攻撃力、防御力、ましてやダメージ量などに大した差は無いはず。

だがめだかは先の雲仙冥利戦での負傷があるにもかかわらず、
ほぼノーダメージで戦闘を開始した主人公と互角……。
いや、主人公とは圧倒的なまでの差を見せ付けている。

「……どうした？
その姿は見せ掛けだけか？」

まるでダメージなんてなかったかのように悠然と歩み寄ってくるめだか。
困惑する主人公を見下ろす。

「立ち上がらないのであれば、
トドメを刺させてもらおう。」

弓を引き絞るかのようにギリギリと拳に力を込めていくめだか。

「……やっぱり、
……そう……ですよね。」

「……？」

「原作（オリジナル）の主人公に
二次創作（コピー）の主人公がかなうワケがない。
……そんなことは分かり切ってましたが。
……まさかここまでとはね。」

主人公が膝をついて俯いたままブツブツと喋り出す。

「……。」

なおも力を溜め続けるめだか。

「やっぱり会長さんはスゴい…。
そんなにボロボロなのにまだ闘い続けるなんて、まさに主人公の鑑ですよ。
若干チート気味ですけれど。」

「……。」

力を溜めるのをやめないめだか。
主人公の髪や目が徐々にもとの状態に戻っていく。

「そもそも【俺】に『主人公』なんて肩書きは重すぎたんですよ。
肩書きの重さに潰されちゃったってゆーのか、
はなっから【俺】に『主人公』は向いてないってゆーのか……。
大体、『あの人』直々の頼みだから引き受けちゃったけど
【俺】って世界を救ったりする『主人公』ってのよりも
その主人公に関わる『謎の男』みたいなポジションのが合ってると思うんです。
ぶっちゃけそっちの方がカッコいいですしね。

……あ～あ、『あの人』もよく【俺】なんかにこんな無理難題を任せたもんだ。【俺】なんてごくごく普通の一般ピーポーなんだからさぁ～。
もっと他の奴に頼めばよかったんだよなぁ…。
後悔してもし切れませんよ。
まったく……。」

「言いたいことは……、
それだけか？」

「……。」

「それだけか？」

「……。」

「……どうやら言いたいことはすべて吐き出したようだな。
これで【貴様】も思い残すことはないだろう。」

ついに限界ギリギリまで引き絞られた拳を打ち出す。
スピード、威力、重さ、タイミング、すべてが絶大な一撃を。

……が、しかし！！不発！！
絶大な威力を誇る一撃、不発！！
主人公に受けとめられる！！

「……まだ喋ってるでしょうが。
【俺】のターンは終了してませんよ。」

「……！？
（止められた……。
いやそれだけではない。
動かない。
掴まれた拳がまったく…。）」

「……『言いたいことはすべて吐き出した』？
『思い残すことはない』？
何、勘違いしてるんですか？
言いたいことも、
思い残すことも、
おおいにアリアリアリーヴェデルチですよ。」

ザワザワと、主人公の髪がまた逆立ち始める。
ミシミシと、掴んだ拳に力を込めていく。
「……【俺】は主人公なんてキャラじゃないし、
この『仕事』は【俺】には荷が重すぎる。
そう言いました……。
たしかに……。」

閃光。

主人公が発言し終えるとほぼ同時にめだかの視界に閃光が走る。
いや、『走ったように見えた』。

「……っ？？？」

『顔面に攻撃を受け、吹っ飛ばされたのだ』とめだかが自覚したのは校舎の壁に激突してからだった。

『哀れなことですね。』

「！？」

『会長さんもかつてはどこにでもいる普通の一般市民で、なんの特殊能力も持たない無個性で無価値で無意味な、そういうとても楽チンな生き方をしていたに決まってます。』

「【貴様】……！！」

『だけど、ある時ある瞬間から何かしらの運命を背負ってしまい、そして何かしらの地獄の特訓的なものを経て、そして何かしらの犠牲を払うことによって！！その他を圧倒するまでの絶大なパラメータを手に入れ、《普通》とは縁遠い存在になってしまったんですよね。そうとしか考えられません。』

「【貴様】…。そのセリフ…！その喋り方！」

「しかし！

だからと言って！

【俺】は
あなたに負けられない！」

そう叫ぶ主人公の姿は『インスタント乱神モード』でも、
ましてや普段のそれとも違うものになっていた。

第２４箱「負けられない！」（後書き）

今回新たに出てきたスキル！
《異名》！
どうでしたか？説明はわかっていただけたでしょうか？

ちなみに音楽室での雲仙冥利の攻撃を無効化したスキルとは別のスキルです。

てゆーか！！
前話投稿＆全話編集しただけで軽く９０近くお気に入り件数が増えたのはなぜ！？
そして、さりげなくいつの間にかユニーク３万突破。

Ω＜おめでとう
Ω＜おめでとう
Ω＜おめでとう
Ω＜おめでとう
（エヴァンゲリヲン風に）

第２５箱「さすがだと」（前書き）

サーセン！！
更新遅くなりました！！
こんだけ遅くなったくせに今回ボリューム少ないです。

そんだけ紆余曲折したんです。
マジで。

ちなみにお気に入り登録数が４００件に到達しました。

やったね作者！！
読者が増え（ｒｙ

第２５箱「さすがだと」

～～～～前回のあらすじ～～～～

「しかし！

だからといって！

【俺】は

あなたに負けられない！」

→のシーンは、イメージ的には黒神めだかの

「しかしだからといって！

私は貴様を許さない！」

と、同じ感じです。

～～～～～～～～～～～～～～～～

「……。」

壁にめり込んだままめだかは主人公の姿をまじまじと見つめる。

「どうかしましたか？
会長さん？」

「……あまりこういうことは聞きたくはないのだが、
【貴様】、本当に人間か？」

「え？」

その言葉を聞いて、落ちていたガラスの破片を拾い自分の姿を確認してみる。

驚いたことに、髪の毛はスーパーサ〇ヤ人よろしく逆立っており目からは黒目が消え去り白目のみに、
そして、体は筋肉で膨れ上がっている。
パッと見はもはや完全にブ〇リーである。

「……もちろん。
これが【普通】ですよ。」

言いながらバキバキとガラス片を握り潰す。
粉末と化したガラス片が主人公の手からこぼれ、風に舞っていく。
その光景を見ながらめだかが口を開く。

「……そうか。
だったら――」

途端、脳に直接響くようなとてつもない轟音が周囲に響き渡る。

「――だったら私は！
【異常】でいいよ！！」

「ハハハッ、さすがだと誉めてやりたいところだァ！！」

今の轟音の正体が
主人公とめだかの拳と拳がぶつかった音だと言われたら、
果たして何人の人間が信じるであろうか？

・・・・・・

――半壊した校舎内――

「……う、うぅん？」

一人の生徒が目を覚ます。
雲仙冥利だ。

「ぐぅ！そ、そうだ……、
確か【あの一年】がオレを…。
【あの野郎】！！
今すぐに殺戮してや――――」

立ち上がろうとする雲仙。
そのとき！！
雲仙の体に電流（激痛）走る！！

「～～～～～～～ッ！！
……クソッ
まともに動けやしねー…。」

ゆっくりと、ゆっくりと、
体に走る激痛に耐えながら半壊した校舎の中から這い出す雲仙。

「あいつら……、
どこに行きやがった……？」

辺りを見回す。
遠くに気絶している生徒会メンバーが見える。

「生徒会の奴等がいる……
つーことはまだ黒神は遠くには行ってねーようだ。
なら、一体どこに――――」

視線を生徒会メンバーから外した瞬間。
雲仙の頬にポタリと雫が落ちる。

「あ？

雨か？」

雫を拭う。

赤い。

「！！

……これは、血か？」

反射的に空を見上げる。

「！！

………オイオイ、なんだアレ。

ドラゴンボールじゃあるまいしよォー……。」

『オラ！！！！』

『無駄！！！！』

見上げた先、雲仙の頭上５０メートルあたりの空中。

二つの人影がぶつかっていた。

「…………………。

一人は黒神だな。

もう一人は……【あいつ】か？
黒神はともかく【あいつ】のあの姿はなんだ……？」
さっき見た主人公とはまるで別人で判別が不可能だったが、
気絶する前の状況と今の状況を考えてみればそれが一番納得がいく
答えだった。
「あの黒神と渡り合ってやがる。
何モンだ【あいつ】……。
……いや。」
空中で拳を交す二人を見て雲仙がつぶやく。
「どっちもバケモンか………。」

〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜

しばらく雲仙は見物していた。
二体の化物の闘い…、
否、殴り合いを。
とても闘いと言えるものではなかった。
が、とてつもなかった。
とてつもないレベルの殴り合い。
一方が殴れば、まるで爆発でも起きたかのような爆音が響く。
一方が蹴れば、まるで落雷でも落ちたかのような雷音が轟く。
どちらも一歩も退かず、

どちらもまったく勢いが衰えず、もしかしたらこの殴り合いは永遠に続くのではないか？

……そう雲仙が思った時、
『それ』は突然訪れた。

――――主人公視点――――

「ハァッ……ハァッ……」

「ゼェッ……ゼェッ……」

「どう……ハァハァ……
しました？……ハァハァ
もう限界ですか会長さん？」

「ゼェ…ゼェ…ああ。
どうやら……ゼェゼェ
そう……らしい。
だが……それは【貴様】とて
同じだろう？」

「……ええ。」

素直にお互いが限界を認める。
虚勢を張る気力ももはや残ってないのだ。
そんな状況の中、
主人公が息を整え口を開く。

「……会長さん。
一つ提案があるんですけど。」

「……何だ。」

「このままじゃ埒があきません。
両方が潰れるのがオチです。」

「……『何だ』と聞いている。」

「ジャンケンで
決着つけませんか？」

「……は？」

主人公の唐突な提案に一瞬、思考が遅れるめだか。
シリアスな場面に似合わないすっとんきょうな声が出てしまう。

「【貴様】ッ……！！
何をふざけたことを！！
ここまでのことをして……
今さらジャンケンなどで決着をつけられるわけが――」

「ストーップ！！
話は最後まで聞いてくださいよ会長さん。」

ジャンケンで決着をつけるという提案に対して激昂するめだかだが、
主人公は軽く諫める。

「たしかにジャンケンって言いましたよ、たしかに。
でもジャンケンって言っても、小さな子供たちが
おやつの取り合いの時なんかにやるお遊びじゃない。」

そう言って主人公はゆっくりと、
しかしがっちりと、
右手で拳を作る。

「……正真正銘。
お互いの最後の力を振り絞った一発勝負、ですよ。」

「……なるほど。
得心いったよ。」

めだかも息を整える。

「……ルールは？」

「そうですね……。」

再びお互いの攻撃範囲内まで近付く両者。

「心理ジャンケンはどうです？」

「心理ジャンケン？」

「あれ？知らないんですか？
心理ジャンケンは事前にお互いの出す手を宣言するんです。
で、相手の宣言した手の裏をかいて違う手を出すか。
もしくはそのまま宣言通りの手を出すか。

その駆け引きが最高に盛り上がるジャンケンなんですよ。」

「なるほどな。」

「それ以外のルールは……
掛け声は『最初はグー』。
後出しはなし。
シンプルなことこの上ないポピュラーなルールで。」

「……わかった。」

「……それじゃあ、
準備はいいですか？」

「ああ。」

「…それじゃあ【俺】は『グー』を出します。」

「ならば私も『グー』を出そう。
……実際に手を出すときは違う手を出してもよいのだったな？」

両者が構える。

「……ええ。
（『違う手を出しても』ですか。
ははは、会長さん（あなた）がそんなことする筈ないじゃないですか……。
グーと宣言したならば必ずグーを出すのが会長さん（あなた）でしょう？）」

ゆっくり目を閉じ、物思いにふける主人公。

「……行くぞ。」

「……いつでも。
（まあ、だとしても……ね。）」

くわっと目を見開く。

「（ここは【俺】も素直にグーを出さなきゃ面白くならないですよね！！）」

「最！」

「初は！」

「「グー！！」」

お互いの命運を決めるジャンケンがここに幕を開ける。

第２５箱「さすがだと」（後書き）

オリジナルの作品も書いてみたいなと思う今日この頃なのです。

一応、いろいろ思いついてはいます。
どれもありきたりな設定ですけどね。

活動報告に載せときますので
「この作品読んでみたい」って方はこの作品の感想か、
活動報告に直接コメントください。

あ、この作品の感想も随時受け付けてますよ。
指摘でも、単純に面白いという感想でも甘んじて受けます。

第２６箱「お好きにどうぞ。」（前書き）

滞ってましたが一気に書き上げました。めだかＶＳ神天戦決着です。決着ですけど、閉幕じゃありません。もうちっとだけ続くんじゃ。

あ、ユニークが四万突破しました。お気に入り登録が４００突破しました。

サンキューでぃーす！

第２６箱「お好きにどうぞ。」

～～～～前回のあらすじ～～～～

「最！」

「初は！」

「「グー！！」」

「最初はグー」って掛け声考えたのって志村けんさんなんだってね。
本当かなぁ？

～～～～～～～～～～～～～～～～

「最！」

「初は！」

「「グー！！」」

拳を同時に突き出す。
乾坤一擲（けんこんいってき）。
まさにその言葉通りの状態。

「「ジャン！！
（この勝負で
すべてが決まる！！）」」

両者共にこれが最後の一撃になるであろうことはわかっていた。
だからこその一撃必殺。
全気力を拳に込める。

「（本当は、万が一にも【俺】なんかが
会長さんに勝ったりしちゃいけないんだろうけど……
こればっかりは、
この勝負ばっかりはどういう結末になるかわからない！！）」

命懸けの勝負。
命懸けのジャンケン。
相手は自分に敵意をむき出し。
しかもその相手はチート並の超強敵。

「（だっていうのに……、

やっぱり【俺】も立派な男の子なんだな……。）」

主人公の顔がゆっくりほころぶ。

「（勝ちたくって仕方がない！
使命だとか、役目だとかそんなこと気にせずに！
会長さんに勝ちたい！）」

「「ケン！！」」

同時に拳を振りかぶる。
あとは――――

「力一杯殴り抜けるだけ！！！」

――――ドクンッ

「――――！！」

動かない。
体が。
まったく。

「おいおい嘘だろ……。
『今』なのかよ……。」

めだかの拳が迫ってくる。
まるでスローモーションだ。
はっきりと目で追える。
しかし、体が反応できないのならいくら目で追えようと無意味。

めだかの拳が顔面にヒットする。
まるでスローモーションだ。
はっきりと目で追える。
しかし、食らってしまっては無意味。

感覚も強化されているため攻撃を受けてもすぐには吹っ飛ばない。
吹っ飛べない。

「（ああ、なるほど……。
感覚だけが鋭敏に研ぎ澄まされ体がその感覚に追い付かない…。
ゴールドエクスペリエンスに殴られたプチャラティは
こんな感じだったのかな？）」

自らの顔が歪んでいくのをしっかり感じ取りながら、
的はずれな感想を抱いて主人公は校舎内に吹っ飛んだ。

――雲仙視点――

「やっぱり……。
【あの一年】は負けたか…。
ケッ！まあ予想どおりの展開ではあったけどな。
そもそも十三組（ジュウサン）のオレが勝てなかったのに
一般生徒が勝てるワケねーんだよ！！あんな化物！！
……。」

言いながら雲仙は最後のジャンケン勝負を思い返す。

「【あいつ】……
最後の一撃の瞬間、拳を止めたように見えた……。」

もし、あの一撃が決まっていたならば……。
ふとそう思った雲仙は頭を振り、その考えを払う。

「あークソ！
何考えてんだオレは！
血ィ流し過ぎたか！？」

過ぎたことをグチグチ考えても仕方がない。
【あの一年】は負けた。
それが現実。
『もし』、『たら』、『れば』なんてものに意味はない。

「……とにかく様子を見に行ってやるか。」

なんだかんだ言いつつ『後輩思いの』雲仙は【あの一年】のもとへと歩きだす。

――――主人公視点――――

「……。
（ヒュー……ヒュー……）」

虫の息。
さっきの姿の面影はまるでない。
まるでボロ雑巾。

「（負けちゃったか……。）」

当初は《異名》だけでこの場を乗り切るつもりだった主人公。
しかし、それでも主人公（めだか）に勝てないと理解した彼は
ある一つの手段をとった。

「（やっぱり『スキルの重ね掛け』は無茶過ぎたかな……。
まさか《異名》
《壊倒乱撒（オールレッド）》
《至高柵護（オールグリーン）》の三つを重ねた状態で負けるなんて……
さすがに少しへこむな。）」

スキルの重ね掛けをすることで強化に次ぐ強化。
《壊倒乱撒》、《至高柵護》、
どちらも自らのパワー、ガードを極限まで高めるスキル。
《異名》の上からこの二つを重ねた結果がさっきまでの姿であり、
その『無茶』の皺寄せがジャンケンの瞬間に一気に押し寄せた。

「……まさに――」

「因果応報とはこのことだな。
【天神同級生】。」

主人公（めだか）が主人公（神天）にトドメを刺しにやってくる。

「人のセリフを……
取らないで……
くれませんか……。」

必死に憎たらしい笑顔を作る。

「……そんな状態でありながらまだ余裕があるようだな。
驚きも呆れも飛び越していっそ尊敬に値するよ。」

トドメの姿勢に入るめだか。

「……いいんですか会長さん？
【俺】がいなくなったら善吉っちゃんが悲しみますよ？
もがにゃんの友人が一人減っちゃいますよ？
阿久根先輩のかわいい後輩が消えちゃいますよ？」

イタチの最後っ屁。
こんな言葉に動揺はしないとはわかっている。
だがこんな時でもこんな調子なのが彼（神天）なのだ。

「見苦しいぞ【天神同級生】。
そんな言葉に心を乱される私ではないことは知ってるだろう？
そして、安心しろ。
【貴様】が思っている以上に善吉たちは強い。」

「そうですか。
それを聞いて安心しました。」
覚悟を決め目を閉じる。
「……一言だけ聞いてやる。」
「え？」
「最後に一言だけ聞いてやる。
言い残したいことはあるか？」
「……。」
虚をつかれ間抜けな表情になる。
「……ふふふ。
優しいんですね会長さん。
こんな【俺】の遺言を聞いてくれるなんて……。
非情になりきれてませんよ。」
「よし。
それでいいのだな。」
「え！？ちょっ！
今のはノーカンノーカン！」
「……ならさっさと言え。
私の右手が真っ赤に燃えて轟き叫ぶその前にな。」

「……。」

神天は考える。

考えた結果ある一言が浮かんだ。

「そうですね。

じゃあ本当に一言だけ。

この一言を……

会長さん、あなたからみんなに伝えてください。」

「その一言による。」

そして神天は遺言を残す。

『ごめんなさい。』

「！！！」

めだかの表情が変わる。

「……はい。
これで【俺】は思い残すことはなくなりました。
これで言いたいことは全部吐き出しました。
やっと憎悪の対象を取りのぞけますよ。
よかったですね会長さん。
さあ早くトドメを刺して。」

「ぐぅっ……！
き、【貴様】……！」

めだかの表情が崩れていく。
まるで育てた家畜を自らの手で捌く時のように悲しそうな、
イタズラばかりの悪ガキに腹を立てているような、
取り返しのつかない事態に陥って諦めたような、
自分の腑甲斐なさに呆れているような、
そんなわけのわからない表情になっていく。

「いまさら……！
いまさらその言葉をッ……！」

めだかの拳がわなわなと震える。

「……ええ、そうですね。まったくもっていまさらです。いまさらこんな反省の言葉を口にしたところで会長さんが許してくれるはずありませんよね。だってみんなを騙して、みんなを傷つけて、その上女の子である会長さんにまで手をあげて……、許されるはずがありません。だからそう、これはある種の自己嫌悪です。頼りがい

のある先輩を催眠術で操り、クラスメイトである友人を欺き、いたいな女の子を騙し、イケメンの先輩を翻弄し、生徒会長であるあなたを再起不能にしようとした自分への自己嫌悪です。ここまでの被害を出しておきながらまったく心が痛まない…罪悪感を感じない自分への自己嫌悪なんです。だからこの制裁は甘んじて受けます。だけど……ああ、悔しいなあ。悲観的で自分が大嫌いなどうしようもなく救いようもない【俺】でしたけどあなたとの闘いで目が覚めたんです。凄く清々しいんです。まるで心のなかの霧が晴れていくよう……。できることなら今まで迷惑をかけてきたすべての人たちに謝罪したい気分です。でも駄目なんですよね？許してもらえませんよね？そんな猶予は貰えませんよね？だってあなたにとって【俺】は憎いアンチキショウなんですもんね？今すぐにトドメを刺さなければならない相手なんですもんね？例え『ごめんなさい。』って謝ったとしても手遅れ。幕切れ。なんの意味もありゃしない。会長さんの怒りも収まるわけがない。だからさぁほら早く！トドメを刺してください！思い切ってやっちゃってください！威勢よく啖呵を切って、全身全霊でぶつかり合って、挙げ句ボロボロに負けて、身動き一つ取れない虫の息のこんな【俺】に！改心して反省して心を入れ替えて生まれ変わろうと決心したけどもはや手遅れなこの【俺】に！一切の手加減も情もない無慈悲な一撃のもと、トドメを刺して短い生涯を終わらせてください！さぁどうしたんですか？早くやってくださいさぁ早くさぁさぁさぁさぁさぁさぁさぁさぁさぁさぁさぁさぁさぁほらほらほらほらほらほらほらほらほらほらほらほらほらほら！」

めだかの表情がさらに歪む。

「く、うぅ、わ、私は……。

私は……。」

「やめろ【天神】。
やりすぎだ。」

「！！
善吉…、
阿久根書記…、
喜界島会計…。」

「（はぁ…やっと来てくれたよ。
遅すぎなんだってまったく。
無駄に長いセリフ言ってつかれちゃったぜ。）」

生徒会メンバーが駆け付けてきたことに安堵する神天。

「やれやれ……。
一体何事だいこれは？」

阿久根先輩。

「どうして【あなた】……
み、【神天クン】と会長さんが闘ってるの？」

もがにゃん。

「あとでキッチリ説明しろよ。
【天神】！」

……え～っと

「俺だよ俺！
人吉善吉！
なんで今ちょっとボケた！」

「はははは……。」

力なく笑い返す。

「ったく…。
……なぁめだかちゃん。」

善吉がめだかに向き直る。

「教えろよ。
何でお前が乱神モードになって
【天神】と闘ってたのかを。」

「……それは――」

言っていいものかどうかを考えあぐねているのだろう。
めだかが警戒しながら神天の顔をうかがう。

「（お好きにどうぞ。）」

ジェスチャーと表情で応える。

「……わかった。
貴様らには少々、重い内容になってしまうやもしれんが……。」

雲仙から敵意の標的を神天自身に変える時に使った出任せを
めだかはそのまま善吉たちに伝えた。

神天が催眠術を得意にしているということ。
その催眠術で雲仙を操っていたということ。

その話を聞いた善吉たちの表情は――

「「「・・・・・・・へ？」」」

ポカーンである。
……ですよねー。

「え？なに？
お前、それを信じたの？」

善吉が『マジかよ』という表情になる。

「さ、催眠術って……。」

喜界島が『嘘だよね？』という表情になる。

「いくらなんでも……。」

阿久根が『信じられない』という表情になる。

「「「突拍子なさすぎ！！」」」

三人のツッコミが半壊した校舎に響く。

第２６箱「お好きにどうぞ。」（後書き）

原作では凄い展開になってますよね。
安心院さんのメタ発言っぷりときたら……
毎回痺れっぱなしですよ（笑）

にしてもあの善吉中心の見開き二連続は笑った。

第27箱「敵だと思えねーよ。」

～～～前回までのあらすじ～～～

「「「突拍子なさすぎ！！」」」

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

「なるほどな。
【こいつ】が言うには催眠術とやらで雲仙…先輩を操り、その上で俺たちを襲わせた。
だからお前はそのことに腹を立てて【こいつ】とやり合ってたのか。」

善吉が改めてざっくり確認する。

「そうだ。」

頷きながらめだかは神天を睨み付ける。
いまだに乱神モード継続中である。

「【この男】を信用したのは間違いだったのだ！
前に一度貴様にも言っただろう善吉！
【この男】から『あの男』と同じものを感じたと！」

射抜くように神天を指差す。

「ああ、そういや言ってたな。
んな感じのこと…。」

「『あの男』？
『あの男』って誰のことだい？
僕の知ってる人物かな？」

めだかの剣幕に押され気味な善吉をフォローするため阿久根が割って入る。

「ああ、知ってますよもちろん。
つーかアンタの場合、知ってるって言うよりも『忘れたくても忘れられない』
っての方が正しい言い方でしょうけど。
むしろアンタが一番知ってるんじゃないんですか？
中学時代はかなり近しい位置にいたんですから。」

「？
俺が一番よく知ってる？
中学時代に近しい位置？
忘れたくても忘れられない？
……。
……あ！え！？いや！そんなまさか！」

「……今、先輩が思い描いてる人物と
【こいつ】はそっくりだってめだかちゃんは言うんです。」

「そっくりなのではない！
一緒なのだ！」

「まさか…、この場面で『あの人』のことを思い返すことになるとは思わなかったな……。」

「……。
あたしだけ仲間外れ…。」

【満身創痍の男】を巡って怒り心頭に発する者、呆れ返る者、動揺を隠せない者、会話についていけずに寂しがる者、の奇妙な図が完成した。

「あのさぁ…めだかちゃんよ。」

ざわつく空気を切り裂いて善吉が口を開く。

「お前、自分の言ってることが矛盾してるの気付いてるか？」

「矛盾？」

おおよそ想定外の反論をされ、めだかは少し戸惑う。

「私の何が矛盾していると言うのだ善吉！
【この男】は『あの男』と一緒で信じるだけ無駄なのだ！
それでも貴様は【この男】を庇うというのか！」

「そこだよ。」

「……は？」

「いや、べつに庇うとか庇わないとかじゃねーんだ実際。
どっちが正しいか、どっちを信じるかって言われりゃそりゃお前を信じる。
お前はいつだって正しいさ。
だけど矛盾したことを矛盾したままで割り切れるほど俺は大人じゃねーしな。」

「もったいぶらずに早く言え！
だから矛盾とは一体なんのことを言っている！？」

「信じてるじゃねーか、お前。」

「……え？」

「【こいつ】が言った『催眠術で雲仙先輩を操った』って話だよ。
その話を信じたからこそ、この有様なんだろ？」

「……ぁ。」

めだかの勢いが止まる。

「え？ど、どういうことだい？
さすがに僕でもついていけなくなってきたよ。」

「つまり、【こいつ】は『そんなに』悪い奴じゃないってことですよ阿久根先輩。
どんな目的があって、乱神モードのめだかちゃんに
正面から食って掛かるなんて暴挙に出たのかは知りませんけど…

…、

もし【こいつ】が『あいつ』と同じだってんなら
肌で感じ取れる気持ち悪さがあるはずですし、
そうでなくても心の底から同じだと思ってんのなら
そもそも『催眠術で操る』なんてオカルトまがいの話を信じるわけないんですよ。」

「……いやいや、もっともらしく説明してくれてるけど、
そりゃ誰だって信じないだろう?そんな話。」

「……相手があのめだかちゃんだとしてもですか?」

「…あぁ。」

急に納得する阿久根。

「『あいつ』は嘘ばかり吐く奴でしたからね。
さすがのめだかちゃんも『あいつ』の言うことのすべてを真に受けはしない。
だから【こいつ】＝『あいつ』だとするのなら
【こいつ】の言うことも信じないのが当然の反応。」

「だけどめだかさんは【彼】の話を信じた……。信じたということはつまり……。」

「頭では同じだと思っても、心で違うと感じてたってことだろ?めだかちゃん。」

善吉がめだかに向き直る。

「……。」

「ちょっ、ちょっと待って!!」

俯き押し黙るめだか。そこにに割って入ったのは喜界島だった。

「話の七割はよくわかんなかったけど……、
それって『黒神さんが冷静にものを考えられる状況だったらの話』だよね？
でもさっきまでの黒神さんはとても冷静とは言えなかった…。
それじゃあ適格な判断なんてくだせないんじゃないの？」

「いや、それでもめだかちゃんは信じたさ。」

「ど、どうしてそんなこと言えるの？」

「確かにめだかちゃんの乱神モードは、いうなれば『暴走』。
もとい『爆走』だ。だけどべつに意識がないわけじゃない。
現に、今さっきだってめだかちゃんは【こいつ】にトドメを刺さずに
遺言を聞いてやるとか余裕を見せてただろ？」

「……むぅ。」

言い負かされたような気がして若干むくれる喜界島。

「…なぁ、めだかちゃん。」

「……。」

「俺は全部見たわけじゃねーから偉そうなことは言えねーよ。
だけどもう一度冷静になって、【こいつ】の行動を思い返してみないか？
【こいつ】の行動は良い意味でも悪い意味でも何か裏がありそうな気がすんだ。」

「……裏？」

善吉に諭され、一連のことを思い返してみるめだか。

「事の発端は音楽室だった…。
（たしか【この男】は…、何の前触れもなくやってきた。
そして生徒会の皆が風紀委員に狙われていると告げると
何をするでもなくただ音楽室をうろつき、
そして変わり果てたオーケストラ部員たちを眺めていた…。）」

はたと何かに感付くめだか。

「（もしかして私に『それ』を教えた後もなかなか音楽室を去らなかったのは、
元々の目的がオーケストラ部員を助けようとしていたから…？
私に『それ』を教えることは二の次で……。）」

「……めだかちゃん？」

「（生徒会室での爆発！
なぜ【この男】はあのタイミングで生徒会室にやってきた！？
もしや雲仙二年生の奇襲に気付き、我々にそれを知らせ避難させるため！？

なぜか【この男】は雲仙二年生の武器の正体も知っていたようだった…。
その武器の種類に火薬玉があることを教えようとしてくれたのでは！？）」

「め、めだかさん……？」

「（雲仙二年生へのトドメの時！
『実験台の保護』など言っていたがよくよく考えてみれば
実験台などどうとでも都合はつくはず…。
しかし【この男】は！わざわざ瀕死の雲仙二年生を庇い、私の拳を自ら受けに…。
…極め付けは『催眠術の話』。
もし善吉の言うとおりで、そのすべてが嘘偽りなのだとすれば…
【この男】は！
嘘までついて雲仙二年生へと向けた私の敵意を自分に向けたというのか！？）」

「大丈夫？黒神さん？なんだか小刻みに震えてるけど……。」

「……とこは」

「「「は？」」」

ポツリとめだかが何かつぶやく。

「【天神同級生】！！
【貴様】という男はぁぁ！！」

突如、めだかが叫びながら神天に飛びかかる。

「「「！！」」」

あまりの突然の出来事に反応が遅れてしまう三人。

「めだかちゃん！！」
「めだかさん！！」
「黒神さん！！」

「感
動
し
た
！」

「「「「え？」」」」

ｂｙ生徒会メンバー＋神天

あまりの突然の出来事に反応が遅れてしまう四人。
神天の肩を鷲掴みながらめだかは神天に笑顔を向けている。
気付けば乱神モードもどこへやらであった。

「【貴様】がそれほどまでに友を大切に思っていたとは知らなかった！
いや、友だけではない！
自らを被爆させた、いわば敵である雲仙二年生までをも守ろうとするとは……。
まさに天晴れ！」

わっはっはと笑いながらバシバシと神天を叩く。

「（……痛ぇ。）」

もはやツッコむ力も残っていない神天の頭に浮かぶのはこの一言だ。

〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰

その様子を遠目から眺める血塗れ白虎一匹。
雲仙冥利。

「………
（あそこまで暴走しておきながら一瞬で何事もなかったかの様に原状回復しやがった…否！
あのレベルまで心が折れかけて自力での復活なんざできるわけがねぇ
つまり…『戻った』んじゃなく『戻された』のか！？
だとしたら戻したのは――――）」

視線を善吉へとやる雲仙。

～～～～～～～～～～～～～～～～

「【貴様】
生徒会に入らないか？」

「……あ？」

いきなりの質問にまぬけな声で返してしまう神天。
決して、原作の誰かさんみたいな凶悪な「あ？」ではない。

「もとより副会長には私に敵対的な者についてほしかったのだ。
不知火には断られてしまったが
考えてみればここまで私と張り合った【貴様】は中々に適任ではないか！」

「……。

（あぁ、そっか。
今の【俺】の状況って原作での雲仙先輩のポジションにまんまハマるじゃん。
会長さんとのバトルに必死で気付かなかった…。）
嬉しい申し出ではありますけど…謹んで遠慮させて戴きます。」

「？
なぜだ？」

「べつに…。
単純にやりたくないってのもありますけど……。」

言いながら視線を斜め右前方、生徒会の後方に向ける。

「……！！
（こっちを見た？
気付かれてたか？）」
小さな白虎が慌てて隠れるのが見えた。
「……まあ【俺】よりも適任な人がいるから、ですかね。」
「……適任、か。」
めだかも気付いているようだ。
「…それにね会長さん。
会長さんは敵対的な奴に副会長になってほしいって言うけど…
【俺】は会長さんのこと敵だなんてとても思えません。
思ってもいません。」
「【天神同級生】…。」
「……実はこれが副会長の座を断る一番の理由だったりします。」
「……そうか、残念だ。
だが私はこれからも【貴様】を敵だと思い続けるよ。」
「……。」
「今回はやり過ぎた。すまなかったな【天神同級生】。
私が悪かったよ。
【貴様】には己の未熟さを学ばせてもらった。
これからはお互いに切磋琢磨し、共に精進しようではないか。」

一方的にそう言い残しめだかは雲仙のもとに向か――
おうとするが急に立ち止まり、神天に振り返る。

「【天神同級生】！」

「……？」

「この勝負！
引き分け（あいこ）だ！」

「……！
……ははは。」

そして今度こそ、雲仙のもとへとめだかは向かった。

「……。」

「【お前】も惚れちまったか？」

「……びっくりさせないでよ善吉っちゃん。」

「全然驚いてねーじゃねーか、なんて不粋なツッコミはしないぜ。
……悪かったな。」

「……どうしたのさ。」

神天は瓦礫に背中からもたれかかったまま。
善吉はその瓦礫に座る。

「俺達がもう少し早く目を覚ましてりゃ――」

「『【お前】をこんな目に合わせずに済んだのに』なんて安い謝罪は聞きたくないぜ。」

「そうかよ……。

…じゃあ次は感謝するぜ。」

「…は？」

「……実質的にめだかちゃんを止めたのはほとんど【お前】だ。

ボロボロになりながらもな。

……めだかちゃんを守れる奴になりたいなんて言ってる自分が情けねーよ。」

「……善吉っちゃん。」

「だから！」

「！」

「だから…、【お前】は誇りに思っていいと思う。

流れた血。【お前】の傷。めだかちゃんにつけた傷を。

『あの黒神めだか』を止めた証として、勲章としてもっていいと思う。」

善吉の目はまっすぐ神天を見ていた。

「……。」

「……。
ほら、立てるか？」

ほんの少し赤面した顔を隠すように善吉が手を差し伸べる。

「……サンキュ。」

手を掴み立ち上がる。
まだ足はおぼつかない。

「いい病院紹介してやるよ。
肩貸せ。」

「…いや、いいよ。
場所だけ教えて。
一人で行けるから。」

「はぁ！？何言ってんだ！
そんなケガしてんのに――」

「善吉っちゃん！」

「！」

「……男の子が意地張って一人で頑張れるって言ってんだよ？」

「……わかったよ。
……また明日な。」

「…うん。また明日。」

「……。」

心配そうに神天の方を見ながら善吉はめだか達と共に去った。

「……誇り、証、勲章、か。
……あははは。」

遠くなっためだか達の背を眺めながら、
傷だらけの体に手を当てる。
そして目をそっと閉じ、あらためて思う。

「うん、いらないなやっぱり。」

体にかざした手をサッと一振り。
一気に体中の傷が霧散していく。
音楽室で使用した《あのスキル》だ。

「まったく、善吉っちゃんたらいきなり背後に現れんだもん。
びっくりしちゃうぜ。
危うく《あのスキル》が知られるとこだった。」

雲仙や鬼瀬、不知火には見られても何ら問題はない。
重要なキャラクターには変わりないがあのキャラたちはストーリーに深く関わるという感じでもない。

「でもさすがに生徒会メンバーはなあー。まっずいよなあー。
てゆーか会長さんに面と向かって『お前は敵』宣言されたし。
あんなの敵に回したくないし。
敵だと思えねーよ。ただの歩く自動喧嘩マシンだろアレ。」

首を鳴らしながら体に不調がないか簡単に確認する。
めだかとのジャンケン勝負の際に訪れた『不具合』もどこ吹く風。

「にしても…《異名》に《壊倒乱撒》に《至高柵護》。
戦闘特化三大スキルを重ね掛け、それだけでも無茶なのに…。
『プラス洗脳系スキル一個』の合計四つを
重ね掛けするのはさすがに無理があったな～。」

ともかくこれで『雲仙が排除される』というＩＦ（もしも）を回避した。

「これが第一歩…かな。」

突如『めだかボックス』の世界に出現した謎の勢力。
『侵攻役／ルート』。
どれほどの規模で、どれほどの力を持ち、どのようなメンバーがいるのか。
すべてが不明。

「…はぁ～。」

神天はいつ終わるかもわからない任務に若干の不安を覚えながら、崩れた校舎を一瞥し下校した。

第27箱「敵だと思えねーよ。」（後書き）

次回予告

神＜　というワケで何の脈絡もなく今回から次回予告しまっす！

本当に何の脈絡もないな。　＞善

神＜　とりあえず今回は最後の方で新しいスキルが登場しましたね。それがこれ。

新スキル
・洗脳系
《憎断線／インヘイト》
自分がどれだけ相手の憎悪の対象であろうとも、刃や拳などのつばぜり合い・殴り合いといった近接戦闘を行うことでそれを打ち消すことができる。殴り殴られの応酬が激しいほど効果大。

神＜　っていう少年漫画の王道的展開をおもいっきり皮肉っ

たスキルです。

このスキルを使いながらめ　＞善だかちゃんと闘ったからめだかちゃんの【お前】への憎悪がなくなったのか。

神＜　ソユコトー。

いきなりネタ放り込むんじ　＞善ゃねーよ。対処に困んだろ。

神＜　というワケで次回は原作介入は一旦お休みでオリジナルルートに入る予定です。

第２８箱「震えが止まんないな」（前書き）

オリジナルを執筆する予定でしたが、やめました。
いやまあオリジナルを書くことは書くつもりです。
でも意外と自分でも面白そうな設定に出来上がったので暖めておこうかと。

ここに投稿した小説をあらためて原稿にして、出版社に送っても問題ないのであればここにも投稿したいです。
『他社に送った原稿は受け付けません』って出版社もありますからね。このルールに引っ掛かるかどうか微妙ですけど。

アニメ見ながらこの文章打ってるのでちょっと変な感じになっちゃってるかも。

第２８箱「震えが止まんないな」

「……ねむぅ」
朝焼けが山陰から差し込み始め、雀たちのさえずりが聞こえる。
「……なんでこんな時間に学校来ちゃったんだろ【俺】？」
携帯を開き、時間をあらためて見てみる。
「６時……、めざましテレビ始まる時間じゃん」
早くに目が覚めてしまい、特にやることもなかったのでとりあえず登校した神天。
しかしいざやってきてみれば登校している生徒はゼロ。
どころか門も閉まっていた。
のでよじ登って入り込んだ。
「……今、『不法侵入じゃねーか！！』って聞こえた気がするけど気のせいだよな」
独り言もそこそこに、ワンセグを起動してめざましテレビを見てみる。
『――○○県××市の箱庭学園で爆発事故が――』
「……報道されてる」
先日の風紀委員長生徒会襲撃事件がニュースに取り沙汰されていた。
『化学薬品の実験中に起きた不運な事故』として。
不知火理事長が情報操作したのであろう。
「……なんでもありなんだな」
ワンセグを起動したまま学園の中庭を歩く。
まだ生徒がいないので周りに注意することなく歩き回れる。

／……携帯扱いながら歩くなんて、マナーがなっとらんのやなぁ／
「！」

背後から声。
／こんな早朝に登校してきたからどんな優等生かと思えば……／
「……どちらさん？」
／とりあえずこっち向きぃ。うちは【あんさん】の背中と話しとるわけちゃう／
「ごめんなさーい」おどけながら振り返る。
「で？　あなたはどちらさん？」
／名前を尋ねる時はまず自分から……聞いたことあらへん？／
「いやいや、ここはレディファーストかなぁって」
／レディファーストはそういう意味ちゃうよ。あとうちは先輩や。敬語使いぃ／
「……はーい」
／うちは【曲里　斜（まがりなな）】。二年五組や。／
「あ、名乗るんですか」
／先輩やからね／
「で、その曲里先輩が【俺】に一体――」
／ちょお待ちぃ／
「……なんです？」
／うちは名乗ったんやからそっちも名乗らなあかんのちゃう？／
「またまたぁー！何言っちゃってんですか曲里先パーイ！
わざわざ名乗らなくても【俺】の名前知ってるくせにー！」
／は？何を言うて――／
「知ってるハズですよ」
／……え？／
「侵攻役でしょ？曲里先輩」
／る、るーと？／
「誤魔化さなくてもいいですよ。もうわかってますから。
そんな変わった喋り方と名前の人がただのモブなワケがない」
／……それだけ？

それだけなんか？
うちをそのルートとかいうのだと思う根拠は／
曲里の雰囲気が変わる。
知らぬ存ぜぬで通す姿勢は変わらないが、確実に戦闘態勢に入った。
「まさか！それだけなワケないでしょ」
／じゃあなんで？／
「あなたの『関西弁』。そしてあなたが『先輩』だという事実。
その二つがあなたを侵攻役だと決定づけました」／関西弁と、うちが先輩やという事実？／
「ええ。実は知り合いの先輩に関西弁を話す方がいましてね。
その先輩が言ってました」
／……／
「『ウチが知っとる中で関西弁しゃべっとる生徒はこの学園にはおらん』…って」
／でもそれはその人が知っとる中で、の話なんやろ？
もしかしたらその人はうちのこと知らへんかも／
「それはないです」
／……／
「あなた二年五組って言いましたよね？
二年生ならあの人はあなたのことを知ってるハズです」
／……／
「あの人は随分とコミュ力があるようですからね。
多分勧誘するなら……あ、その人柔道部なんです」
／……／
「勧誘するならその年の新入生のほぼ全員に声をかけてるんじゃないでしょうか？
柔道部には女子も普通にいましたし、
女の子を勧誘してもなんら不思議じゃありません」
／……／
「その人は三年生ですから今の二年生にも声をかけてるでしょう。

その人の記憶に残らないなんておかしいですよね？」
／その人がよっぽどの記憶力を誇っているのならば……ね／
「いえ、べつに記憶力はよくなくても覚えてると思いますよ」
／え？／
「だって自分以外学園に一人もいない関西弁が現われたら……
誰だって強く印象に残るものでしょう？」
／……／
「あなたが【俺】と同じ一年生だったのなら
あなたの正体に気付かずに不意討たれてたかもしれません。
その人は今年の一年生全員までにはまだ声をかけ終わってないでしょうし」
／……／
「まあそんなトコです」
／……なんや聞いとったのとはえらい違うなぁ。
うちの聞いた話やとただのとぼけた高校生っちゅう話やったんやけど／
「……侵攻役の曲里先輩が【俺】に接触してきたってことは」
／ええ、消えてもらいます／
「わーお、単刀直入ー」
手のなかの携帯に目をやる。
7時前2分。
めざましテレビの占いの時間。

『ごめんなさーい。
最下位はー――』

「もう最下位かよ……」
／こんな時でも携帯……。

こりゃもう先輩として礼儀を教えてやらんといかんなぁ。
覚悟してぇや／
「……おいおい」
携帯の画面いっぱいにみずがめ座の文字が表示されていた。

「震えが止まんないな」
【俺】は携帯を閉じた。

第２８箱「震えが止まんないな」（後書き）

出ました新キャラ。
そして侵攻役。
曲里（まがり）　斜（ななめ）。

鍵括弧のかわりに斜線です。
どこか『斜に構えた』キャラって考えのもと生まれました。

曲里はたしか福岡の地名だったような気が。

第２９箱「『たまたまそこに』」（前書き）

前回久しぶりに投稿したついでにこの作品を一話から見なおしてきました。

顔から火が出そうになりました。
酷い！なんだあの出来は！
過去の俺はなんであんな完成度で投稿しようと思ったんだ！

あんな出来じゃ一、二話で読者に見限られちゃいますよ。
書き直したい。でも新しい話も投稿していきたい。
そんなジレンマ。

第２９箱「『たまたまそこに』」

「なんなんだ……」
／ほらほら、どぉしたんや？
早う動かな次がくるよ？／
「さっきっから……」
／おっと惜しいなぁ。
もう少しで当たっとったのに／
「曲里先輩は怪しい動きは見せてないのに……」
／さぁて次はなにがくるぅ？／
「……なんでなんだ？」
異常事態。
その言葉以外見つからない。
神天は今、走って曲里から距離を取ろうとしている。
そして曲里はそれを歩いて追う。『走る男』を『歩く女』が追っている。
なのに――。
「距離が拡がらない……！」

～～～～～～～～～～～～～～～～～～～～

戦闘開始と同時に神天は曲里に飛びかかった。
先手必勝と牽制の意味を込めて。
しかしそれは為されなかった。
走りだした瞬間、石畳の段差につまずき転んだ。殊更豪快に。
しかし転んだだけで済めばただのドジ。
不可思議はここから始まった。

・転んだ瞬間中庭の木が折れ、神天に倒れてくる。間一髪で跳ね起きこれを回避。
・回避した先、低空飛行していた鳩が後頭部を直撃。
・たまらずよろめき地面に手をつくも、先の尖った石があり手を負傷。
・手に刺さった尖石を曲里に投げつける。同時に後頭部を直撃した鳩が快復。
飛び立った鳩が神天と曲里の間に割って入り、尖石に当たる。
鳩、再び墜落。曲里、無傷。

ここで初めて異常な事態に気付いた神天は、一度曲里から逃走。
……が――。

〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰〰

「うおっ!?」
／あはははは、危ないなぁ～。
またこけてしもうたなぁ～。／
「痛つつ……。
(クソッ、さっきっからまるで見えない力にでも邪魔されてるみたいだ。
おかげで走っても走っても全然進みゃしない)」
振り向くと後ろにはすでに曲里が立っていた。
／どないしたん?
もう逃げへんの?／
「……。
(曲里先輩はスキルを使ってる。それは間違いない)」
／……何が起こっとるのかさっぱりわからん、ちゅう顔しとるな／
「ええ、まったく。

（問題はそれが一体どんなスキルなのか、だ）」
／あはは、素直なんやなぁ。
そういうトコ嫌いやないよ／
「そうですか？
ならこの素直さに免じて先輩がどんなスキル持ってるか教えてくださいよ」
／え？う～ん、そやなぁ……。
べつにええよ、教えても／
「え、いいの！？」
予想外の返答に逆に驚く神天。
／なんや？
そっちから聞いてきたんやろ？
なにを驚くことがあんの？／
「まさか教えてくれるとは思わなかったんで……」
／隠しとるワケちゃうからなぁ。
……それに／
曲里の顔に不敵な笑みが浮かぶ。
／うちのスキルを教えたところで【あんさん】はうちには絶対に勝てへんよ／
「……えらい自信ですね」
／自信ちゃう、確信や。
【あんさん】がたとえどんなスキルを使おうとも、
どんな攻撃を仕掛けようとも、『世界がそれを邪魔する』んや／
「『世界が邪魔する』？」
／そうや／
突然両腕を広げ、空を仰ぎ始める曲里。
／……【あんさん】は経験したことあらへん？
『何をやっても上手くいかない失敗ばかりの日』いうんを／
「……」
／そういう時ほど人はこう言う。

『運が悪い』……ってな／
空を仰ぐのをやめ神天に視線を向ける。
「『運が悪い』……？
……あ！！
ま、まさか……！」
／わかった？
そう、多分今【あんさん】が考えとる答えが正解や／
「……」
／『自分以外のその他の運を強制的に悪くする』ことができる／
「……っ！」
／それがうちのスキル《凶調整＝チューナーバス》の正体や／
「……どおりで」
神天の中で先ほどの出来事がすべて繋がる。
「やっと納得いきましたよ。
『運悪く』先輩の目の前で転び
『運悪く』そこに木が倒れ
避ければ『運悪く』鳩が直撃し
よろけて手をつき『運悪く』石が刺さった、と。
そういうワケですね？」
／ふふ、正解。
なんも不思議なことあらへん。
すべて『偶然』が重なって起きただけのただの『不運』や／
「『気持ちよく飛行中に【俺】の後ろ頭にぶつかり墜落』。
『いざ再び飛び立とうするも、とばっちりを受け再び墜落』。
……【俺】だけじゃなく『鳩』の運まで悪くしてるあたり、抜け目ないですね」
／言うたやろ？『自身以外のその他の運を悪くする』んや。
命あるものすべて、一切例外にはならへんよ／
「タチの悪いラッキーマンみたいなもんですか」
／……その例えはようわからん。

それよりもええんか？／
「はい？」
／その場に座り込んでてええんかって聞いとるんや。
そろそろ次くるんとちゃう？／
「！！」
慌ててその場から飛び退く神天。

／あちゃぁ～、残念。
『それはあかんかった』わ／
直後、神天は《凶調整》の真の恐ろしさを味わうこととなった。

曲里とは逆、後方に飛び退いた。
そして着地。
着地の瞬間。
〈ズドガガガガガ！！〉
「うあああああああ！！」
断末魔。神天の断末魔が轟く。
／うわぁ、えげつない。
まさか『鉄柱が降ってくる』とはなぁ……。
しかも『横』やのうて『縦』になんて……神さんも残酷な真似しはるわ／
「うあ、ああぐうぅ……。
な、なんで鉄柱が空から……」
／ん～、全然関係ない話やけどしてもええかな？
最近爆発事故が起きて生徒会室周辺がボロボロになったやろ？
それを修繕する為の資材を学園内に運び込んだらしいんやけど

如何せん爆発の規模が大きすぎたらしゅうて資材の量も相当になったそうや。
そんな大量な資材置いとったら生徒達の邪魔になる思わん？思うやろ？
先生方もそう思たらしいわ。
やから臨時の資材置場として学園の屋上が使われとるんやって。
……今日の午前中だけ、ちょうどこの上あたりの屋上を／
「ご、午前中だけ……。
この上の……屋上を……？」
／そう／
曲里が神天の頭上を見上げる。
／あ～あ、ほら見てみぃ。
屋上のフェンス、破れてるわ。
鉄柱が立て掛けてあったんやわ、きっと。
普通重たいもんは横に寝かせて置くもんなんになぁ。
物臭な奴が面倒がって立て掛けたまんまにしてしもたんや。
んで、重さに耐えられへんくなったフェンスが破れて……。
……『たまたまそこに』落ちてきたちゅうワケや。
いやはや、なんちゅうか【あんさん】も随分――／

／『運が悪い』もんやなぁ。
ふふふふふ……／

第２９箱「『たまたまそこに』」（後書き）

次回予告

神＜　イエーイ！前々回から次回
予告するとか言って即効忘
れてたぜー！

なんでそないテンション高　＞斜
いんかは知らんけど……、
うちのキャラちょっと悪過
ぎちゃう？

神＜　いいじゃん、悪女キャラ。
似合ってましたよ。

いやでも、それにしたって　＞斜
やなぁ……。

神＜　というワケで！
悪女極まりない曲里先輩の
汚い策略にハマってしまっ
た【俺】は大ピンチ！！
しかし【俺】は諦めずに考
えた。『早朝』『学園内』
『雲仙冥利のリタイア』。
この３つのキーワードから
浮かび上がる一筋の希望！

果たして【俺】は悪女・曲里斜を倒すことができるのだろうか！？
待て、次回！

言葉の暴力や……（泣）　＞斜

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1907t/

特別でも異常者でも過負荷でも悪平等でもなく・・・？

2011年11月10日08時14分発行